
チキン異世界漫遊記

手羽先

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チキン異世界漫遊記

【Nコード】

N62590

【作者名】

手羽先

【あらすじ】

よく分からないが、俺は神々の手違いで死んでしまったらしい。成り行きのまま異世界に転生することになった俺に、彼らは沢山の加護をくれた。チキンな俺には戦闘なんて無理なので、保身用の加護ばかりになってしまったけど別にいいよね。第二の人生を平穏かつ安全に生きるため、俺の異世界での奮闘が始まる。

人生常にイージーモードな彼が降り立った、見知らぬ世界は…？

初投稿、初小説です。誤字脱字、おかしい文章の指摘などのご協力
よろしく願います。

基本的に日曜日にまとめて投稿していきます。

現在書き直し作業中につき投稿停滞中です。申し訳ありません。

世界に戀された少年の始まり。
(前書き)

初投稿・初小説です。

誤字脱字の指摘大歓迎です。

これからよろしくお願いします。

世界に戀された少年の始まり。

これからも変わらない毎日が続いていくと思っていたんだ。

朝は目覚まし時計のアラームに叩き起こされ、身支度をして、両親と一緒に朝食を食べる。

登校して、退屈な授業を受けて、友達と他愛もない話をして、そして家に帰る。

家には専業主婦の母さんが待っていて、お帰りなさいと玄関で俺を迎えてくれる。

自分に与えられた部屋に入り、私服に着替えてからリビングに戻っておやつを食べる。

腹ごしらえが終わったら、自室に戻って、いまいち理解できなかった数学の復習。

父さんが仕事から帰ってくる時間に合わせて夕食が出来上がるように、母さんがキッチンで動きまわっている音を聞きながら数式を解いていく。

そして日が暮れると父さんが帰ってきて、俺も勉強を切り上げて食卓に着く。

・・・このおかず、美味しいな。今日も仕事が大変だったよ。お勉強頑張ってるわね、受験生。

食事が終わったら、父さんはテレビの野球の応援に夢中になり、母さんは食器を洗いにキッチンへ。

俺は風呂に入って、のんびりと読書をしてから、明日もある学校の準備を終わらせ、父さんと母さんにお休みを言って寝る。

高校生活も3年目に突入してしばらく。受験生は皆、志望大学に合格するためにコツコツと勉強をする毎日を送っている。クラスの不真面目な生徒でさえ（今更真剣になっても手遅れなのに）進路について考え始める時期なのだ。そこそこ優秀な生徒という微妙な評価をされている俺も入試に向けて勉強している。

大学に入って卒業して、就職して・・・もしかしたら、恋愛というものをして結婚するかもしれない。そもそも大学に合格するかさえ分からないけれど、漠然とした未来予想図を実現させるために、俺は確かに努力していた。

強くなくても、立派じゃなくても、優しい両親のような大人になりたかったから。

そしてまた、喧しいアラームの音を合図に、いつもと変わらない日常が始まる・・・はずだったのに。

「本当に申し訳ありません。我々の不手際で、貴方という存在をこの世界から消失させてしまいました」

何処までも続いていく白の空間に、いつの間にか俺と彼女は存在していた。

長い真っ白な髪と黄金の眼、俺の目が潰れるかと思ったほど美しい容姿をした彼女は、自らを神と名乗った。

宗教でよくある全知全能の唯一神ではなく、世界を管理するものという意味での神らしい。

世界は無数に存在していて、複数の神が一つの世界を円滑に運営する為に働いているんだそうだ。

なんかよく理解できないが大変そうなので、お疲れ様ですと言っておいた。

すると彼女はふわりと微笑んで、ありがとございますと返してくれた。

とつても可愛かった。

- - 閑話休題

さて、可愛い神様曰く、神とはとても一概にはいえず、様々な個性をもっているんだそうだ。

多種多様な神々を大雑把に分けると2種類になるらしい。

世界を善き方向に廻す神 - - 善き神。

世界を悪しき方向に乱す神 - - 邪神。

読んで字の如くである。

付け加えると彼女は善き神としてかなりの年季を重ねているという。つまりはベテランなのだ。

そんな彼女は、とある邪神が人間の輪廻の輪を乱し、世界の境界を乱している事件を解決しよう上司に命じられた。

ベテランな彼女は、問題の邪神を早々に捕まえ神々の牢獄にブチ込んで終わったので、事件の後始末をするために世界を精査した。

そして、世界が歪んでいることに気がついた。

そのまま放置していたら世界が壊れてしまう程大きな歪みに、彼女

は上司に連絡を入れ、応援に駆け付けた善き神々が総動員で世界の修正を試みた。

結果は成功。

世界は壊れず、その中で営みを続ける命たちもそのまま続いている。

ただ一人、俺だけを除いて。

「この事件は、邪神が自らの暇つぶしのために人間を殺し、その魂を異界に転生させたことが原因です。死すべきでは無い者の死で輪廻の輪が狂い、繋がらないはずの異界同士が繋げられ、その縁を辿り融合しかけた。我々は歪みの修正を行うことで、2つの世界を引き剥がしました。かの異界はこれからこの世界を徐々に離れて行きます。世界は壊れません。しかし - - 縁が断たれる直前に、貴方の魂に異界が惹かれてしまったのです。一目惚れと考えるもらうと分かりやすいかもしれません。異界は貴方を手に入れるため、この世界から攫ったのです。貴方が欠けて空いてしまった穴は、世界の自動修正現象で塞がれてしまいました。貴方という人間は最初から存在しなかったということになっています。・・・貴方は死んでしまっただけです」

彼女の綺麗な声が、俺の死を告げた。

普通なら混乱して取り乱してしまうか、性質の悪い冗談だと一蹴する所のはずだが、今の俺はなぜか納得していた。

そうか死んだのか。それだけである。

人間死んでしまうと案外驚いたりしないらしい。

ただ俺の死亡原因を作りだした邪神とやらを一発殴ってやりたいく

らいには怒っていたし、両親にも友人たちにも二度と会えないのかと思うと悲しかった。

まあ一方的とはいえ初めての恋愛沙汰のお相手が、見知らぬ強引な性格の異界であるということには悲喜交々だった。

とりあえず俺はこれからどうなるのかが気になり、その問いに彼女は誠実に答えてくれた。

すでに失われた肉体の代わりに、転生という形で新しい肉体を手に入れて異界に渡る事になるそう。

現在の俺は異界に引きずられている真つ最中らしい。

それを彼女の仲間である神々が、一時的に庇護下においてこの話し合いの時間を稼いでくれているという。(そうしないと留める力と引く力で俺という存在はあつという間に碎け散ってしまうそうだ)当初彼らは加護を与えて俺の存在を強化した後、引く力に対抗して強引に引き剥がすという計画をたてていた。

しかし驚くべきことに、俺を留めた瞬間世界から異界が離れて行く速度が明確に遅くなってしまうらしい。

引き剥がすのは無理。強引に俺を世界の中に戻すと、それを追って再び異界が融合しかねない。

そう判断した彼らは、俺を異界に引き渡すことを決定した。

そこまで聞いた俺の気分はドナドナの子牛のようだったのは言うまでもない。

ただどさすがは善き神々と呼ばれるだけはある。

今まで見守ってきた無数のもの一つとはいえ、俺という存在が強引に異界に連れ去られることを彼らは深く悲しみ、見送ることしかできない自分たちの無力さに落胆した。

そしてせめて連れて行かれる異界では幸せになってもらおうと、俺にいくつかの加護を授けることにしたのだという。

彼女が言うには与えられる加護は俺が自由に選んでいいらしい。

これには今まで、へえそうなんだ神様つてやっぱり優しいなあ、でも俺を殺したのも神様だから差し引き0って所かな、などというくだらない事を考えていた俺も真剣にならざるをえなかった。

なんせ第二の人生を決める大切な指針である。しかも彼女曰く俺の行き先である異界はファンタジーな世界で危険がいつぱいらしい。自慢ではないが俺はチキンだ。自ら危険に飛び込んでいく奴らなんて気が狂っているとか思えない。

なんだか嫁入りの饞別みたいだなんて考えないようにしつつ、俺は幸せで安全で楽な生活を送るために、授けてもらおう加護を考え始めた。

彼女とも色々と相談しながら、最終的にもらおう加護を7つまでに絞り込んだ。

まずは神懸かっていると見えるほど美しい容姿。これは彼女の美しい容姿を見て、美しさとは武器になると認識したからである。

そしてそれから派生した加護として、最も美しくなったタイミングでの不老不死化。

チキンな俺としては二度も死ぬのは御免なのである。

美しさを留めたまま永遠を生きれば、実は俺美の神なんだとか何とか偽って世の中を渡り歩くことも可能だろうという打算もある。うん、自分でも分かっているよ気色悪いって。でも俺は楽に生きていきたいんだから仕方ない。

次に周囲の意思を持つものの無意識下に訴えて、庇護欲を誘う加護だ。

これは人間や獣も、精霊というファンタジーな存在でさえ関係無く作用する、結構えげつないものだ。

さっきの美貌の加護のせいで妬みをかいてもしたら本末転倒である。保険をかけておいて損はない。

四つ目は危険に備えて守護者を召喚する力。呼ばれる守護者は彼女が用意してくれるらしい。

そんなものを貰うくらいなら自分で戦えるような力を貰えばいいじゃないか？

今まで平和で安全な日本で学生してた俺が戦えるわけないし、グロイ光景を見ようものなら卒倒する自信がある。

餅は餅屋である。

五つ目は他の生き物を俺の眷属として造り変える力。不老不死の俺と同じ不老不死になり、共に歩んでくれる存在を生み出す力だ。

当たり前のことだが人は1人じゃ生きていけない。それはこれから不老不死になる俺でも例外ではない。

この加護を望んだとき彼女は少し悩んでいた。

本来生命の法則に逆らい輪廻の循環を歪める事は、世界に負担をかけて大きな歪みが生まれる原因になってしまうのだ。

だけど一人の永遠は虚しいだけなので、条件を付けることで許可すると約束してくれた。

条件は三つ。

一つ目の条件では眷属にしたものは主である俺に全ての生死の権利を握られる。生命に一応の終わりをつくることで世界への負担を軽減してあげるのだ。

そして二つ目の条件。主である俺に逆らったり危害を加えようとした眷属は必ず殺すこと。信頼していた眷属がいきなり危険思想に目

覚めて世に放たれでもしたら大惨事である。殺そうとしても俺以外には殺せないのだから。

だけどチキんな俺には眷属にするほど親しくなったものたちがたとえ敵になっても殺せるとは思えない。

そのために三つ目の条件。全ての眷属は俺に対して悪感情を抱くことや、不利になる行動を取ることができなくなるといふものだ。

はつきり言つて悪質極まりない洗脳そのもので俺も嫌だったが、すでに庇護欲を誘うという軽度の洗脳チックな加護を貰うことをきめていたので一つも二つも変わらないと割り切った。

だつて永遠に生きていていつの間にか人類滅んで俺一人とかなつたら嫌だ。

六つ目の加護はファンタジー世界には付きものの魔力や精神力と呼ばれる力の無限化。

魔法は使えれば便利だし何よりも楽しそうだからだ。

ちなみに力と付くもの全てを無限化にしようかと考えたものの、無気力や危険に突っ込んで行く行動力が上がったら嫌なのでやめた。

腕力や武力？何度も繰り返し返すがチキんな俺に戦闘は無理だ。どんなにがんばっても俺が安全地帯にいることを前提にしたうえで仲間
の援護が精一杯である。

彼女もそれには賛成してくれて、この無限の魔力で守護者や眷属になった仲間のバックアップを出来るようにしてくれた。つまり俺を経由して彼らも魔力使い放題である。喜ばしいことだが戦闘の役に立たないと評価され微妙に落ち込んだ。

そして最後の加護、俺と眷属たちが自由に世界を渡ることが出来る力だ。

ファンタジーな世界は本当によく終焉の危機に晒される。

小説やゲームではそれを回避するため主人公と仲間たちが頑張るのだが、その結果はお話によってまちまちである。

救われる世界もあれば滅びる世界もある。むしろ滅びてしまえと言いたくなるような酷い世界もあるのだ。

これから行く異界がそんな世界だったら最悪だ。第二の人生はそれこそ永遠に生きると決めたのだ。

住んでいた惑星が壊れて不老不死のせいで永遠に宇宙空間を彷徨うとかなったら嫌すぎる。

そう彼女に伝えるとこれから行く異界が俺を拘束しようとする力が弱まれば可能らしい。

弱まるのは10年後か100年後かはたまた10000年後かは分からないが、どうせ長くなる予定の人生である。初めて俺に好意を抱いてくれた異界とは気長に付き合っていくことにしてこの加護ももらった。

そのうえ世界を移動できたらその世界の基本知識や基本言語を自動的に俺や仲間の脳内にインプットしてくれるという超便利仕様。思わず感動してしまった。

しかも彼女の仲間たちが特別に加護を追加してくれたらしい。

最高の幸運。最高の環境。そして俺と眷属に作用する神の加護。

全て俺がこれから幸せに生きていけるように、と。

最後にこれぼっちの加護を渡すだけで、見知らぬ異界に放り出す私たちが恨んでもらって構わない、と彼女に謝られた。

だけど、これだけ俺の事を大切にしてくれた方々を恨むだなんてとんでもないことだ。

とりあえず恨んだりするわけない、むしろこんなに親切にってもらって本当に感謝していると言うと、彼女は今にも泣きだしそうな顔をしてぎこちなく微笑んだ。

「いいえ、恨まれて当然なんです。私は、私たちは貴方の人生をめちゃくちゃにしてしまったから」

そう、人生。

もう二度と戻ることができない家。会うことのできない両親。置いて逝ってしまう友人たち。

ずっと続いていくと思っていた日常は、すでに壊れてしまった。

だけど、いつかは両親みたいな優しい大人になりたいという夢は、生きてさえいれば叶えられる。

俺は今幸せだし、これからもきつと幸せであれるから。だから、誰も恨まない。

そう伝えると、彼女はとうとう泣きだしてしまった。

美人は泣いても美人だなあと思いつつ、大粒の涙に焦った俺は、彼女を泣き止ませるために格闘することとなった。

女の子を慰めるだなんて小学生の頃同じクラスの女子とぶつかって泣かせてしまったこと以来だったので、どうすればいいのか分からず、ただでさえ少ない語彙の中から、とにかく泣かないでと言った趣旨の言葉を繰り返した。

必死で考えた言葉の思いが通じたのか、やがて彼女は泣き止んで恥ずかしそうに笑ってくれた。本当に可愛かった。

彼女も泣き止んだ所で、とうとう異界へ出発の時がきた。善き神々が俺を留めておくことに限界が近づいて来たらしい。

お世話になりました、と別れの言葉を告げると、彼女はなんだか寂しそうな微笑みと共に手を振ってくれた。

次の瞬間、何かが俺を強く引っ張って行くのを感じた。

彼女の姿がどんどん遠ざかって行って、見えなくなった時、あまりの力に耐えきれず俺は意識を失った。

ホワイトアウトの直前に考えていた事は、
そういえば彼女の名前を
聞いていなかったなあということだった。

世界に戀された少年の始まり。(後書き)

- 1、主人公が世界からログアウトしました。
- 2、主人公、神との対話。加護を貰いました。
- 3、主人公、異世界に行く。

ゼロの使い魔編 その1 (前書き)

ゼロの使い魔編の始まりです。

多数のねつ造があるので苦手な方はお気をつけください。

ゼロの使い魔編 その1

さて、私がこの異界 - - 今や私の世界だが - - に生まれ変わって3年の時が流れた。

生まれた当初こそ、赤ん坊に戻ってしまった体や生まれついた体質に翻弄されたが、優しい両親や使用人に恵まれたおかげでどうにかやっていけているし、幸せだ。

私の名前は、アベル・サンタムール・ド・ノートルダム。

ハルケギニア大陸にあり、始祖ブルミルの子が興したガリア王国の中でも有数の大貴族、ノートルダム公爵家の嫡男だ。

うん、『ゼロの使い魔』なんだ。

神様な彼女からファンタジーな世界と聞いて、指輪を巡る壮大な世界や筆筒の向こうの世界のような古典的ファンタジーをイメージしていたんだが、ライトノベルの世界だった。

私も前世では各国の情勢不安や権謀術数が面白くてよく読んでたよ。作品内では国々の陰謀や戦争のせいで、主人公たちの周りは平和的とは言い難かったけど、ハルケギニアに生まれて以来私は平穩に暮している。

何故なら今はいわゆる原作前だからだ。

ヒロインのルイズ嬢は使い魔の召喚をしていないし、平賀才人も召喚されていない。

それもこれも、まだ彼らが生まれて間もない時間軸だからなんだが。私が生まれたノートルダム公爵家は、原作には登場していないガリア貴族だ。

まあ、ライトノベルと現実では違いがあっても不思議ではないんだ

が、その特殊な立位置と自分が結構大変な立場に生まれていた事を知った時には本当に驚いた。

私の父であるノートルダム公爵家当主、フレデリック・ユベール・ド・ノートルダムは、先々代当主、つまり祖父の時代にガリア王家の王女を唯一の妻に迎えていて、決して薄くはない王家の血を継いでいる。

そして私の母、フィオルデイリッジ・アデライード・ド・ラ・ノートルダム。

今でこそノートルダムの姓に変わってはいるが、現国王ルイ26世の腹違いの妹であり先代国王ルイ25世の娘。

降嫁して王位継承権を息子に譲ったとはいえれっきとした第一王女である。

つまり私ことアベルは、生まれつきガリア王族に名を連ねている上、公爵という位の中では最高位に位置する大貴族の後継ぎなのである。王位継承権も第三位の上位王族だしね。

正直王位継承権とか平穩で楽に暮らしたいだけの自分には無用の長物のうえトラブルの原因にしかならないので頭痛の種なんだが、そんな事言つと王族に連ねられている事を誇りの一つとしている両親に怒られるので普段は努めて忘れるようにしている。

そんな親不幸者な私が、何で今更そんなごちゃごちゃした事を考えているのかというと。

「アベル坊ちやま。そろそろジョセフ殿下とオルレアン公がいらつしやるとの先触れがありました。ご用意くださいませ」

そう、ジョセフとシャルル。

原作における無能王ジョセフと悲劇のオルレアン公に直面するから

である。

まずは彼らと私の関係について説明しておこう。
簡潔に言々と従兄弟である。

先ほど触れたが私の母フィオルデイリッジ - 長いので普段はフィ
ーネお母様と呼んでいる - は、彼ら兄弟の父であるルイ26世の
腹違いの妹である。つまりは彼らの叔母に当たるのだ。

まだフィーネお母様がユベールお父様 - 父のミドルネームである
- とは婚約段階で王宮の離れに住んでいた際、幼い王子2人が王
宮探検中に離宮へ迷い込んで来たのが出会ったそうだった。
それ以来何かと縁が続き、フィーネお母様が降嫁した後も夫である
ユベールお父様ぐるみで親しくしていたらしい。

数日前に、殿下方がノートルダム公爵家を訪問することが決定して
から、飛び上がらなければかりに喜んだフィーネお母様がお話してくれ
た。お母様は年の離れた2人の甥を実の弟のように可愛がっている
のである。

お父様も、お母様との結婚の際にシャルル殿下に決闘を挑まれて規
則で禁止されているからと断るのに苦労したと笑っていた。(なん
でもお父様がお母様に相応しい男が見極めるためだったらしい。今
では普通に仲良しみたいである)

そんなお話は聞いていたものの、私は彼らとは初対面である。彼ら
は違うらしいが。

そこら辺の事情は追い追説明していくとして、今は殿下方の前に
出ても無礼では無いように身支度を整えなければならぬ。

顔馴染みの使用人が持ってきて着替えさせようと広げた服に腕を通
しつつ、このハルケギニアに生まれての3年間で最大の試練をどう

乗り越えようかと頭を痛ませた。

身支度等の準備が終わった後、そのまま使用人に抱えられ、屋敷に複数ある応接間の中でも、一等の客を迎える際に開かれる大応接間に向かう。

ことある事に自分で歩けると主張しているのだが、転びでもしたら恐ろしい！と両親にも使用人にも許してもらえず、屋敷内でも抱えられた状態での移動が常だ。

それなのにもしも滑り落ちた時に備えて廊下に敷かれた絨毯はとても分厚くて柔らかく、屋敷の全ての部屋も私が転んで大事にならないうよう、ふかふかしたもので埋め尽くされているのだ。皆過保護過ぎる。

広い屋敷の中でも特に洗練された、客人を迎えるためだけに建てられた棟にある大応接間の前に着き、使用人が重厚な飾り扉を開けるために私を腕から下ろしてくれる。

しっかりと手入れされた扉は軋む音一つ上げず滑らかに開いた。

室内にはユベールお父様とフィーネお母様、客人を御迎えするための用意をして終わり、隅に控えている使用人たちがいた。

殿下方はまだ到着していないようだ。

とりあえず室内に入り、今日は初めて会う両親に朝の（もう昼近いが）挨拶をする。

「おはようございます。ユベールおとうさま、フィーネおかあさま」

「おはよう、アベル。今日は体調が良さそうだね」

そう返してくれたのは、お父様。

もう50歳近いはずなのに20歳そこそこに見えないという、恐ろしい若さを保った男性である。

しかも長く伸ばしたまっすぐな濃い藍色をした髪と柔らかい目をした線の細い美青年。

私の髪の質と目の形はお父様譲りだ。

ガリア王国王軍の將軍を務めていて、この国の防衛の責任を一手に引き受けるとても多忙な方だ。

軍の事があるので普段は王都リュティスにある屋敷に住んでいて、領地の屋敷に帰ってくるのは本当に稀。

休暇を取って帰ってきてても激務でへろへろになっているし、帰ってきたら帰ってきたで、ある程度は家臣団が片付けておいてくれるとはいえ、領主にしか決済できない仕事もあって休む暇なく働いている。

そんな姿を見るたびにノートルダム家の跡目を継ぎたくないと思うのだが、優しいお父様は必ず家族の時間を作ってくれる。

あまり遠出はできないから、家族と使用人を連れて庭でピクニックの真似ごとをするのだ。

無理に動くと後で地獄を見ると知ってはいるのだが、嬉しそうな両親の笑顔を見ることができるのでついはいはしゃいでしまう。

すでに20歳を超えたはずの精神が、肉体と環境に引きずられ幼児還りしているのは自分でも恥ずかしいのだが、嬉しいんだから仕方がない。

「おはよう、アベル。本当に今日は顔色が良いわ。やっと殿下たちにお会いできるわね」

そう笑いながら駆け寄ってきて、私を抱き上げてくれたのはフィーネお母様。

お父様と同じ年頃なのに、やっぱり若くてとても綺麗な女性で、私

という子どもを産んだとは思えないほどだ。

青色というよりは水色といった方がいようなふわふわの髪と目の色をしていて、私の髪と目の色は彼女譲りだ。

特別な事が無い限り私と二人してお屋敷から出ることもないので、よく室内遊びのお相手や絵本を読んで聞かせてくれる。

貴族の母親には、産んだ後は使用人に任せっぱなしにして自分は社交の場に行くという者も珍しくないらしいが、お母様はアベルの世話をするのが好きなのよと笑ってそばにいてくれる。

使用人の皆はそんな私たち家族を温かく見守ってくれる。

こんな体質に生まれついた私を、後ろ指さして嘲笑することなく、ちっとも面倒臭がらずに世話してくれるのだ。

坊ちゃんは坊ちゃんですよ。

いつも私の部屋から見える庭木の剪定をしてくれる、住み込み老庭師のルノー爺が言ってくれた言葉に、小さく傷ついていた私がどれだけ救われたことが。

私たちは坊ちゃまが笑って暮らしていてくれれば幸せなんですよ。

他の子どもより格段に遅く？まじり立ちができた私に、我がことのように喜んで快哉を叫んだメイドたち。

初めて庭に出た私が転びでもしたら大変だからと、いつでも転倒した体の下に滑り込んで庇えるように準備していた執事たち。

優しい両親に、優しい使用人たち。

第二の人生で得た、広いけれどせまい、この屋敷にあるもの全てが私の世界で、守りたいものだ。

お父様とお母様と一緒に三人座っても余裕のある、座り心地のいい長椅子に座って雑談をして客人を待つ。

昨日読んでもらった絵本の感想を言い合ってアベルはそう感じたのねと微笑むお母様。

お仕事の進行状況が結構いいので庭でまたピクニックをしようかと笑うお父様。

うん、幸せだ。

しばらくして、執事の一人が扉を開けて殿下方の到着を告げた。

お父様に長椅子から降りるのを手伝ってもらい、転倒防止のためにお母様に手を引かれて、殿下二人のお迎えのために玄関へ向かう。

待っているのは未来の無能王とその優秀な弟オルレアン公。

彼らに見れば、私のような小僧など、吹けば飛ぶ木の葉のようなものだろう。

それでも負けられない。

私みたいなチキンにも、守りたいものがあるんだ。

その決意が握った掌で伝わったのか、お母様が緊張しないで大丈夫よ、良い子たちだから、と励ますように笑った。

玄関に到着すると、高貴な客人の出迎えのために使用人たちも集まっていた。

背筋を伸ばして並ぶ彼らを視界にいれ、深呼吸をする。咽せてお父様に背中を撫でられた。

広い屋敷の広い玄関。ここに集まった私の大切なものたち。

必ず守ってみせると、再び覚悟を決め、門に続く道に見え始めた人影を見つめた。

ガリア王国名門ノートルダム公爵家。

それは原作に登場しない家の名前だ。

所詮、ライトノベルと現実の違いといってしまうえば、それだけかも

しれないが、本当は書かれていないだけで存在していたとしたら？
ガリア王族に連なる家としてシャルロット女王の即位の際にいたか
もしれない。

彼女に成り代わって聖戦の発動を承諾したジヨゼットを諫めていた
かもしれない。

そして何よりも・・・ジヨセフが即位した後、滅ぼされていたとした
ら？

虚無に目覚め、凶王として覚醒したジヨセフはシャルルを殺した後、
酷く自暴自棄になっていたようだ。

その優秀な頭脳が霞んでしまうほどの愚行。それは一体どれほどの
ことだったんだろう。

魔法は使えず、始祖ブルミルを侮辱し、ロマリアとは仲が悪く、気
まぐれに人を殺した。

もしも、無能王と呼ばれるほどの暴挙のなかに、貴族を殺したとい
うものが含まれていたら？

事実オルレアン公・・・タバサとなったシャルロットの実家は不名誉
印を押されている。

他の貴族が家ごと潰されていても、なんらおかしくは無いのだ。
貴族が処断された後、残されたものの末路は悲惨の一言に尽きる。

不名誉な理由で解雇されれば、当然再就職先も見つかりにくく、運
良く仕事にありつけなければ、奴隷に身を墮とすか野垂れ死ぬかな
のだ。

この先の未来で、ノートルダム公爵家がそうだったとしたら？
だから原作に登場していなかったとしたら？

それだけはどんな手を使っても回避しなければならぬ。
私の世界。この温かな人たちに報いるためにも。

そんなことを考えているうちに、使用人たちが姿勢を低くして礼の
姿勢をとる。

遠かった人影たちは、あっという間に近づいていた。

両親も姿勢を正し、無礼にならない程度に彼らを見つめる。
青い髪、そして最上級の服装をした2人と護衛である騎士が数人。
私は自分でも分かるほど緊張していて、お母様の後ろに隠れながら、
自然と視界ごと俯いてしまう。

「久しぶりだな、ユベール。それにフィーネ叔母様も今日は元気そうだ」

「お久しぶりでございます。ジョセフ殿下もお元気そうでなによりです。夫人とイザベラ様はいかがですか？」

「やあ、ユベール久しぶり、と言ってもこの前王宮の会議で会ったね」

「あの時は仕事で忙しくて、ほとんどお話もできませんでしたが。ノートルダムへようこそ。ジョセフ殿下、オルレアン公」

和やかだ。いや、仲が良いとは聞いていたけど。

頭の上で交わされる楽しい会話に、なんだか拍子抜けしてしまう。なんかすごい笑い声とかするし。

そんな場の様子に、ガチガチに緊張していた自分がアホらしくなって、気を抜いたその時。

「おお、アベル。大きくなったな、お前も元気にしていたか？」

いきなり名前を呼ばれて、心臓が飛び出るかと思った。

「本当だ、随分と大きくなったね。前に兄さんと一緒にノートルダムに来たのは2年前だから、男の子はこれくらい大きくなるものかな？シャルロットはやっと2歳だけど女の子だから比べられないしね」

「そうですね、子どもの成長は早いですから。私も王都から帰ってくる度に、大きくなっているのを見て驚きますよ」

「以前いらつしゃった時はまだ1歳で、ちょうど季節風邪で寝込んでいましたしね。さ、アベル。殿下たちにご挨拶を」

ついに来てしまったのだ。この時が。

ここで説明しよう。私がこの家を守るために、知恵熱出しつつ3日で考え出した作戦。

名付けてノートルダム公爵家お取り潰し回避大作戦。

まずジョセフとシャルルに完璧な挨拶をし、こいつ侮れねエと思わせる。

そしてその後応接間での雑談の際に、純真無垢かつ無邪気でキュートな子どもを演じ、挨拶をした時との落差で何こいつ可愛い！守ってあげたい！と思わせるのが目的である。

つまりはギャップ萌えである。

お前バカじゃねーのと思う方もいるだろうが、ちゃんと勝算はあるのだ。

神々からもらった加護の一つである、庇護欲を誘う力。これを生まれて初めて使う。

今までは周囲には優しい両親や使用人ばかりで使う理由が無かったのと、正直軽度の洗脳である力が怖くて使えなかったのだ。

ただど必要に駆られた今なら躊躇なく使う。怖がっている場合なんかじゃない。

お母様の手が私の背中に添えられ、やさしく前に押し出される。

下を向いた視線には2人の足が見えた。ヤバイ緊張する。

まずは完璧な挨拶だ。

なんせ両親直々にここ数日間で、殿下たちに失礼の無いようにと挨拶の仕方を優しいスパルタで叩きこまれたのである。

頑張れアベル。お前ならできる。

それに前世の大学受験対策で面接の方法も学んだじゃないか。思い出せ、もっとも美しいと言われた日本の最敬礼を！

俯きながら姿勢をただし、息を吸い込んで頭を下げる。

「おはつにおめにかかります、ジョセフでんか、オルレアンこう。わたくし、ノートルダムこうしゃくけのアベル・サンタムールともうします。おあいできてこうえいです」

よし、噛まずに言えた！転生してまだ体が幼いせいか、舌足らずなのはご愛嬌だ。

後ろの両親からもほっとしたような気配がする。

そして威厳のある声が、微笑ましさを滲ませながら顔を上げる許可を出してくれたので、今までずっと俯かせてた顔を上げた。

そして青い色をした2人分の目と視線があつた次の瞬間。

ぱったりと。

2人の王子がひっくり返った。

ゼロの使い魔編 その1（後書き）

- 1、主人公がハルケギニアにログインしました。
- 2、主人公が自らの置かれた状況を説明しました。
- 3、主人公の先制攻撃。ガリア兄弟へのこうかはばつぐんだ！

11月01日 主人公とお父様の名字についての間違いを修正しました。

11月02日 原作開始との辻褄を合わせるためお話の時期を変更しました

それに合わせてシャルロットの年齢を変更。

主人公はイザベラより一つ歳下でシャルロットより一つ歳上の3歳になりました。

その2（前書き）

原作では詳しく語られなかった人物の捏造、原作キャラの崩壊が激しくなっています。

原作からの乖離も始まっていきます。

苦手な方は、お気をつけください。

その2

2人の王子の後を追うように、すわ襲撃かと警戒の態勢をとった護衛の騎士たちもひっくり返ってしばらく。

目の前で人が豪快に倒れていく様を見た私は驚きすぎて軽く放心していたらしい。

気を取り直した時には、いつの間にか両親と共に大応接間に戻って長椅子に座っていた。

大丈夫ですか坊ちやま、と心配そうな声とともに、ミルクと砂糖がたっぷり紅茶が入ったカップをメイドが手渡してくれた。

一口飲んで気を落ち着かせる。

とにかく何が起きたか把握せねば。

「おとうさま、おかあさま。でんかがたときしさまたちはいったい

…」

自分でもぎよっとするほどか細い声が出た。どんだけ動揺してるんだ私。

しかし本当に大丈夫なのかあの人たち。思いつきり後頭部打ってたぞ。

そんな私が不安げに見えたのか、お父様が安心させるような笑顔を見せる。

「心配しなくても大丈夫だよ、アベル。殿下方も騎士様も客間に運んで、ピエール老に診てもらったからね」

ピエール老とはノートルダム公爵家で働いてくれている水メイジだ。

いろいろと要り用なので屋敷に住み込みという形で雇われている。元々はトリステインでも有数の水魔法による治療の名門一族の出身らしいが、治療よりも研究を取り異端視され全てが疎ましくなったため、まだ若い頃に魔法先進国のガリアに移住したという異色の経歴の持ち主だ。

確かにちよつとマツド入っているが、すごくいいおじちゃまだ。老庭師のルノー爺とよくお茶をしているのを見かける。

しかもルノー爺から伝え聞いたんだが、治療よりも研究を選んだのは当時の魔法では治せない病に罹って苦しんでいた婚約者を助けた一心でだったそうだ。

しかしピエール老は独身である。あとは言わなくてもわかるよね。

まあ凄腕であることに間違いはないので殿下たちは大丈夫だろう。

とりあえず頭を打って未来の無能王と弟死亡なんて事にはならなかったようだ。

「つかどうしてぶっ倒れたんだあの人たちは。もしかして私のせいかな。」

そうお父様たちに聞いてみると、2人はとても複雑そうな表情をした。

「あのね、アベル。貴方のせいなんかじゃないのよ。ただ…お父様とお母様が忘れていたの。」

「そうだね、私たちの配慮が足りなかったんだ。アベル、お前は一度もこの屋敷から出た事がないだろう？」

お父様の言う通り、私は屋敷の外の世界を知らない。

体のこともあるし、そもそも出る必要性を感じたことがないからだ。衣食住は最高のものが揃っているし、優しい皆がいて心地良くて、逆に外に出るのが怖いくらいである。

最高の環境の加護をくれた神々に感謝である。

…加護？

「私たちはお前の体の事も考えて、屋敷外に出すことを避けていたんだが…それよりもなんとというか、変な意味ではないんだがその、アベル、お前の顔は見慣れて無い者には目の毒なんだ。いや、私たちや使用人たちみたいにお前を生まれた頃から見ている者には、そこまでの影響はないんだが」

うん、忘れてた。

神がかった美貌の加護もらってたんですね、私。周りが何の反応もなかったからすっかり記憶の彼方に追いやっていたよ。

…だからって、顔面凶器扱いされるってなんだそれ。

「あの子たちは、アベルが小さい頃の寝ている姿しか見ていなかったから免疫がなかったのね。私たちでも一日顔を合わせなかっただけで、何かこう…くらくらとするもの」

お母様の言葉にお父様と使用人たちがうんうんと頷く。マジですか！。

「私たちでもこの様な有様だから、慣れていない者に会わせるのはいつか死人が出そうで恐ろしくて…。勿論誘拐の危険性を考えてだよ！アベル、君の顔が悪いんじゃない！」

お父様、今更フォローされてもアベルは悲しいです。

そうか、私の顔を直視した人は倒れちゃうのか！。

…もしかして私、これから一生出歩けないんじゃないだろうか。

街を歩けばばたばたと倒れていく人々を想像して落ち込んでいると、

不意に扉の向こうが騒がしくなった。

使用人たちが誰かを制止する声が聞こえる。

お父様が杖を抜いて、私たちを庇うように扉と向かい合う。え、緊急事態？

だんだんと騒ぎは大応接間に近づいてくるようだ。

お父様の纏う雰囲気はひしひしと剣呑なものになって行く。

ちなみにユベールお父様、国軍では將軍の位を授かっているが、全てノートルダム家のコネなど一切無しの実力で得たものだそうなの。お母様が惚気ていた。

襲撃者死ぬな、間違いない。

そんな中、扉は盛大に開かれ――

「ユベール、叔母様、俺たちは天使を見た！！」

未来の無能王ジョセフとその弟が、お前ら頭打って駄目になったかと言いたくなるような台詞と共に飛び込んできた。

「ジョセフ殿下、オルレアン公、お目覚めになりましたか」

2人が室内に入ってきた時にはすでに杖を下していたお父様が彼らに声をかける。

切り替えが早すぎて私には見えなかった。どんだけ杖捌き上手いんですか。

「ああ、まだ少し痛みは残っているが優秀な水メイジのおかげで大事ない！それよりもユベール、天使だ、まだ幼い天使が俺たちを見ていた！あまりの美しさに思わず意識を手放してしまったぞ！」

思わずで手放すようなものじゃありません。ああもうお父様も苦笑してるじゃないか。

「殿下方、実はその子は天使ではなく…」

「本当なんだよユベル！空の青さよりも薄い水の色をしたあの瞳！比べた空の色が色褪せてしまうほど綺麗だった！あれが天使ではないとしたら、一体なんだというんだい！？悪魔にしては清らかすぎて、愛らしすぎたよ！」

興奮しすぎです、オルレアン公。というか借り物の美貌と知ってる私でも、流石に恥ずかしくなってくるんですが。

「落ち着いてくださいな、2人とも。興奮させていては事情の説明ができません」

お母様がさすがにこれ以上は収集がつかなくなると判断したのか、彼らを窘めた。

「「ですが叔母様　　っっ!?!」」

彼らの抗議の言葉はそこで途切れた。

お母様の声の方を向いて一緒に座っていた私を視界に入れてしまったせいだろう。

一度倒れて免疫が出来たのか倒れはしなかったが、傍目に分かるほど大きくふらついた。

「さ、お座りなさい。今お茶を淹れさせますから」

お母様は有無を言わせぬ笑顔で二人を長椅子に座らせた。

閑話休題。

2度目にした私に逆に落ち着いたのか、やっと彼らは会話が通じる状況に戻ってくれた。

とりあえず、メイドたちが淹れてくれたお茶を飲みながらの雑談タイムに突入した。

ももとの目的ではあつただけで随分ここまで時間がかかったなあ。

「そうか、ユベールと叔母様の子であればその美貌も頷ける…。行き成りの不作法済まなかつたな、アベル。恐ろしかつただらう」

「いえ、うつたあたまがだいじょうぶだったかがしんぱいで、こわくはありませんでした。みなさまがごぶじでなによりです」

うん、死んじやわないか心配だったよ。天使とか言い出した時には別の意味で頭が心配になつたけどね。

「前に兄さんと来た時君は寝込んでいたしまだ赤子とっていい年齢だったからね…。まさかこんなに綺麗な子になるとは思っていなかつたよ。アベルにとつては始めましてになるんだね、僕はシャルル。オルレアン公の位を頂いている」

やっと自己紹介してくれたお兄さん　だつて若すぎてそう形容するしかない　はもう一人を兄さんと呼んでいることで薄々気づいてはいたが、後の悲劇のオルレアン公だったらしい。

うん、お人よしそうな笑顔しとる。

「そうか、じゃあ俺の事も誰か分からんか。俺はジョセフ。そのシャルルの兄でお前の従兄だ」

髭を生やしたおじさん　でもやっぱり若い。髭を剃ればもっと若く見えるはず　　が続けて紹介してくれた。やっぱりジョセフでしかたか。

無能王（予定）で原作ではいろいろとはっちゃけたおじさんだったが、今は普通の気のいい兄ちゃんって感じだった。

というかここ数十分の騒動のおかげで原作の無能王や悲劇のオルレアンのイメージは跡片もなく粉碎されている。

そのため私の計画とは大きく違って限りなく素で接してしまっているが、初対面から失神させるというこの上ない失敗をやらかしたのもう気にしないことにした。

「2人とも2年前までは度々訪ねて来てくれていたのよ。自分たちの子どもが生まれてからは忙しかったようで顔を合わせる機会が無かったの。私寂しかったわ」

「私は王都で会ってはいたけどね、どうしても仕事の最中だからゆっくり話す時間はなかったなあ」

「そっいえばアベルは俺のイザベラより一つ歳下になるのか。あいつよりもっぴかりとした子だな。流星は叔母様たちの子だ」

「僕のシャルロットはやっと這って移動できるようになったよ。目元が僕にそっくりだね、本当に可愛いよ。…悔しいことにアベルには敵わないけどね」

「あまり良いことばかりではないよ。何時何処でこの子の可愛さに

とち狂った輩が湧いて出るか心配で心配で……」

「うむ、俺たちの子は娘だから心配は当然としても、アベルの場合は男でも心配がいるな……心労察するぞ、ユベール」

いつの間にかうちの子自慢大会になっていたがやっぱり気にしないようにした。

閑話休題

自慢の種も尽きたのか、自然と話は別の事に移っていった。

奥方の趣味、庭に咲いていた花の話、新しく国立のアカデミーで発明された魔法の効果。

まさしく雑談というに相応しい会話だったが、魔法の話になった途端ジョセフの顔が少し暗くなった。

周りも気づかず、ジョセフ本人も気づいていないようだったが、私の間違いではない。

無能王 たしかその呼び名の由来の一つは彼が魔法が使えないことに起因しているのではなかったか。

きっと幼少のころから魔法が使えずに辛い思いをしたんだろう。

もしかしたらトラウマかなんかがあるのかも知れない。この無能者めとか罵られたとか？

原作知識が無くても分かる。

ジョセフはとても 辛そうだった。

その表情を見た瞬間、私は彼が仮想敵であることを忘れた。

私の目標は誰にでも優しい大人だ。八方美人と言われようが別にいい。

前世の両親を指針にしていたら、自然とそうなってしまったのだ。ある友人には、お前の優しさは型月のエミヤのようなものだよと怒られたことがある。(何を言いたいのかさっぱり分からなかったが、ようは破滅しかねないと言いたかったらしい)

私は、辛い思いをしている人が目の前にいたら放っておけない。

たとえ自分の敵になる人だとしても、自らの平穩を投げ捨てることになっても、

「ジョセフでんか、シャルルさま、わたしね、まほう、つかえないの」

それが傷の舐め合いだろうと、構わない。

私の突然の発言に、彼らは絶句した。

「アベル、それはまだ確定したことじゃ…!!」

「でもおかあさま。わたしはおかあさまよりもからだがよわいんでしょう?だからまほうがつかえないって。ピエールろうがそういつていたのをきいていたんです」

そう。私は魔法が使えない。

私が屋敷から出ることが無いのも、みんなが過保護なのも、私の体

が脆弱なせいだ。

原作でカトレア嬢という女性がいた。

トリスティンのラ・ヴァリエール公爵家の次女で、物語のヒロインであるルイズ嬢の姉君だ。

彼女は生まれつき体が弱く、コモンスペルを使っただけで体調を崩した。

フィーネお母様も生まれつき体が弱かったそうだ。

お母様はガリア王国の王女として最高の治療を受けただろう。

それでも、コモンスペル二つ使えないほどの虚弱体質で屋敷から出ることもほとんど無い。

お母様の子である私もその体質を受け継ぎ、魔法を使おうとしてスペルを唱えただけで命を落とすかもしれないとピエール老に太鼓判を押されている。

転生して生まれた当初から私には意識があつたが、ほとんど毎日朦朧としていて周囲の状況把握もできずにいたほどだ。

自分の名前がアベル・サンタムールであることも一歳の誕生日の前に知ったくらいだし、自分の置かれていた立場も今の今まで調べていてやっと分かったくらいなのだ。

まあ、魔法を使えないのは少し残念だが仕方ないと思っている。

しかし周囲はそうではないのだ。

たとえばお母様。

私が魔法を使えないと知った時は、自分の体調を崩すほど泣いていた。

こんな体に産んでごめんね、私と同じ苦しみを背負わせてしまうと

言われた時は、まだ自我の無い子どもだと思われていると知っても慰めたくてしようがなかった。魔法が使えなかったお母様も、ジョセフのように軽視されていたのかもしれない。

『ゼロの使い魔』のヒロイン、ルイズ嬢は虚無の担い手だったために魔法が使えず、幼い頃から強いコンプレックスを抱えて生きていたようだ。

実際そのことが原作でも描写されているし、彼女の置かれた環境

魔法を使えないものは貴族ではないというハルケギニアの不文律も強調されている。

私もきつとこの世界で生きていく限り、魔法の使えない王族として誹られ、軽視されていくのだろう。

それでもお母様やお父様は私を愛してくれた。

使用人たちも、私が魔法の使えない貴族だと知っても変わらない態度で接してくれた。

だから私は、この狭い世界で生きていく限りは幸せである。いつかは壊れることの決まった脆い箱庭だったとしても。

だから、立場は違えど私と同じジョセフに伝えたい事がある。

「でもわたしは、まほうがつかえなくてもしあわせなんです。きぞくとしてはしっかくで、まわりのひとにめいわくをかけてしまっているけれど、みんながいてくれるかぎり、わたしはしあわせです」

酷く甘い感情論だ。

王子であるジョセフにそんなことは許されない。

この事を彼に知られ、将来嫡男の私が魔法を使えないといった理由

でノートルダム家がお取り潰しにあっても仕方がないことだ。そんなことになったら皆連れてどっかに逃亡するけどね。最高の幸運の加護を舐めてはいけないよ。

彼もコンプレックスを抱えている。

優秀な弟、王族なのに魔法の使えない自分、父王との確執。

それゆえに将来起こるだろう悲劇を、私は知っている。

未来は変わらないだろう。

それでも伝えたい。

「まほうがつかえなくても、わたしはわたしだから。まほうとはべつのほうほうできぞくとしてみとめらいたいと、そうおもっているんです。まほうがつかえなくてもきぞくになるほうほうは、きっとあるから」

貴方はひとりじゃないんだよって。

私の言葉に、場は静まり返ってしまった。

言いたい放題言って満足した私は、ぬるくなってしまうたお茶をゆっくり時間をかけて飲み干した。

まあ、王族に連なる者が魔法諦めてそれでも貴族になるよと、ハルケギニアの不文律をひっくり返す暴言を吐いたのだ。

茫然とされても仕方ないし、烈火のごとく怒られて縁切りされても別におかしくない。

お屋敷追い出されたらどうやって生きていこうかなと考えていた時だった。

「…くっ、ハハ、ハハハハハハっ！！」

いきなりジョセフが笑いだした。

「そうか、魔法が使えずとも貴族になるか！大きく出たな、アベル！」

怒ってるのかと思ったら、なんかすごく愉快そうな笑い声だった。

「俺も何故そんな小さな事を一々気にしていたんだろうな…。知っているかアベル？俺も魔法が使えないんだ」

知っています、なんてことは勿論言えないので、私とお揃いですねと返しておく。

「というか今魔法を使えない事を小さな事って言ったよな。あんた魔法使えないこと目茶苦茶気にしてんじゃないのか？」

「お揃い、そうだなお揃いだ。つくづく」

何かジョセフの笑顔と笑い声が不穏なんだが。

「…そうね、私もアベルとお揃いだわ。私たち仲間ね、ジョセフ」

お母様もなんだか清々しい表情をしている。

「魔法が使えなくても私は王女としての役目を果たした。そもそも王族が魔法を使う機会なんて、儀式や緊急事態以外はほとんどないんだもの。確かに魔法は王族の象徴。始祖ブルミルの血をひいているという証だわ。使えなければ侮られ、貴族たちの心は離れていくでしょう。でも魔法の力が強ければいい王になれるというわけじ

やない。いい王と悪い王の違いは民を上手く導けるかそうでないかだもの。」

「叔母様の言うとおりです。幸い俺には優秀なメイジの弟 シャルルルがいてくれる。シャルルルに次代の王の座を譲り、オレは補佐に徹すればいい」

…え？

「一体なにを言い出すんだ兄さん！僕は兄さんのように王に必要な不可欠な能力を持っていない！僕が勝てるのは魔法だけだ！王子として父上の補佐を務めあげる兄さんに敵うわけないだろう！？」

「お前は王の資格である魔法の力を持っているじゃないか。俺には望みようもない能力だ。魔法を使えない俺が王になってみる。お前を陥れて王位を奪ったと言われるに決まっている」

「っ…僕はいつも勉強で兄さんに敵わなかった。政治も、経済も、礼儀作法でもだ。だから僕は、唯一兄さんに勝てる魔法の力を必死で伸ばしたんだ。兄さんに負けていると思いたくなくて…！！」

「シャルルル…俺もだよ。魔法が使えないのなら、他の分野で勝つしかなかった。兄として、お前に情けない俺を見せたくなかったんだ…」

「兄さん…！！無理だよ、僕なんかには王だなんて！」

「お前は自慢の弟だ。大丈夫、俺がお前を支えてやる」

あれ、この話の流れのままじゃシャルルルが王様になっちゃうんじゃない

ないか？

原作崩壊ってレベルじゃねえぞ！？

シャルルは嫌がってるけど、ジョセフは補佐になる気満々だし。わ、私のせいなのか、これ…！！本気でどうしよう…！！

「お待ちください、ジョセフ殿下、オルレアン公。答えを出すのが少し早すぎます」

お父様：！どうかこのカオスな状況を止めてください。

「止めてくれるな、ユベール。俺は決意したのだ。シャルルを王に戴きこの国を善きものにしていく。魔法が使えないと嘲笑されようと、俺には理解してくれる仲間がいる。もうシャルルに勝とうと躍起になつて王位を目指す理由は無いのだ」

「だから待てと言っているんです。ルイ陛下のご意向を無視するつもりですか」

「…親父が何かを考えている、だと？」

ルイ陛下。

ジョセフとシャルルの父親で、現ガリア国王。

お母様の腹違いの兄で、私の伯父だ。

原作ではジョセフの回想に登場したお方だったけど、私は名前さえ知らなかった。

「陛下はジョセフ殿下を王位につけ、オルレアン公を宰相位に叙し貴族たちの不満を抑え込む公算を持っておられる。長子でありながら魔法の使えないジョセフ殿下と、魔法は使えるけれども王としての才の乏しいオルレアン公。お2人のバランスを上手く取ったうえ

で、王権を次代に移行させるため、陛下は何年も前から信頼できる重臣と打ち合わせを重ねていました。」

原作の父王は臨終の間際に王としてジョセフを指名し、兄弟の間に多大な亀裂を入れて逝ったとしか覚えていない。
もしかしてこれも現実とライトノベルの違いなんだろうか。

「陛下は帝政ゲルマニアの隆盛の秘訣を 時代の停滞を打ち破るその強さを見習うべきだと仰られた。

そして次代を担う殿下方にその願いを託すと。すでに重臣たちによって貴族の主立った派閥は抑えられています。あとは強硬な魔法至上主義の貴族：親口マリア派を残すのみです。それさえも陛下は自らの崩御までに抑え込むことです」

「父上が…僕らのために、本当にそんなことを…?」

原作で語られた情報で推測できる即位騒動の起きた年 シャルロットがタバサになる12歳まで、あと10年はある。
確かにそれだけあれば根回しは終了するだろう。

「一度王宮に帰り、陛下…お兄様と話し合ってみてください。お兄様は貴方たちのことを確かに愛しているのですから」

お母様が2人を励ますように笑った。

ジョセフとシャルルは早速首都リュティスの王宮に向けて出発することになった。

ルイ陛下にその真意を聞いて、今後について話し合うらしい。

目覚めた騎士たちが帰還するための馬車を用意してくる間、私たち家族は2人の見送りのために玄関に向かった。玄関には彼らが来た時のように使用人たちが並んで礼の姿勢を取っていた。

ガリア兄弟の和解という、原作からは逸れてしまうであろう出来事はあったが、その分ジョセフが無能王になる可能性が減って、ノートルダム家は無事になる可能性が大きくなった。

たった1日で、しかもお話しただけでこの結果は破格だろう。悪質な洗脳の庇護欲を誘う加護も結局使ってないしね。うん、この優しい屋敷を守れてよかった。

「アベル。君の言葉のおかげで僕たちは分かりあえた。このままではすれ違ったまま大変な事になっていたかもしれない。本当に感謝している」

「かぞくのなかかわるいのはかなしいことですから。なかよくなれてほんとうによかった」

実際お兄さんに暗殺されるっていう大変な事になるはずだったからね。

いきなりジョゼフがシャルルを王様にするって言い出した時はほんとに驚いたよ。

ルイ陛下の行動は考えもしていなかったけど、良い方向に向かってよかった。

ジョゼフもシャルルも来た時より清々しい顔してるしね。

「それにしても、お前は本当にしっかりしているな。イザベラより歳下とは思えんほどだ」

「私たちにはこの子しかいませんから、他の子とどう違うのかは分かりませんね」

「いいんですよ。アベルはアベル、でしょう？」

「はい、おかあさま」

幼児還り起こしてるとはいえ20越えの立派な大人です、なんて言えないけどね。

馬車の用意ができたようで、護衛の騎士が2人を呼びに来た。お別れの時間である。

「長いようで短い1日だったよ。今日は来て良かった。叔母様、ユベール。それにアベル、本当にお世話になった」

「道中お気をつけて。お兄様にもどうかお元気で伝えてください」

「必ず伝えよう。ユベール、せつかくの休暇を台無しにして悪かった。今度特別休暇を出すように掛け合っておく」

「楽しみにしていますよ、ジョセフ殿下」

「おきをつけて、ジョセフでんか、シャルルさま」

そう私が別れの挨拶をすると2人の顔が険しくなった。ちよ、何か粗相したか私。

「アベル。俺たちのことは兄と呼べ」

「そうだね、他人行儀で少し寂しくなってしまう」

え、兄って。

良いのか、身分違いなのに。

そう思っつて両親をみると、満面の笑みを返された。良いんだ。

しかし、兄か。

実は私、前世も今世も一人っ子で結構そついうの憧れてたんだよな。

兄貴、は怒られるから却下。

兄さん、はシャルルと被るしなあ。

お兄ちゃん、も微妙だなあ。

此処はスタンダードに行くしかないかな。

「えつと、ジョセフおにいさま、シャルルおにいさま…？」

でいいのかなあと思っつて2人を見上げた瞬間。

また二人がひっくり返った。

結局2人の高貴な客人は護衛に担がれ、馬車に詰め込まれてノートルダムの屋敷を後にした。

免疫出来てたんじゃねーのかお前ら。

その2（後書き）

- 1、主人公、顔面凶器に認定される。
- 2、主人公、未来の無能王とその弟との会話、着実に原作崩壊の道へ歩き出す。
- 3、主人公、兄を2人誑しこむ。

加護の説明

・美貌の加護。

人とは思えぬその美貌。もはや嫉妬すらできない。

初見の人は必ず気絶する。慣れた人でもくらつとする。

男子三日会わずれば刮目して見よというが、目が潰れるので無理。

・庇護欲を誘う加護

全ての意思持つものの無意識に働きかけ、主人公に対し強烈な庇護欲を抱かせる加護。

ちなみにオン、オフの切り替えの出来ない常時展開型。それこそ効果は生まれた時から。

別名、潜在的ヤンデレ製造機。

手羽先の書くキャラクターは、ことごとくヤンデレスイッチ内蔵型に改造されます。

頑張れ主人公。君の明日はきっと明るい。

11月02日 原作開始との辻褄を合わせるためお話の時期を変更しました。それに合わせてシャルロットの年齢、イザベラの年齢を

変更。主人公はイザベラより一つ歳下でシャルロットより一つ歳上になりました。

1月19日 誤字指摘があったので修正しました。

ある騎士団長の忠誠（前書き）

番外編、ということとで周囲の人々視線で書いていきます。

お話の都合上、残酷な表現があります。

直接的な描写はありませんが、苦手な方は回避願います。
楽しんでいただければ幸いです。

ある騎士団長の忠誠

一目見た時から、変わらぬ忠誠を君に。

俺は、貧しい平民の子だった。

生まれた地の領主は、全ての民に重税と労役をかして、それは物心ついた直後の幼子でも変わらなかつた。

俺も動けるようになってすぐ、過酷な労役に駆り出された。

新しい領主館を建てるために、土台を作って、山から木を倒し、石を切り出した。

領主の配下のメイジがいつでも俺たちを見張っていて、手を休めれば火で焼かれた。

毎日陽が昇る前には全員集められ、2つの月が交差するまで続く労働。

そんな地獄のような環境で、幼子や年老いた弱者は、真っ先に死んでいった。

運良く育った俺は、人生と共に地獄が早く終わった彼らを羨ましく思った。

死ねばこの労働も罰を与えられることも関係ないのだから。

過酷な労役の中でも、一人として欠けることのなかつた家族が唯一の救いだつた。

お互いに励ましあいながら、一日一日を乗り越えていく。

これからも変わることはない地獄での日々が続いていくと思つていった。

一年で最も多く雨が降る月。

その日も雨の中に駆り出された俺たちは、山で木を切り出す作業をしていた。

土砂降りの雨のせいで視界は悪く、斜面は滑りやすくなっていた。それでも必死で切り出した木を、麓の新領主館の建設地まで運んでいた俺たちに、それは襲いかかった。

土砂崩れ。

いきなり目の前に現れたそれに逃げることもできず、俺は飲み込まれた。

目が覚めたとき、俺は大量の土の上に横たわっていた。

雨は止んで、久しぶりの太陽が地上を照らしていた。

幸い打撲で済んだ俺は、辺りを見渡して絶句した。

建設途中の領主館の屋根が、土に埋まって目の前にあった。

俺は数日間、その場に留まって土砂を掘り返した。

集められていた家族や仲間たちが埋まっているはずだったから。

仲間たちのバラバラに千切れた手や足、首は見つかったが、家族は見つからなかった。

3日も経てば彼らの破片は腐り始めた。俺は掘り返したそれらを、泣く泣く再び土に埋めた。

領主館の屋根についていた売れそうな飾りを持って、俺は生まれ故郷を後にした。

生まれてから一度も領外に出たことのなかった俺にとって、外は初めて見るものばかりだった。

近くの村に辿り着こうとして森に迷い込みオークに襲われた所を、たまたま通りがかった傭兵団が助けてくれた。

彼らは俺のような子どもが独りきりで森の中にいたことを、不審に思ったのか事情を尋ねてきた。

村が壊滅して一人生き残ったことを話すと、深く同情してくれた彼らは、俺を旅の仲間に加えてくれた。

子どもなんて旅をしてまわる傭兵には足手まといだったろうに、彼らは俺に優しく接してくれた。

戦闘の役に立たず、雑用しかできない俺を我が子のように可愛がってくれた。

数年後、成長した俺は彼らに受けた恩を返したくて、剣を習って働き始めた。

筋は良かったのか、俺はたちまち剣の腕を上げた。

オーク程度なら問題なく倒せるようになって、傭兵としても彼らの仲間入りをした。

団長が笑って、お前も大きくなったなと頭を撫でてくれたことを、今も覚えてる。

一人前だと認められて、新しい剣を買い与えられたことが、今の俺の原点だ。

荒くれ共に混ざって、朝まで酒を酌み交わして酔い潰された事はいい思い出になった。

そんな辛くも楽しい日々は、唐突に終わりを告げた。

初めて訪れたその町で、俺たちは酒場の隣接された宿に泊まった。

酒場には傭兵を必要とする仕事が集まる。

皆は仕事を探しに酒場へ行き、俺は装備や日用品の買い出しに街に出た。

重たい荷物を背負いながら宿に帰った俺が見たものは、全身を斬り裂かれて死んでいる仲間たちだった。

酒場で貴族崩れのメイジたちと仕事の取り合いになり、魔法を使って殺されたと見ていた人が教えてくれた。

彼らの方が先に仕事を決めていたのに、奴らメイジが横取りしようとしたんだ。

その言葉に、仲間を失って抜け殻になりかけた俺の心に暗い火がついた。

仇打ちだ。

まず最初に奴らがこの町を拠点にしている傭兵で、必ず帰ってくることを調べあげた。

俺は魔法という圧倒的なアドバンテージを持つ敵に挑むため、ひたすら仕事をこなして腕を磨く事を決意した。

受ける仕事は、先住魔法を使う亜人や幻獣、竜の討伐。

死亡率が圧倒的に高いそれらの仕事を受ける奴は少なく、ほぼ毎日ある依頼を淡々とこなした。

魔法の避け方、そもそも使わせない方法、一瞬で片をつけるための速度、相手の懐に飛び込むための度胸、骨ごと断ち切る力。

何度も死にかけながら、それでも生き残った俺は確かな力をつけていった。

そして最後の仕上げに、危険な火竜山脈に籠って修行をした俺は、仲間の仇打ちにあの街に向かった。

狙いのメイジたちは、すでに死んでいた。

仕事をしくじって、そのまま死んでしまったらしいよ。
あの酒場でそう聞いて、俺は生きる指針を失くした。

それからの俺はただ惰性で生きていた。

仲間を失くし、その仇も討てず、だからといって自ら死ぬ覚悟もできずにただ仕事に没頭した。

危険な仕事ばかりを選び、その中で死ねるようにと願った。

しかし、すでに竜さえも容易く殺してしまう俺に敵うものはいなかった。

そのまま何十年が過ぎても俺は死ねずに、力を劣化させることもなく緩やかに老いていった。

伝説の傭兵、竜殺しと讃えられても、空しいだけだった。

このまま俺は、意味もなく死んでいくのか。

戦いの中で死にたいと願っても、それが叶えられることはなかった。

そんな空虚な日々を終止符を打つように、一つの依頼が持ち込まれた。

公爵家直属の私設騎士団の団長を務めてほしい。

藍色の髪と目をしたその貴族は、俺に頭を下げてそう言った。

いつも持ち込まれる危険性の高い依頼とは違い、その依頼は騎士たちを鍛えてほしいというものだった。

そんなんじゃあ、死ねない。

そう思っただ断ろうとした俺に、彼は説得を続けた。

私の留守の間の屋敷が心配なのです。騎士たちは確かに魔法を使っ

て戦える。でもそれだけでは、メイジ殺しと言われる程の者に多勢で襲われでもすれば、あつという間に瓦解するでしょう。

どうか、と懇願する彼については俺の方が折れた。

彼に伴われ訪れたその屋敷は、幼い頃の俺が建てることを命じられた領主館と比べることが馬鹿らしくなるほどの豪邸だった。

しかし、しがない傭兵の俺にも一目で分かるような趣味のいい造りをしていて、昔金になるからと持ち出した屋根飾りとは全く違っていた。

温かな雰囲気で溢れたそこを、屋敷の主人が一つ一つ案内して回った。

思わずお前暇なのかと言ってしまった俺に、彼はこれから貴方が守る屋敷を紹介するくらい良いではないですかと笑った。

次の日から早速、騎士たちの鍛え直しが始まった。

魔法の使えぬ傭兵風情に騎士団長が務まるものかと、気概を吐いた馬鹿をぶちのめせば、残った奴らは俺を尊敬の目で見つめた。

よっぽど馬鹿が嫌いだったらしい。

馬鹿は次の日屋敷から逃亡して行方知れずになった。

毎日血尿が出るまで訓練を積ませた。

あまりの過酷さにトラウマを負うものまで出た。

それでも奴らは主人たちのためにと、全ての試練を乗り越えた。

生きるための確固とした指針をもった彼らが、とても眩しく見えた。

屋敷には俺と同じ年頃の爺がもう一人いた。

ピエール老と呼ばれる水メイジの彼とは、お互いが積み重ねてきた

年月の分気があったのか、よく一緒に庭先で茶を啜るようになった。奴の趣味は水魔法の実験だそうで、お前はどうなんだと聞かれて答えに詰まった。

ただ空虚に生きてきた俺に、そんなものは存在しなかった。

そう言うと奴は、随分と寂しい老後だなと笑った。

そして、じゃあ趣味を探せばいいじゃないかとも。

その日から、俺の趣味探しが始まった。

ピエールの奴が手をまわしてくれたおかげで、俺は訓練の終了後に色々な部署を訪ねることになった。

厨房ではコックが丁寧に料理の方法を教えてくれた。

しかし何を作っても野外料理にしかならない俺にあつという間に白旗を上げた。

屋敷内の縫物をする部屋を訪れば、針子が裁縫を教えてくれた。針を持っただけで折ったので、縫う前に匙を投げられた。

騎獣の世話をする小屋には近づいただけで、騎獣が怯えたので世話どころじゃなかった。

そんな風に挫折を繰り返して、最後に辿り着いたのが庭師の真似ごとだった。

庭の片隅を借りて草花の世話を始めた。

最初のうちは、あつという間に枯らしてピエールに笑われた。

悔しかったので、微妙にしか読めない文字を駆使して園芸の本を読

んで勉強した。

季節が三巡する頃には、枯らすことも無くなって結構立派な花壇を作ることができるようになった。

それを見に庭に出てきた奥様と遭遇して、花の説明をすることになったこともある。

そのうち庭の片隅から徐々にはみ出して、何時しか屋敷中の草木の世話をすることになった。

その頃には騎士団の連中の鍛え直しも終わっていて、そろそろ役目は終わりかなと思っていた所で、そのまま騎士団長兼庭師として雇われた。

あの貴族は俺のような者の行動もしっかり把握していたらしい。

騎士団の訓練に付き合いながら、土を弄るのが趣味になり、いくつもの季節が廻った。

ほとんど変わることのない屋敷の中は、まさしく平和とっていいものだった。

その平和が揺らいだのは、ある春先の出来事だった。

奥様にご懐妊なさった。

その話はあつというまに屋敷中を駆け巡った。

奥様は体が弱かった。

調子がいいときは庭に出たこともあったが、屋敷から出たことは、俺が来てからも数えるほどだった。

とても若く見える屋敷の主人夫婦は、それでも40にはなっていたと知って驚いた。

産むのは難しいんじゃないかしら。奥様が死んじゃうもの。

そう呟いたメイドの言葉は使用人全員の気持ちだった。

しかし奥様は子どもを産むことにしたらしい。

それからの10カ月はあつという間だった。

主人は心配のあまりかガンガンやつれていったし、運動のために屋敷を歩く奥様の後ろをついてまわるといふ奇行を披露した。

ピエールも忙しくなり茶を飲む機会も減った。

屋敷に出入りする治療師の人数も増え、その分警備も強化された。

平和だったはずの屋敷は、冬に近づくにつれて騒々しくなった。

そしてその冬の中で最も冷え込んだ深夜のことだった。

奥様が産気づいた。

数日前からその兆候は現れていたらしく、ピエールや多くの水メイズ、民間の産婆が用意されていた部屋に詰めていた。

使用人たちも心配で仕事が手に付かず、それは騎士団の連中も例外ではなかった。

訓練に身が入っていない彼らでは、何時か大怪我すると思い、屋敷の警備以外は休みにした。

屋敷に住み込んでいる者は当然として、通いで働いている者も仮眠室で夜を明かす日々が続いていた。

心配で仕事に手が付かなかったのは俺もだった。

趣味の土弄りに庭に出ても、既に冬支度の終わった花壇には何ら手を加える必要もなかったし、枯れ木の世話をしても空しいだけだっ

た。
それでも暇な俺は、春に咲きだすように調整して植えた花の球根を、ただいたずらに掘り返すという意味のない行動を繰り返した。休憩に出てきたピエールに見られて、ついにボケたかと真面目に心配された。

その日、主人は前日から王都での仕事のために屋敷を留守にしていた。

深夜に屋敷の空気が一気に慌ただしくなって、とうとう来たかと思つた。

王都の主人に知らせるために、騎兵がグリフォンに乗って屋敷から飛び出していった。

使用人たちは誰が言い出したでもなく、奥様たちのいる部屋の外に集まった。

奥様が死ぬのを、屋敷にいた全ての者が恐れていた。

微温湯の様な心地のいい平和が崩れるなんて、考えたくもなかった。

朝日がうつすらと地平線を明るくした時、産声が響き渡った。

奥様もお子様も無事よ！奇跡だわ！

メイジたちの手伝いのために部屋の中にいたメイドが飛び出してきたそう叫んだ。

歓声と嗚咽が廊下に木霊した。

主人が屋敷に帰還したのは、陽が地平線から顔を出してすぐだった。真っ青な表情で足早に歩いてきた主人は、何も言わずに扉を潜った。

しばらくして、今度は男の泣き声が響き渡った。

生まれた御子は、アベル様と名付けられた。
奥様譲りで体が弱く生まれたらしく、使用人たちへのお披露目は随分時が過ぎてからだった。

ピエールからその容体を聞いて知っていたとはいえ心配だったことには変わらず、一人一人部屋に呼ばれてお披露目されることになった時は安心した。

身なりを清潔にして、水メイジの魔法で清められたうえで入室を許可された。

部屋に入って出てきた者は全員、夢を見たかのようにぼうつとしていた。

そんな様子を怪訝に思ったものの、アベル様に会える喜びで誰も気にしなかった。

そして、俺の番が来た。

入室の許可をもらい、入った部屋には主人と奥様、そして小さなゆりかごがあった。

おいで、と主人に呼ばれ、静かに近づく。

奥様が幸せそうに微笑んでいらっしやいといった。

そしてゆりかごを覗くようにと指でさし示した。

さあ、見て御覧。この子が君の守るべきものだ。

そこには奇跡があった。

奥様と同じ色をした目が、静かに俺を見つめていた。

どんなに強力な幻獣や竜に睨みつけられても、感じなくなっただけの畏怖を覚えた。

その瞬間、俺の心は屈服したのだ。

この赤子を王に戴くために。

傭兵として生きてきた俺が、騎士になった瞬間だった。

それ以来俺は、アベル様の部屋から見える庭の剪定を日課とした。まだ赤子の彼は、庭なんて見ても何にも感じないと知っていても、少しでも彼の傍にいる理由が欲しかった。

体の弱いアベル様は一日中眠っているらしく、赤ん坊にしても異常だとピエールがぼやいていた。

心配ではあったけれど、きっと大丈夫だと確信していた。

俺の王は、これくらいで死んだりしないと心のどこかで理解していたから。

屋敷中の者に弱い赤子のまま逝ってしまうのではと心配されるほど頼りなく、それでもアベル様は成長していった。

その一挙一動に皆が振り回され、その姿を見るたびにさらに夢中にされた。

主人に抱えられて移動するアベル様を見て、誰もが微笑まずにはいられなかった。

アベル様が笑うと、私はどうなってもいいから護ってあげたくなくなるの。

その場にいた全員がメイドの言葉に強く頷いた。

そろそろあの子を庭に出してあげようと思うんだ、最近窓の外が気になるようにね。

主人が嬉しそうに言った言葉に、俺は庭全ての手入れをし直した。あらかじめアベル様が庭に出るその日が決められ、家令と執事は騎士団の連中に人の庇い方を習っていた。アベル様が転ばないか心配だったらしい。

初めて庭に出たアベル様はとても楽しそうに笑っていた。傍にいた者たちがいつ転ぶかとはらはらするほどに拙い歩き方ではあったけど、一歩一歩大地を踏みしめて確かに歩いていた。

俺はその様子を花壇の手入れをしながら見つめていた。両親や執事たちと一緒に遊ぶアベル様の姿は、とても尊い光景に見えた。

共にいたピエールがアベル様が歩いているのを見て、峠は越えて小康状態にはなっただけれど、これ以上は良くならないだろうとぼやいた。

屋敷の外に出れば、慣れない環境のストレスで死んでしまっやもとも。

なら俺がこの屋敷の庭を、外の世界を見なくてもいいほどに素晴らしいものでいっぱいにするさと返したら、趣味がないと言っていた昔のお前が嘘みたいだと笑われた。

アベル様という生きる理由を頂いたから、その理由を護りたいだけだよ。

いい顔をするようになったな、そう友人は言った。

この屋敷に来て以来、俺は死にたいと願わなくなった。
昔の仲間たちに申し訳ないけれど、もっと長く生きたいと思うくら
いに幸せだ。

生きる指針を失くし、ただ空虚だった俺はもういない。

今ここにいるのは、ただ一人の王の幸せを護るための騎士だった。

今日は天気がいい。

天候の乱れに左右されるほど体の弱いアベル様も、庭に出てこれる
かもしれない。

そう思いながら日課の花壇の手入れをこなしていた俺に、幼い声がか
かった。

「ルノーじい、そのおはなのなまえはなんというの？」

開かれた窓の向こうから花壇を見つめる小さな主の笑顔に、俺は目
を細めた。

（ルノー爺、いつも綺麗なお庭にしてくれて本当にありがとう！）

ある騎士団長の忠誠（後書き）

騎士団長兼庭師は努力チートでした。

結構なお歳ですが腕は衰えず、むしろ生きがいを見出したことで磨きがかかるほど。

竜とかそういった幻獣はあっさり斬り飛ばす程度のチートです。

殆ど毎日暇さえあれば主人公の部屋の外のお庭にいるので、侵入者対策にもなるし主人公のお話相手にもなるので一石二鳥です。

主人公にお花のお話とかをよくしています。

主人公は彼の事をただの庭師のお爺ちゃんとしか知らないなので彼が剣をぶんまわしたら驚くだろうなあ。

ある父の誓い（前書き）

今回は主人公のお父様こと、フレデリック・ユベール・ド・ノートルダム公爵視点。

作品中でちよろつと心の病や妊娠や墮胎に関する意見が出てきますが、決して私の意見ではありませんし、作品内の都合で書いているものです。

心の病を抱えている方の苦勞は察することもできないほど大変なことだと思っっていますし、私は妊娠や出産という事をとても尊いことだと思っっていると記しておきます。

御不快になられた方、もしくははなられる予定の方は回避願います。

ある父の誓い

私は、絶対に君の事を忘れない。

私は先代ノートルダム公爵だった父と、その愛妾の間に生まれた子だ。

まだ幼い時、父の正妻が男子を産めなかったからと、母と引き離され後継者としての教育を施された。

母の顔は覚えていない。愛していると囁いた子どもを、金と引き換えに喜んで売った女の顔なんて。

父は王都での仕事が忙しかったし、義理の母となった人には疎まれていた。

父親繋がり姉たちとは折り合いが悪く、よく虐められた。使用人たちも父の不在の間、屋敷の実権を握る養母の不興をかうことを恐れ、私に近寄ることはなかった。

最初から泣くことも諦めていた私は、ただ知識や礼儀作法、魔法の技術を詰め込まれることを受け入れた。

無理矢理連れてこられた屋敷の中での味方は、すでに息子に当主の座を譲り渡し、隠居していた祖父くらいのもだった。

私は少しでも一緒にいたくて、年老いた彼の世話を進んでした。

祖父はそんな私によく自分の話をしてくれた。

王国を守る軍の一員として駆け抜けた戦場の武勇伝。

最初は反発しあっていた部下たちと仲を深め戦友となっていくまでの過程。

敬愛する先々代の国王陛下から褒美を下賜された時の言い表すことのできない感動。

そして私にとって祖母にあたる、この国の王女との恋物語。

祖父と祖母は、王族や貴族には珍しい、恋愛で結ばれ結婚した夫婦だ。

国王陛下に謁見した祖父を見た、祖母の一目惚れだったという。祖母は父である国王陛下に相談し、国王陛下も奴になら安心して娘を任せられることができると乗り気だったようだ。

その当時祖父は王軍の将軍として忙しい日々を送っていて恋愛などしている暇はなく、時折顔を合わせる歳下の王女には妹のような思いをもっていただけだったらしい。

しかし祖母の猛アタックと国王陛下の援護射撃に撃沈されたと楽しみに語ってくれた。

降嫁して苦勞するだろうと思っていた結婚生活も順調で、仕事との両立も上手くできていて、もうすぐ子どもも産まれる。本当に幸せなんだ。

今の話は彼女には内緒だよ。恥ずかしくてね、彼女が出かけているからこそ出来る話なんだ。

そうだ、君も魔法が使えるならぜひ軍に入るといい。とてもやりがいのある仕事だからね。

祖母が命と引き換えに産んだ息子の存在も忘れ、彼女が亡くなる直前にまで記憶の針を戻した祖父は、軍人に興味があるメイジの使用人だと偽って世話をしていた私にそう微笑んだ。

それからしばらくして祖父は亡くなり、屋敷に執着するものが無くなった私は王都の士官学校に入学した。

父には公爵家の後継者がそんな野蛮な所に行くなんて許さないと酷く反対された。

しかし最後まで私を使用人だと思っただまま逝った祖父が、軍人に成りたいなら学校に通いなさいと書いてくれた推薦状を見せれば、ま

だ祖父が健常で厳しかった頃から彼に逆らえなかった父は、渋々だったが許してくれた。

士官学校での日々はとても充実していた。

普通なら家の後を継ぐことのない貴族の子が生きていくために入る学校に、名門貴族の嫡男が入学したことで騒がれたものの、同じ年頃の学友と過ごす毎日は楽しくて、厳しくても生きている実感に満ちていた。

祖父のように成りたかった。

士官学校を卒業した後、家には帰らず王軍に入隊した。

高位貴族ならではのしがらみや苦勞はあった。

たまに起きる他国との小競り合いに駆り出され、殺し殺されの戦闘をして何度も死ぬ覚悟を決めた。

もともと私のメイジとしての属性は戦闘には不向きな水と土だ。

それを必死で工夫して、他に使える属性と合わせて戦闘用に転換させた。

どうにか生き残った私はいつの間にか中将にまで昇進していた。

祖父のように成れると思っていた。

信頼出来る部下に支えられ、大きな責任を果たし続けることができた。

即位したばかりの国王陛下を暗殺の危機から守り、光栄なことにも信頼されるようになった。

沢山の嫉妬や嫌がらせも受けたけれど、全て乗り越えた。

軍に入隊してからは殆ど会う事もなかった父が病で亡くなり、私が公爵の位を継ぎノートルダム家の当主になった。

義母と義姉たちは居辛くなったのか屋敷を出て行った。

公爵の仕事と当主としての仕事、一気に増えたそれらと軍の仕事は私を忙殺したけれど、なんとかこなすことが出来た。

祖父のように、祖父のように、祖父のように。

敬愛する国王陛下を守り、臣民を守り、領民を守った私の手には、祖父とは違い、何一つ自分の自由になるものなど無かった。

私が祖父のように成ろうとすればするほど、その矛盾は私を苦しめた。

私は、祖父のように、幸せに成りたかった。

そんな時だった。私と彼女が出会ったのは。

フィオルディリージ。祖母と同じ、我等がガリアの王女。

私を信頼してくれた国王陛下の命で護衛をすることとなった高貴な女性。

祖父に成れずに苦しんでいた私のように、彼女もまたその立場に苦しんでいた。

最初はきつと傷の舐め合いだった。

その関係がいつしか別のものに代わり、婚約する事になった。

フィーネが恋をして結婚して、お前が私の義弟になってくれるなんて、こんなに嬉しいことは滅多にないぞ。

婚姻の儀に臨む前夜。そう笑う国王陛下に謝りたくなかったのは何故だろう。

私は彼女を愛している。これだけは断言出来る。

ただその想いを、祖父が祖母を愛した事と重ねているのではないか

と、どうしてもそう思ってしまうのだ。

祖父の人生を焼き直していくような人生だった。

一つ一つ忠実に再現していけば、あの日微笑んだ祖父のように、幸せになれると思っていた。

降嫁した彼女を連れ、仕事以外に戻ることもなかった領地の屋敷に帰った。

結婚する前の準備として、全ての使用人を新しく入れ替えて屋敷自体も部分的に改築したせいか、幼少期を過ごした所とはとても思えなかった。

フィーネも新しい環境に慣れず、しばらくの間はよく体調を崩して寝込んだ。彼女のために水メイジのピエール老を雇えば大分良かった。

仕事の都合で留守をする時間が多く、その間屋敷に残す妻や使用人たちが心配で、ノートルダム家直属の騎士団の人数を増やし、彼らの強化のために有名な傭兵だったルノー殿を団長に招いた。

新しい使用人たちも、体の弱い妻をよく気遣って優しく接してくれた。

記憶の中に残っていた、祖父に関する思い出以外は全て辛いことしかなかった屋敷が、新しく温かなもので塗り替えられていくことが心地よかった。

歳下の友人として、フィーネが可愛がっていた2人の王子とも仲良くなり、彼らが結婚した後にはお互いの夫婦生活の相談に乗った。私の軍での位も祖父と同じ將軍になり、公爵としても領主としても順調だった。

そんな優しい時間が過ぎて、私は祖父のように成れたんじゃないかと思いはじめた頃だった。

フィーネが懐妊した。

妊娠が判明してすぐに、ピエール老が懇意の出産や妊婦を専門とするメイジや民間の医師を手配してくれた。

彼らの見立てでは、すでに40を過ぎた彼女は高齢出産になり、体への大きな負担は避けられない。

たとえ産む事になっても、母子共に助からない可能性の方が大きいとのことだった。

彼女は生まれつき酷く体が弱かった。それこそ魔法も使えないほどに。

なのに彼女は強固なまでに、産むことを主張した。

私は彼女に懇願した。

子どもは諦めてくれ。妊娠初期なら安全に墮ろす方法もある。君を失いたくないんだ。

このままでは君も私も祖父や祖母のようになってしまおう、と。

貴族として後継者を残すことが正しいと知っていても無理だった。

彼女がいなくなってしまうことが、唯々恐ろしかった。

そんな私に彼女は微笑んだ。

怖いよね、ユベール。私も怖いわ。だけどね、絶対に大丈夫よ。

だって私は貴方のお祖母様ではないし、貴方もお祖父様ではないんだから。

私はこの時初めて、祖父のように成りたくないと思った。

それからの日々はひたすら恐怖で満たされていた。

妊娠しているからこそ運動しなければならぬとの産婆の助言に従った彼女が、毎日の習慣として屋敷内を一周するようになると、彼女の転倒が怖くて後ろからついてまわった。

悪阻と呼ばれる期間に突入し、彼女が気持ち悪さで食事を拒否した時には、私も心配のあまり食事が喉を通らず、体重がガクンと減った。

どっちが妊娠してるのか分からないわねと笑われた時には、私が妊娠していれば良かったのにと大真面目にいつて、さらに笑われた。

そうしている間にも、段々と膨らんでいく彼女の腹が怖かった。

フィーネが妊娠している間にも、私には仕事が多くあった。

決して手を抜くことは許されないそれらをこなすため、私は妻の残る屋敷を離れ王都に通わなければいけなかった。

出産予定日が近づくにつれ、やつれていく私を多くの人が心配してくれた。部下も私が早く帰れるようにと頑張ってくれた。

仕事が終わればすぐさま屋敷に帰還する。この時ほど私の使い魔が、なぜか属性違いで召喚されたとはいえ風龍であったことに感謝したことはない。

ジョセフ殿下やオルレアン公もお忙しいなか奥方たちを連れて、フィーネを度々見舞いに来てくれた。

そして私のやつれた顔を見て、私達も将来はこうなるのかと戦々恐々としていた。

奥方たちは仲良くフィーネと会話していた。

それを見てジョセフ殿下が、いざという時には女が強いとは本当のことだったんだと言ったので、思いきり頷いておいた。

多くの人に見守られながら、私たちはとうとう臨月を迎えた。

彼女のために集まってくれたメイジたちが、予想していたよりも彼女の体調がよく、もしかしたら母子共に無事に出産を終えられるかもしれないと判断してくれた。

フィーネはすでに出産を終えた後の準備として、子どもの部屋を用意させていた。
柔らかな色彩で統一されたその部屋に、どうか家族3人であれるようにと願わずにはいられなかった。

その日のことを、今でもよく覚えている。とても寒い冬の朝だった。前日から仕事のために王都に赴いてた私に、屋敷を守護する騎士の一人がグリフォンを駆って、フィーネの陣痛が始まったと知らせに来てくれた。

私はすぐさま仕事を切り上げ、屋敷へと帰還した。

外の寒さとは違って屋敷の中は暖かく、静けさに満ちていた。その静けさに不安を覚えた私は、出産の際に使うため用意された部屋に直行した。

もしも彼女が死んでしまっていたら、私は祖父のように記憶の針を戻して幸福な時に溺れることを望んだだろう。

部屋の前には多くの使用人が集まっていた。

その表情を見ることが怖くて俯いたまま、彼らが体を寄せて開けてくれた扉への道を進んだ。

手をかけた扉の取っ手は酷く冷たくて、凍っているんじゃないかと思った。そして、扉を開いた。

フィーネは生きていた。

彼女はベッドの上で上半身を起こして、すぐそばに置かれた小さなゆりかごの中身を優しく見つめていた。

部屋の中は暖炉が焚かれてとても暖かく、風竜に乗り寒い空を渡ったために冷え切った私の体を温めた。

彼女が生きることが嬉しくて、言葉が出なかった。

彼女は入り口で立ち尽くしていた私に気がついて、ユベールと呼んで手招きした。

私もこの子も無事よ。男の子なの。体の弱さは私譲りみたいでさっきまで危ない所だったけど、ピエール老たちのおかげで落ち着いたわ。ほら、大丈夫だって言ったでしょう？私は生きていて、この子もちゃんと生まれたのよ！

その言葉に体の硬直は解け、私は彼女に駆け寄った。

その手を掬い取り、握りしめる。

暖かい、温かい、あたたかい。 - - 生きてる。

涙がこぼれた。情けないとは思わなかった。

彼女が生きていてくれたことが嬉しくて、我が子が生まれたことが嬉しかった。

ありがとう、ありがとう。生きていてくれて、産んでくれて、本当にありがとう。

必死で絞り出した涙に震えた私の声に、彼女は笑った。

もう泣き虫なんだから。感謝するのは私の方よ。貴方の子どもを産ませてくれてありがとう。

堪えようとした嗚咽が漏れ出た。

生まれて初めて号泣した私を彼女は黙って抱きしめていてくれた。気がすむまで泣いた私に、彼女は微笑んだ。

さあ、この子を見てあげて、お父様。

そこで私は初めて、自分の子が入ったゆりかごに意識を向けた。

ゆりかごの中にはしわしわとした、なんだかよく分らない生き物がいた。

生まれたばかりは同じ人間とは思えないとピエール老に聞いてはい

たけれど、実物は想像していたものとは大違いだった。
これが私の子。

名前はアベルとつけてあげたいの。始祖以前から語られている物語の人物の名よ。不吉な意味も含んでいるけれど、あまり丈夫じゃないこの子には忌み名としてもぴったりだと思っわ。

アベル。それがこの子の名。

いいんじゃないかな。そう返すと彼女は少し怒ったようだった。

ちゃんと考えてあげて、私たちが初めてこの子にあげる贈り物なよ。

そんな事を言われても、人の親になった実感は一向に湧いて来なかった。

小さくて、ふにゃふにゃしていて、なんか醜い。

恐る恐るゆりかごの中に手を伸ばして、その手らしきものに触れてみた。

すると驚くほど強い力が込められ、指を握られた。

小さいけれど、温かい、人の手だった。

ああ、これが子どもか。そう思った時だった。

薄い水の色が、私を見つめていた。

目だ。目が合ったんだ。

考えられたのはそこまでだった。

何とも形容できない気持ち溢れ出て、また私は涙を流した。

まあ、目を開けたわ。初めて見るものが貴方だなんて、ずるい。
彼女の残念そうな声が耳に届いたけれど、私はそれどころじゃなかった。

かわいい、いとしい、まもりたい。

私がこの子を護ってあげなくちゃ。

私たちの子ども。アベル。

この後泣き止んだ私は、フィーネに新しい名前を付け加える事を提案し、受け入れられた。

サンタムール。聖なる愛。

祖父や祖母のように、フィーネは死なず君も無事に生まれた。

私は一人、取り残されなかった。

私はもう、祖父のようになろうとは思わない。

彼のように過去に逃げ、彼女との幸せな時間に溺れようとは思えない。

フィーネも私も、そしてアベルも。必ず3人で幸せになってみせる。

私は、絶対に君の事を忘れない。

君が生まれたあの日、私はそう誓ったんだ。

(うわあああああ目が見えないよ真っ暗だよマジで怖いぞうしよ
おおおおー！)

ある父の誓い（後書き）

今回はお父様の半生と主人公の妊娠出産まででした。

お父様は愛というものを殆ど与えられずに生きていたので、幸せそうだったお祖父様になりたいと思って苦しみ、それを乗り越えてやっと得られたフィーネお母様に非常に執着しています。

その結果が妊娠初期の堕胎の提案だったのですが、これに関して御不快に感じた方がいれば申し訳ないです。

主人公、生まれてくる前から命の危機だった件。

でも生まれた後の主人公はお父様にとつてかけがえのない大切な存在なので、もしも主人公を害しようものなら將軍様モードが発動します。

これについても細かく考えていますし、いつか書きたいと思っています。

実はもう二ツ名考えちゃったんだぜ…気が早いよ自分。

ある王女の決意（前書き）

今回はとある原作キャラが魔改造されます。
キャラ崩壊が苦手な方は回避してください。

ある王女の決意

私が貴方を助けてあげるわ。

その日私は、お父様に連れられて短い旅をしていた。

いつもは忙しくてあんまり構ってくれないお父様が、急に旅行に行くと言い出したものだからとっても驚いた。

どうして？と聞くと、癒しが足りないという意味のわからない答えが返ってきた。

変なお父様。

お父様はこの国の次期国王で、私は王女なんだそうさ。よく分からないけど家庭教師がそう言っていた。

とても偉いけれど大変なお仕事で、いろんな人の命がかかっているんだって。

沢山のお菓子やお気に入りの人形を持って馬車に乗った。

どこにいくの？とお父様に聞いたら、ノートルダム領だと答えてくれた。

ノートルダム。聞いた事がある。

お父様とシャルルの叔父様が寝物語にお話してくれたなかに出ていた言葉だ。

シャルルの叔父様は、シャルロットのお父様でよく2人で王宮に遊びに来てくれる。

お父様たちがお仕事している間は、シャルロットと2人で遊ぶのだ。まだ7歳のあの子は、私が見てないとすぐにどこかに行つて道に迷つてしまふんだもの。

私のほうがおねえさまだから、あの子の面倒は見てあげなくちゃ。

いつも一緒にお人形遊びとか絵本を見たり、お庭に出て隠れ鬼をして疲れたらお昼寝をする。

夜になつてお父様たちがお仕事から帰つてきたら、一緒にお食事を

する。
お食事も終わつて寝る用意ができたなら、お父様たちは私たちにいろんなお話をして寝かしつけてくれる。

お父様とシャルルの伯父様はとっても物知りで、いろんなお話を私たちに聞かせてくれるのだ。

たしか、ノートルダムもその時に聞いた。あんまり覚えていないけど。

ノートルダムってどんな所だろう？

お父様とシャルルの伯父様が楽しそうだったのは覚えているから、きっと面白い所なんだろうけれど。

しばらく色々考えていたけれど結局分からなくて、馬車の心地よい揺れに身をゆだねてひと眠りすることにした。

お父様に起こされて馬車の外を見てみたらもう夕方になっていた。

馬車はいつの間にか止まつていて、随分と眠っていたなとお父様が笑った。

少し遠くにお屋敷が見えて、ここが目的地だと御者が扉を開けて教えてくれた。

ここがノートルダム？
プチ・トロワよりも大きいけどグラン・トロワよりは小さい、それでもかわいいお屋敷だった。

お屋敷までの道を歩きながら、お父様はノートルダムについて教えてくれた。

お父様の叔母様のフィオルディリージ様が嫁いだ公爵家で、当主のフレデリック様は王軍の將軍をしている。

ノートルダム家は王国でも重要な役目を担う、大切な臣下なんだそうだ。

そして2人の子ども、アベル・サンタムール。
私より一つ歳下の男の子。

とても体が弱くて、お屋敷からでたこともないんだって。
ずっとお屋敷の中じゃ飽きたりしないのかしら？

お屋敷に辿り着くと、玄関にはとても綺麗な人たちと使用人たちが待っていた。

水色の髪の人と藍色の髪の男の人が、お父様に挨拶をした。

お父様がその人たちを紹介してくれた。

フィーネ大叔母様とユベール大叔父様。

私も挨拶したら、2人とも微笑んでくれた。

なんだかとてもいい人たちみたい。

お屋敷のお部屋に通されて、お茶とお菓子を頂いた。

とってもおいしくって、食べ過ぎてしまった。

お父様たちはその間とても楽しそうにお話していた。

なのにお父様が残念そうな声をあげたから、どうしたのって聞いた。

アベルは体調を崩していて、今は寝ているそうだ。

そういったお父様は本当に残念そうで、見ていて可哀想になってしまった。

大叔母様と大叔父様もそれが分かったのか、眠っていますが顔だけでも見てやってくださいと言ってくれた。

お父様はあつという間に嬉しそうになった。

やっぱり今日のお父様はなんか変。

でもお父様を喜ばせた、アベルってどんな子なんだろう？
ちよつと興味が出てきた。

叔母様たちが案内してくれてアベルのお部屋に行くことになった。

廊下の絨毯がふかふかしていて、歩くのが楽しかった。

そんなことをしていたら、すぐにアベルのお部屋に着いた。

お父様はアベルを起こさないように静かにしろといった。

私、それくらい分かってるもの。

そつと扉を開いて、お部屋の中に入った。

お部屋は柔らかい白色で満たされていて、とても温かかった。

音を立てないようにゆっくりと大きなベッドに近づく。

ふかふかのベッドは私の身長よりも高く、上にいるはずのアベルが見えなかった。

声を出しちゃいけないからお父様のお袖を引っ張ったら、お父様も気づいてくれて私を抱き上げてくれた。

大きな腕の中で体制を整えて、ベッドの方を見る。

そこには天使が眠っていた。

薄い水色の髪が、私よりもずっと白い青ざめた頬に一筋かかっていた。

あまりにも白いその肌は、私と同じように生き血が通っているとは思えないほどだった。

でも真っ青な唇が、それでも綺麗な紅色だと分かる。呼吸をしていたから、生きていると分かった。

その圧倒的な美しさに、私の体は言うことをきかなくなってしまった。

お父様が私の様子に気付いて笑った。

お前もそうだったか。でも目を開いているときはこれどころじゃ済まないぞ。

お父様の言葉に答えが返せない。私は完全に言葉を失っていた。

なんて…綺麗な天使。

王宮に住んでいる私はいろんな綺麗なものを目にしてきたけど、それら全部を合わせても敵わない。

いいえ、世界中の綺麗を合わせてもまだ足りないわ。

この天使が笑ったら、絶対に。

だけど天使はとても苦しそうだった。

息をする音はとても小さくて、今にも途切れてしまおうんじゃないかと思った。

青ざめたまるい頬は、見ていて痛々しいほど。

その苦しげな様子に、私は酷い無力感を覚えた。

そんなとき部屋に誰かが入ってきた。

お父様が彼をピエール老と呼んだ。

おじいさんは私たちを見て治療の時間だから外に出ておれと言った。これから何をするのか分らなかつたけれど、私は天使の傍にいたくて首を振った。

お父様も部屋の隅で見ているといったら、おじいさんはため息をついて好きにせいと許してくれた。

おじいさんはベッドの横に立って杖を取り出し、持っていた小瓶の蓋をあけて魔法を使った。

おじいさん、水メイジだったんだ。

すると天使の苦しげだった寝顔が、だんだんと楽なものに変わっていった。

呼吸の音もさつきよりはしっかりしていて、頬にも赤みが差している。

すごい。

私には何もできなかつたのに、この人はあつという間に天使の苦しみを取り除いてしまった。

目の前で起きた奇跡のような光景は、私に衝撃を与えた。

私もこの人のように水の魔法が使えるたら。

天使の　アベルの助けになれるだろうか。

私の頭の中はその考えでいっぱいになっていった。

そのせいでアベルの部屋どころか、お屋敷を後にしていたことに気が付いたのは、馬車に乗り込む直前だった。

私は帰りの馬車の中で、お父様に水の魔法を学びたいとお願いした。お父様はいきなりの懇願に驚いたようだけど、どうにか頷いてくれた。

王宮に帰った後の日々に、いつものお勉強の他に魔法の勉強が加わった。

私は先生が渋顔を作るほど魔法の才能が無かったけれど、諦めずに必死で学んだ。

またいつかアベルが苦しんでいる場面に遭遇しても、今度は助けをあげられるように。

その決意のおかげか　　本当にすこしずつだけど　　私の魔法の力は伸びていった。

私の魔法の属性を調べた時、最も水に親和性が高いと出た時には飛び上がった喜んだ。

才能の問題はある。だけどその溝を私は努力で埋めていった。

2年も過ぎると、もう私に水の魔法で教えることは無いと先生が白旗をあげるほどに成長した。

お父様も、飽き性の私が一つの事に打ち込んでいることに驚いていたようだった。

訳を聞かれて、アベルの力になりたいのと答えたら、流石は俺の娘

だと手を叩いて喜んでいた。

お父様のおかげで、国中の優れた水メイジに教えを受けることができるようになった。

私はその人たちから、さらなる力を得るために学んだ。

少しずつ任されるようになった執務に忙殺されたり、自分の乏しい才能に絶望したり、挫けそうになることも何度もあった。

でもそのたびに私は、アベルの顔を思い返した。

苦しそうな青白い美貌、赤みの差し込んだ安らかな寝顔。

いつか自分でも一人前と言えるようになってから会いにいきたくて、あれ以来会うこともなかった彼に思いを馳せて乗りきった。

いつしか私の魔法のクラスはスクウエアにまで達していた。

シャルルの叔父さまほどではなかったけれど、それでも13歳という若年でその境地に至った私を周囲は天才と讃えた。

お父様にも褒められたけれど、そんなことはいいので新しい魔術書を下さいと言ったら大笑いされた。

周囲の評価はどうでもよかった。

私にとって重要なのは、アベルのためになれるかどうかだったから。

そんな私はある日、魔法の勉強の一環としてサモン・サーヴァントに臨んだ。

その頃の私はもう少しで、私の定める一人前の水メイジの夢に手が届く所だった。（先生たちに話したら高望み過ぎると呆れられた。

あの時アベルを癒したメイジはピエール老といってハルケギニアでも最高峰の水メイジだったそうだ）

独力でそこまで辿り着いた私にとって今更使い魔という存在は重要ではなく、秘薬の材料を採るのに便利な使い魔が出来ればいいなくらいの軽い気持ちだったのだけれども。

鏡を潜って現れたのは、空を漂う水の塊　水の精霊だった。

トリステインのラグドリアン湖に住んでいたというその存在を召喚したことで、私の周りは大騒ぎになった。

当たり前だ。だって高位の存在である精霊だもの。

しかも水の国と謳われるトリステインで重要視されている精霊だ。国際問題になりかねない。

しかし彼女はあっさりとそれを否定した。

トリステインには愛想を尽かしていたので丁度いい機会だったと。

本人（？）がそう言うならまあいいだろうという事になって、契約することになった。

契約のキスをしようとして、彼女が私の体内に入り込んだ時はびっくりした。

なんでも一体化することで存在を留め、いつでも共に行動できるようにするためだったそう。

人間の体の多くは水で出来ているから出来ることらしい。

思わぬ効果として、私の体から出て自由にも活動も出来るようになった。彼女も喜んでいた。

無事に契約を済ませて私という現世への縁を得て、一体化することで人間の知識や感覚感情をもった彼女　ウンディーネと呼ぶことになった　はとても積極的で私に優しくしてくれた。

妹ができたみたい、という言葉はシャルロットの姉としての自尊心が耐えられなかったので聞かなかったことにした。

ウンディーネは私に更なる力をくれた。

私の水の魔法の力を高めるだけじゃない。

彼女のおかげで秘薬の材料である精霊の涙は使い放題だし、様々な

知識や秘宝を授けてくれた。
精霊視点の治療方法や失われた古い術。

中には、人を擬似的にとはいえ生き返らせることのできる指輪もあって驚いた。

恐ろしくて自室の宝箱に嚴重に封印したけれど。

さらにはエルフや幻獣たちにしか使えないはずの、先住魔法まで使えるようになった。

杖がなくても使えるし何より強力だから気に入っているのだが、他人に見られて異端扱いされたら堪らない。

これも普段は封印を余儀なくされた。

そして今日、ウンディーネのおかげで水メイジとしての力を極めた私は、とうとう5年ぶりにお父様と一緒にノートルダムの屋敷を訪れることになった。

怖くなかった、と言えば嘘になる。

私にとっては5年ぶりでも、アベルにとっては初対面なのだ。

どうか私の5年間の努力が、彼を助けてあげられますように。そう願わずにはいられなかった。

ノートルダムに向かう馬車の中はとても賑やかだった。

ここ数年間は暇さえあれば魔法や知識を詰め込むことに夢中で、公務などの必要最低限な外出以外で外に出ること自体が久しぶりだったし、今回は気のおける人たちとの旅行で気が楽だった。

だけど馬車が目的地に近づくにつれて、私の心臓が言う事を聞かなくなかった。

一体化しているウンディーネは、私の胸の高鳴りに気づいてもしかして恋をしているのかと問うてきたし、それを聞いたお父様がお前

も恋をする年頃になったかと感慨深そうにいったので、私はそれを必死で否定した。
だってこの気持ちは恋じゃないもの！たぶん、おそらく、きっと！そんなことをしているうちに、馬車はあっという間にノートルダム領に到着した。

視界に入った懐かしい屋敷に私の心臓はさらに跳ね上がった。
もうすぐアベルに会えるのだ。私に天啓を与えた、あの天使に。
馬車を降りて、屋敷への道を辿る。

屋敷の玄関の前では、あの日のようにフィーネ大叔母様とユベール大叔父様、そして使用人たちが迎えてくれた。

「お久しぶりです、フィーネ大叔母様、ユベール大叔父様」

「お久しぶりですわ。イザベラ姫」

「あれからもう5年ですか、お綺麗になられました」

ああ、この人たちは5年前から変わらず優しい。
そう思ってしまうほど、彼らは外見も内面も変わっていないかった。
使用人たちも私たちを微笑ましそうに見守っている。

「叔母様、今日はアベルの調子は…」

お父様が私が最も聞きたかった事を聞いてくれた。

アベル　彼は今どうしているのだろう。

「今日は体調が悪くて…専属のピエール老が特別な秘薬の材料を仕入れるため、自ら王都に出向いていて治療ができないので、大事を取って休ませています」

「あの子もお出迎えに出せませんで、申し訳ありません」

まるで5年前のようですね。

その言葉に私は思わず叫んでいた。

「大叔母様、大叔父様！アベル様の治療、このイザベラにお任せください！」

叫んでから後悔した。

アベルの部屋に案内されながら思いつきり私は溜息をついた。

大叔母様や大叔父様は、お父様やシャルル叔父様に聞いて私が高位の水メイジになった事を知っていたらしく、躊躇うことなく了承してくれた。

それこそ言い出した当人の私が戸惑うほどに。

あの子のためにそこまで学んでくれたと聞いています。どうかアベルをよろしくお願いします。

全幅の信頼が込められたその言葉に私は決して失敗が許されないことを悟った。

信頼が、重い。

今までアベルの治療のために、数多くの実戦をこなしてきた。

初めのうちは手間取ったけれど数を重ねるたびに慣れていった。実力は十分。そう先生たちも太鼓判を押してくれたし、私も自分の腕には自信がある。

全て問題ないはずなのに、不安は収まらない。

ウンディーネが私の中から励ましてくれたけれど、気分は晴れなかった。

アベルの部屋にはあつという間に着いた。

案内してくれた使用人は一礼して去っていく。

目の前の扉が、酷い圧迫感を持って迫ってくるような気がした。

覚悟を決め、扉を押し開いて入室する。

部屋の中は、5年間何度も思い返したあの時と殆ど変わっていなかった。

白い色も、温かさも　そしてベッドも。

あの人が見ているであろうそれを直視できない。

俯きながらそろそろと近づいていく。

一歩一歩が酷く重い。

まるで足が鉛になってしまったよう。

足を下した床がぐらぐらと揺れているような錯覚を覚える。

酸素が足りなくて、深呼吸をしようとして気付いた。

あれ、私、今までどうやって息してたんだっけ。

息ができない。苦しい。目眩がする。

ウンディーネの声が頭の中に響くけれど、何を言っているのかが理解できない。

怖い、恐い、こわい。

あの人に会うことも、治療をすることも全部全部こわくてたまらない。

もしも、失敗してしまったら。

私が、アベルを、殺す？

だめだもうなんにもかんがえたくないよ。

思考を諦めて柔らかな絨毯にうずくまろうとした時だった。

呼吸音がした。

酷く苦しげな今にも途切れそうな音だった。

脳裏に、5年前の光景が映りだされた。

苦しんでいた、アベル。

なにもできなかった私。

あの時の酷い無力感が蘇った。

「…違う」

今の私には力がある。

5年間の研鑽。スクウェアという実力。ウンディーネ。

私は、無力だったあの頃の私じゃない。

意識がクリアになる。

深く呼吸をした。

ウンディーネのほつとした感情が伝わってきた。
彼女にも心配をかけてしまった。

私の大切な使い魔。彼女もいるから大丈夫。

「ウンディーネ、貴方の力、私に貸して」

もちろんよ、という応えは体の内側から。

震える足を叱咤して立ち上がる。

視界にベッドとその上に眠る彼を捉えて、私は最後の一步を踏み出した。

治療は成功した。

手が酷く震えて杖を持てなかったので、先住魔法による治療に切り替えるというハプニングはあったものの、ウンディーネのフォーローのおかげで乗り越えられた。

しかし想像していた以上に彼の体は脆弱で、その酷さは多数の患者を診てきた私にも見たことがないほどだった。

一緒に診ていたウンディーネも、こんな体で生きているのが信じられないと絶句したほどだ。

生命というものに深い縁をもつ彼女がそういうのだ。余程酷いものなのだろう。

強力な治療は逆に彼の身体を壊してしまうという意見に従い、今回は苦しみを取り除くことだけになった。

ただどその苦しみは相当根深い所から来ているようで、水の精霊の涙を惜しみなく使用してやっと苦しみを抑えることができたという有様だった。

これ以上の治療は無理だわ。この状態がこの身体の限界値で最高値なのよ。

一生完治することないだろうという彼女の診断に、私も賛成だった。

呼吸も落ち着き、穏やかに眠る彼を眺める。

彼の身体は虚弱のせいかわく發育が悪く手足も細く、明らかに体重も軽く見えた。

私より一歳年下だしこの年代は女の方が成長が早いとはいえ、少し異常だ。

とはいえ貧相ではなく、かろうじて異常に細いといえるその体格に水メイジや使用人たちの涙ぐましい努力が見て取れる。

恐る恐る顔に視線を移す。

5年前よりも明らかに綺麗になっているその顔に、女として大切な何か完膚無きまでに碎かれるのを感じて落ち込む。

ありえない。なんでこんなに綺麗なの。

もはや嫉妬心も湧かないほどの美貌である。

相変わらず白い肌に、頬と唇はまさしく薔薇色。

横たわっている姿さえ絵になるとかどこのお姫様だこいつ。王女は私の方だろうか。

思わず心の中で愚痴をこぼしたその時だった。

彼の瞼が震えた。

あ、睫毛すごい長いかそんな思ってる場合じゃないでしょ私！

明らかに覚醒の兆しに思いつきパニックになる。

だって心の準備ができてないものいきなりすぎるでしょどうしよう助けてウンディーネ！

結局私は何の行動もとれずに立ち尽くして、

彼の瞳が開かれた。

意識が真っ白に染まる。

イザベラ！というウンディーネの声で引き戻された。

体内にいた彼女が私の意識に干渉して正気に戻してくれたのだ。

何よこの子あり得ないわ！イザベラ、貴方の意識一部遮断しておくわよ！

いつもは柔らかいその声に余裕が無い。

でも私はそんなこと気にしていられなかった。

彼は寝ぼけているのか、しばらくの間ぼうつとしていた。

そしてその眼が私を捉えて

「…イザベラ嬢？」

名前を、呼ばれた。

私が意識を取り戻したのは、客室のベッドの上でのことだった。

おはよう、イザベラとウンディーネの声が響いた。

彼女は私がアベルの部屋で倒れて後、彼が使用人を呼んでここに運ばれた事を教えてくれた。

そしてごめんなさい、あんなにも美しい子だと思っていたわ。まさか人を昏倒させてしまうほどだなんて。私があなたの中にいて意識にも干渉したのに防げなかったわ、とも。

とりあえず落ち込んでいた彼女に気にしていないと伝える。

むしろ一度目の衝撃をやり過ぎしてくれた事にお礼を言う。
そうじゃないと名前を呼ぶ彼の声が聞けなかったもの、というと彼女は綺麗な声だったわねえと笑った。

そうしていると部屋付きの使用人が私が目覚めたのに気付き、お父様を呼んで来てくれた。

やはりお前も倒れたか。まあ初めてアベルの顔を見た奴は必ずそうなるからな、仕方ない。

アベルの調子は良くなったようだぞ、叔母様たちが喜んでいた。帰ってきた水メイジの見立てでは、今は寝ているが明日は起きてくるはず、だそうだ。

叔母様方と積もる話があるから今日は泊まる。ゆっくり休め。

予想していたのならそう事前に言っておいて下さい、お父様。

そう告げたお父様は足取りも軽く出ていった。

よっぽど明日アベルと会えることが嬉しいらしい。

いや、私も気持ちは良く分かるけど。

使用人が食事を持ってこようかと言ってくれたけど断って再びベッドに潜り込む。

胸が喜びでいっぱいになっていて、食事をする気が湧かなかった。

だって、天使が、あのアベルが私の名前を呼んでくれた！

イザベラって、まるで天から降り注ぐ光のような清らかさと優しさに満ち溢れた声で、私の名前を！

急に恥ずかしくなって、行儀が悪いと知っていても足がバタバタと暴れてしまうのを止められない。

嬉しい嬉しい嬉しい　もっと私の名前を呼んで欲しい。
今日はあの一回だけだったけど、明日はもっと呼んでくれるよね。
そしたら私も自己紹介して、彼の名前を呼ぼう。
もしかしたら微笑みかけてくれるかもしれない。
どうしようも本当にそうになったら私、嬉しすぎてきつと死んじゃう。

顔に熱が集まっていくのが分かる。

心臓が早鐘を打つのが聞こえる。

彼の事を考えるとそれらは更に加速していく。

そして唐突に理解する。

そうか、私は彼のことが　。

ウンディーネが私の異変に気づいて、どうしたのイザベラと心配気に尋ねてくる。
少し恥ずかしかったけれど、私の気持ちを彼女に宣言しておきたかった。

「ウンディーネ、貴女言ったよね、私に恋をしているのかって」

「ええそうよ、イザベラ。でも貴女、違うって」

「ウンディーネ、私　アベルのことが、好き」

今日初めて会ったと言っても過言ではないし、私も彼もお互いの事を良く知らない。

でも、私は彼の事が好きだ。

彼の事を知っていけば、もっと好きになれると確信しているほどに。彼の声を、彼の瞳を、彼の全てを　愛している。

ウンディーネから驚いたような、嬉しいような複雑な気持ちが伝わってくる。

いきなりの事に彼女も驚いているんだろう、なんだか不安になってきた。

もしも彼女に反対されたらどうしよう。

絶対に諦める気はないけれど、やっぱり悲しい。

すると珍しい事にあまり私の中から出てこない彼女が分離して、私の目の前に現れた。

認めたくはないけれど、優しい姉のような彼女は私を微笑んで抱きしめた。

「おめでとう、イザベラ。素直じゃない貴女がそこまで言う相手だもの。私も応援するわ」

祝福の言葉。この心が認められた証だった。

「…ありがとう、ウンディーネ」

背中にまわされた腕に手を添える。

ひんやりとしたその温度が、熱くなった私の身体には心地よかった。

その夜は、彼女と色々な話をした。

主に恋の話だったけれど、とても勉強になった。

男の人に自分を可愛く見せる方法とか、気を惹く言葉使いとか、好みを把握する方法とか。

今まで魔法の事ばかり学んできたから、そんなことがあるんだと驚

いた。

…アベルは、どんな子が好きなのかしら。

お話に夢中になっていたら、窓の外に見える双月があと少しで交差する時間になっていた。

ウンディーネは私の中に戻って、お休みなさいと挨拶を交わした。改めて潜りなおしたベッドの中はとても温かくて、なんだか幸せな気分になった。

明日がとても楽しみ。

今夜はいい夢が見れそう。

朝は部屋付きの使用人に起こされた。

着替えの服や身支度を整える道具は、ノートルダム家の方で用意してくれたらしく全て揃っていた。

部屋に備え付けられた水場で身体を清めて、気合いを入れて支度をすする。

ウンディーネのアドバイスを受けながら鏡の前で化粧道具と格闘していたら、拙い腕を見かねたのか使用人が手伝ってくれた。

イザベラ様はお肌が綺麗ですからお化粧乗りがいいですわねと微笑まれた。

この屋敷は、主も使用人もいい人ばかりだわ。

お父様たちは朝食のために食堂に集まっているらしい。

今日はイザベラ様のご治療のおかげで坊ちゃまのお体の調子もいようで、珍しい事に皆様とご朝食を摂っておいででしたよ。

使用人が教えてくれたその言葉に自然と廊下を進む足が速くなる。案内の使用人を何度も追い越しそうになって、その度に自分の焦りを抑え込もうとして失敗した。

食堂への廊下が、永遠に続くように思えた。

到着した食堂には話の通りに皆が揃っていた。

そして、アベルも。

彼が視界に入った途端くらっとしたが、ウンディーネが体内で支えてくれてどうにか持ちなおした。

挨拶を交わしつつ食卓に着くと、すぐさま使用人たちが朝食の用意を整えていった。

食事中の会話は無礼なので話したい衝動を抑えつつ、とりあえず料理に手をつける。

すごく美味しいのに、料理に集中できなかった。

つつい視線がアベルの方に向いてしまう。

彼は私よりも明らかに少ない量の料理をゆっくりと咀嚼していた。

シルバーを持つ手がとても優雅に動いて料理を切り分けていく。

食器の扱いが私より様になっていのを見て、女としてやっぱり負けている気がした。

皆の食事が終わり、食後のお茶が運ばれてきてやっと話が許される時間が来た。

それでもいざその時間が来ると緊張して話出せない。

どんなふうと話せばいいんだろう。

体内のウンディーネが応援してくれる声が響くけど声が出ないんだもの、どうしようもないわ。

お父様と叔母様たちはとても楽しそうにお話しているけど私はそれどころじゃない。

アベルはお茶をのんびりと飲んでいた。

本当にどうしよう。今日は王宮に帰らないといけないから数少ないチャンスなのに。

いざという時に役に立たない自分が情けなくて仕方が無い。

こんな私じゃだめだ、アベルも私に好かれていたら迷惑だわ。

このまま押し黙って帰るまでの時間を稼ごうと決めた時だった。

「イザベラ姫」

アベルに話しかけられた。

「…へ、は、わ、私ですか!？」

彼の思わぬ行動に焦って上手く話せない。恥ずかしい。

「はい、姫。今まで眠ってばかりで挨拶もできずに申し訳ありません。私、ノートルダム公爵家嫡男にあたります、アベル・サンタムールと申します」

「…お体の事は父から聞いていました。お気になさらず」

「姫のご寛大なお心に、感謝いたします」

そう言っただけは安心したように微笑んだ。

ウンディーネが支えていてくれなかったらまた気絶してた…!!

どうにか耐えきった私に、次の彼の言葉で更に大きな衝撃が走った。

「皆から聞きました。専属の水メイジが出ていて打つ手が無く眠っていた私を治療してくれたと。とても楽になりました。本当にありがとうございます」

嗚呼、報われた。

この5年間、彼を助けたくて、色々なものを諦めて駆け抜けてきた。

女の子らしい格好は治療に邪魔だからと儀礼の時以外は諦めて、社交の場に出ることも時間が惜しくて諦めた。

だんだん可愛さを増していくシャルロットが羨ましかった。

自分で選んだことだから後悔はなかったけど、それでも諦めたそれが眩しかった。

だけどそんな辛さとか苦勞とか悲惨さとか、全部全部報われた。

ありがとう、と

そんな彼の、アベルのたった一言に、救われた。

どうしよう、嬉しいよ、嬉しすぎて 泣きそう。

思わず嗚咽が漏れそうになって、必死でそれを飲み込む。

アベルに伝えたいことがあるから泣くわけにはいかない。

「…アベル様、どうか私の事はイザベラと呼んでくださらない？ 貴方の方が王位継承権も高いんですし、私も貴方のこと、名前だけで呼びたいの」

言ってしまった。

涙も引っ込んでしまったし、自分でも赤面していると分かる。

アベルの驚いたような顔を、見ていられなくて俯いてしまう。

いきなりすぎるだろ私。出会ったばかりの貴族の男女がお互いを名前呼びとか有り得ない。

言っただけからそのリスクさに後悔する。

…断られたら私、絶対立ち直れなくなる。

それでもやっぱり、彼は私を救ってくれるのだ。

「勿論です、イザベラ」

顔をあげた私の目には、アベルの微笑みが映りこんだ。

やばい、幸せすぎて死んじゃいそう。

その後の事は思い返しても赤面物だ。

嬉しさでテンションがおかしい事になった私は、調子の良かったアベルを庭に連れ出して色々な話をした。

今思い返しても恐ろしいテンションだ。素面の私には絶対に無理。

ウンディーネのことを話すと、精霊が使い魔だということに驚いていたけれどすごいと笑ったし、水魔法の使い手として治療師をしていると言えば其処までの苦労を労われた。

彼も色々な話をしてくれて、面白い話や興味深いその話に、私はいつの間にか猫を被る事を忘れて素の言葉使いをってしまった。

あまりにもあまりな言葉づかいをして嫌われると思ったけれど、それでもアベルはそのほうが私らしいと笑ってくれた。

本当にどうしよう、彼の事、知れば知るほど好きになる。

昼前には王宮に帰らないと夕刻までに間に合わないからと、ノートルダムを出発することになった。

折角仲良くなれてもとお話したくて離れがたかったけれど、アベルが日が沈んだら街道も物騒になるから早めに帰ったほうが良いといったから、渋々だけど帰ることにした。

帰り際に見送りに出てくれた彼と約束をした。

また貴方の調子を診に來たいんだ。今度は貴方の専属のメイジと話合って、治療方針を定められたらもつと良くなるかもしれないから。そしたらアベルはまた微笑んで、是非と言ってくれた。

どうかまたノートルダムに來てください、イザベラ、と。

夢のような1日だった。

馬車に乗り込んでそう思い返す。

お父様もアベルに会えて上機嫌だし、ウンディーネも嬉しそうだった。

きつと次に訪れたときも、彼らは変わらず其処に在るんだろうと確信できるほど優しい世界だった。

大叔母様も大叔父様も使用人たちも、アベルも。

私もいつか、あの世界の一員になれるだろうか。

いいえ、絶対になってみせる。

アベルの第二の専属水メイジとしても、…お嫁さんとしても。

絶対に、諦めないんだから！

イザベラ、14歳。恋の花咲く、ある春の一日だった。

ある王女の決意（後書き）

というわけでイザベラ嬢魔改造話でした。

水のスクウエアメイジ、ラグドリアン湖の水精霊の使い魔化、原作のキーアイテムでもあるアンドバリの指輪の入手、先住魔法の使い手化。

などなど原作からの乖離がマツハで進んで行きました。

あれおかしいな、プロット切った時点ではスクウエア化するまでで終わりだったのに。

どうしてこうなった。

そしてイザベラ嬢、主人公に恋をするの巻でもあります。

手羽先の中のイザベラ嬢のイメージが、なぜか男前な乙女だったのでキャラがおかしいです。

主人公への想いで血の滲むような努力をする程度のヤンデレ。

…軽症ですよ？

さて、ここで皆様のお力をお借りしたく重要なお知らせをさせていただきます。

厚かましいことに、主人公の守護者の能力案をいただければなあと。

現在守護者は2人で、簡単なキャラクターも決定しています。

性格なども皆様から募集しようかと思っただのですが、手羽先は自分がそのキャラクターに入り込めないと書けないという驚くべき駄目野郎なので断念しました。

募集要項を簡潔にまとめると、

- ・ キャラクター名とその由来。
- ・ キャラクターの二ツ名。

- ・キャラクターの能力。
 - ・キャラクターの特徴。
- の4つです。

大変失礼なことなのですが、皆さまから募集した案をミックスして利用させていただくこともあるかもしれません。

あれもこれも素敵なお案ばかりで、迷って決められない手羽先が既に今から予想できるからです。

前述の事をご理解いただけただうえで、しゃーねーな協力してやんよというお優しい方々は感想欄からご応募してもらえると幸いです。募集締め切りは二週間後の11月21日の日曜日とさせていただきます。

沢山のご応募お待ちしております！

その3 (前書き)

今回も原作崩壊、捏造、キャラ崩壊が見られます。
苦手な方は回避してください。

その3

お父様が心配そうな顔をして俺の方を振り向いた。

「それではアベル、私たちは先に向かっていますよ」

「どうか道中お気をつけて。私もすぐ出発しますから」

熱がある程度下がったら追いかけるから心配しないでね。

そういう気持ちを込めて言葉を返したら、先に馬車に乗り込んでいたお母様がなんだか悲しそうな声で俺を窺めた。

「駄目ですよアベル。貴方はゆっくり来てもいいんですからね」

「お母様：最近本当に調子がいいんですよ。だから大丈夫です」

うん、現在進行形で熱出してる奴の台詞じゃないね。説得力皆無だ。案の定イザベラに苦笑された。

「貴方の身体のこととは私のほうが分かっているのよ。馬鹿な事言っていないで休んで頂戴」

「イザベラ姫の言う通りですよ。決して無理はしないように」

「…はい、お父様」

このままじゃ3人が出発できないので、渋々だが頷いておく。寒空の下に何時までも立たせたままにしたくない、早く馬車に乗っ

てほしい。

どうにかお父様たちは納得してくれたようで、やっと馬車はノートルダムを離れていった。

「さ、坊ちやま。お部屋に戻りましょう」

使用人が抱えあげてくれる。

俺はその腕の中で、今にも雪が降り出しそうな曇天を仰ぎ、白い息を吐いた。

どうしてこうなった。

その一言が俺の只今の心境だった。

発端は、3か月前。

いつものように屋敷を訪ねてきたイザベラの知らせだった。

イザベラ。ガリア王国第一王女にしてジョセフお兄様の娘である。原作ではタバサことシャルロットの従姉で、ガリア北花壇警護騎士団長として無理難題を押し付けるツンデ…げぶごぶ、性悪女として登場していた。

しかしどうやらこの世界のイザベラは少し違うようだった。

優秀な水メイジとして、貴賤を問わず治療を施す王女。

これがこのガリア国内でのみではあるが、イザベラの一般的な認識である。

人呼んで、慈悲のイザベラ。

ガリア国内の水メイジによるネットワークを作り上げ、平民でも利用出来る医療制度を実用化した功績を讃えての呼び名である。

本人は恥ずかしがって否定していたが、正直ぴったりだと思っ
てる。
ハルケギニア屈指の水メイジであるピエール老と何の障害もなく議
論できるほどの知識。

魔法・民間医療の枠を超えて確立させた独特の治療法。

そして何よりも彼女の能力の高さである。

スクウェアの実力に水精霊の使い魔。

そんな彼女の存在が俺に一つの確信を与えた。

原作のイザベラとの明確な違いである。

乏しいと描写されていた彼女の能力がスクウェアクラス、しかも使
い魔がラグドリアン湖の水の精霊という組み合わせ。

この事で俺はこの世界が、ライトノベルのゼロの使い魔からかけ離
れた世界だと確信した。

つまりは並行世界である。限りなく似通った、それでも別の世界。

彼女に出会う前もちょこちょこ違う部分を発見しては首を傾げて
いたが、彼女ほどの明確な証しが現れればいやでも気が付く。

このことは俺に更なる悩みをもたらした。

ただでさえまだ回避が決定したとは言えない狂王ジョセフの問題で
頭が痛いのだ。

それなのに新たな問題発生である。

この世界が原作と違う道筋を辿っているのなら、俺が知っている原
作知識は一切と言っていいほど役に立ってくれないのだ。
そもそもどこが同じで、どこが違うのかさえ分からない。
脆弱な身体のをいで屋敷の中から動けない俺は世間と隔離されてい
る。

はっきりと言おう、俺は箱入り息子で世俗には疎いのだ。

そんな俺にハルケギニア全土の情勢と、もはやうつすらとしか思い返せない原作知識を照らし合わせて違いを探し出すという事は不可能だ。

これからの指針にしていこうと頼りにしていた知識が役に立たなくなつて、俺は途方に暮れた。

そして開き直つた。

もう行き当たりばつたりでいいじゃん。どうせよく分かんなくなつちやつたんだし、と。

そんなこんなで開き直つた俺は、不確定な未来を憂う事をやめて今を満喫することにした。

現実逃避ともいうが。

優しい両親に優しい使用人に最高の環境。

これで現実逃避するなというほうが無理である。

さて、そんな俺の人生計画を叩き壊してくれたイザベラはというと、普通の可愛い女の子だった。

俺の治療に来てくれた彼女を気絶させる、というファーストインパクトのせいで虐げるといふこともない、とても優しい少女だった。

出会いから一年。今でも俺の治療のためにはるばる王都からノートルダムまで来てくれるのだ。

ピエール老と治療方針について周囲を気にせず盛り上がったたり、怪しげな薬草で作った薬をのまされたりはするが、おかげで俺の身体はだんだん良くなった。

とは言つても、寝込む回数がほんのちよつと少なくなつただけなんだけどね。

それでも俺が体調を崩したと聞いたら、自らグリフォンを駆って駆けつけてくれるのだ。

ただただ感謝の一念である。

王女としての公務も忙しいだろう彼女は、ただでさえ少ない余暇を俺の治療に費やしてくれている。
王都からもって来てくれる情報や、同年代の友人といえる彼女のおかげで俺の世界は広がった。
ほんと、友達というものはいいものである。

閑話休題。

さてそんな彼女が、秋もそろそろ終わるといふ時期にもたらした重要な知らせのことだが。

現ガリア国王ルイ26世陛下の寿命が迫っているということだった。

うん、開き直ってからの一年間ですっかり忘れてたよ。

ルイ26世陛下。

フィーネお母様の腹違いの兄で、俺の伯父で、イザベラの祖父。そしてジョセフお兄様とシャルルお兄様のお父上だ。

原作ではジョセフの狂王覚醒の原因になる王位継承争いの切っ掛けになった死である。

もちろん何の対策も打っていない俺は目茶苦茶焦った。

しかしここでハイスペックイザベラの存在の影響が出た。

体調の悪そうな祖父に気付いた彼女がウンディーネと共に精査。重篤な病魔に侵されていることを発見したのである。

他多数の水メイジが診察して下した判断も同じだったそつだ。

体内のいたるところに悪性の腫瘍を発見。

前世でいうところのガン。

しかもかなり末期のそのせいで陛下の寿命は長くないだろうという結論に達した。

これを受けた陛下は、自らの死を視野に入れた必要な事をこなしらしい。

その結果、原作とは違いあらかじめ次代の王が決定された。

第一王子ジョセフである。

これまた原作とは違い貴族の反発は少なかったそうだ。

十数年前から彼に対する王位継承を見据えての手回しの成果であり、オルレアン公の宰相位就任の発表。

そしてジョセフ王子自身の功績である。

箱入りの俺は知らなかったことだが、ここ十数年ジョセフお兄様は魔法の使えない自分でも王位を継ぐことが出来るようにと功績作りに励んでそうだ。

経済の仕組みの見直しや腐敗した貴族の一掃。

積極的な平民の登用や国家防衛のための軍力拡大、農地改革、魔法・またはそれを用いない新技術の開発等々。

結果、ガリアの国力は大幅に増大したそうだ。その優秀な頭脳を惜しみなく活用して国に還元した結果がこれである。

流石は未来のガリア王。公式チートの名は伊達ではない。

魔法が使えなくても、王としての素質を存分に証明したのである。

魔法至上主義の貴族たちも、御輿となるであろうシャルルお兄様が

ジョセフ王擁立に参加してしまっただうえ、第二王位継承権を自ら放棄。

王にはならないと内外に示してしまったのだ。

貴族たちも混乱したらしく、その隙を突くようにオルレアン公の宰相位への就任を発表。

結果不満がある程度解消され、なんとか抑えられたそうだ。

まだ鬱陶しい魔法至上主義者がいるらしいけど、実際に功績出しているジョセフお兄様が即位したら完全に抑えられるだろう。

もはやガリアは魔法先進国としてだけではない、魔法に頼らぬ術の国としても成長し始めたのだ。

ハルケギニア全土から異端認定されかねない技術者たちを、国内に誘致してまで技術の発展に着手し始めたようだね。

そのうちガリア技術革命とか起こってもおかしくないんじゃないかな。

そんなこんなで即位争いについての心配は片付いた。

が、しかし現王が崩御するのだ。

国内でも極一部の者しか知らない情報ではあるが、色々なごたごたが予想される。

イザベラの知らせと共に、我が家はその対策のために慌ただしくなった。

まずはお父様。

軍内部での崩御に伴う引き継ぎや混乱を抑えるために、ただでさえ大変な仕事が更に大変になり、屋敷に帰ってくる日も時間も殆ど無くなった。

そして現王妹であるお母様。

王族としての役目を果たすため、弱い身体に無理を強いて王都へ直

接打ち合わせに向かう日々が続いた。

2人がいない屋敷はまるで火が消えたように静かでさみしかった。

もちろん俺ことアベル・サンタムールにもやらねばならないことは
沢山ある。

なにせシャルルお兄様の宰相位就任に際しての王位継承権放棄で第
二王位継承者に繰り上がったうえ、ジョセフお兄様が王位についた
ら更に繰り上がって第一王位継承者になるのである。

下手しなくても次期国王なのだ。忙しくない訳がない。

しかし周囲が身体の事や年齢の事を気遣ってくれたおかげで、俺は
非常に平穩に過ごせていた。

なんかすごく申し訳ない。

そしてとうとう昨日の夜、王都からルイ陛下危篤の報が届いた。

どうにか仕事を終わらせて帰ってきたお父様はお母様を連れてとん
ぼ返りとなった。

俺も一緒に行かないといけないのだが、3日前から急に冷え込んだ
気温のせいで熱が出てしまった。

ピエール老や、この忙しいときにノートルダムまで来てくれたイザ
ベラの診断の結果、このまま旅をさせれば死んでもおかしくない
と断言された。

最近は何のおかげもあってだいぶ良くなってたんだけどな……。やっ
ぱりこの体はポンコツなのか。

結局話し合いの結果、お父様たちは先に王都に発って、ある程度回
復した俺が追いかけるという事になった。

イザベラも同じ馬車で王都に帰るそうだ。

お父様たちは大急ぎで準備を整え、先ほど出発した。

もはや原作の通りに進むか進まないかさえ分からない、危険度の高い騒動だ。

できれば皆の傍にいて、まずい方向に進みかけたときは修正を図りたかったがしかたがない。

今の俺に出来ることは早急に熱を下げ、どうにか動けるようになるまで回復することである。

使用人に運ばれた自室のベッドに横たわり、ピエール老の治療を受けながら俺は眠りについた。

意識を取り戻した時、窓の外は夕日でオレンジ色に染まり初めていた。

幸い熱は下がり、ピエール老の処方してくれた薬のおかげで動けるようになったので、早速屋敷を発つことになった。

これから王都に向かったら到着するのは深夜前だろう。せめて死の間際にでもいいから間に合えばいいのだが。

使用人に抱えられ、玄関に出るとそこには護衛の騎士のための馬、そして俺の乗る巨大な馬車が用意されていた。

とにかく速度重視なので連れていく随従は最低限である。

交代要員を含めた御者が2人に、使用人2人、そして俺の容体が急変した際に備えてのピエール老。

あとは並走する護衛の騎士が十数人だけである。

メイドが荷物を入れたトランクを、馬車の荷台の下にある空間に詰め込むのを待つて出発準備が整った。

生まれて初めての屋敷からの外出が、王都への強行軍。

しかも体調不良の上、用事は国王の御不幸である。

なんかすつごく残念な気分だ。

心配そうな顔をして見送ってくれた使用人たちに手を振って、俺たちは屋敷を後にした。

王都リユティスとノートルダム領の距離は、馬車を全力で飛ばして約6時間。

外に出たことのない俺には近いのか遠いのか分からないが、街道も整備されていて旅しやすくなっているようだ。

共に馬車に乗り込んだ使用人が教えてくれたことだが、正直俺はそれどころじゃなかった。

人生初の馬車に酔っていたからだ。

この馬車は公爵家に複数ある馬車の中でも最高ランクのものだそうで、その分乗り心地も良いらしいが、そんなこと関係なく見事に酔った。

走りだして間もなく、すさまじい吐き気に目眩に頭痛が俺を襲った。冬の寒さが体調に影響したうえの馬車酔い。

気持ちの悪さで死ぬかと思った。

ピエール老がすぐ対処してくれて結構楽にはなったけれど、原因である馬車に乗り続けている限り、完全には良くならない。

座っているのも辛いので、馬車の内部に備え付けられていた簡単な寝具に横になった。

（馬車にこんな機能もついていることに驚いた。しかし使用人が教えてくれたが普通の馬車にはこんな機能はないらしい。馬車自体が有名な土メイジに依頼して作られたものだからだそう。名門ノートルダム家だからこそ持てる一品らしい）

使用人が荷物入れから柔らかい掛け物を出して来て、俺にかけてくれる。

おかげで寒さと気持ち悪さが和らぐ。

酔いでだいぶ体力が削られていたのか、俺はあっという間に眠りに引きこまれた。

目覚めは、唐突だった。

衝撃。

眠っていた俺の脳が揺さぶられて、一気に眠りから引き戻される。覚醒しきらない身体に再び衝撃が走って、馬の嘶きが聴覚に叩きつけられる。

「坊ちやま…!!」

使用人が俺を起こして、そのまま何かから庇うように抱え込んだ。その顔には明らかな恐怖が浮かんでいる。

馬車の外から叫び声や金属がぶつかりあう音が聞こえる。

暇な時に散歩した屋敷内の練兵場で聞いたことのある音だ。

剣の音？

いくら整備されているとはいえ夜の街道は物騒だ。

徒党を組んだ盗賊が襲ってきているのかもれない。

けどそれにしては様子がおかしい。

この馬車はノートルダム公爵家の印が入った特注だ。

普通の盗賊は報復を恐れて、貴族の馬車は襲わないと聞く。

それに護衛の騎士たちは盗賊程度に苦戦するような訓練は受けていないはずなのに。

時間が、かかり過ぎている？

ピエール老も外の様子がおかしいのに気付いたのか、馬車の窓のカーテンを少しめくって外を見た。

ちらりと見えた外は篝火かなにかが焚かれていたのだろう、赤く明るかった。

様子を伺ったピエール老が舌打ちをする。

「盗賊じゃない、訓練を受けた兵士と傭兵の混成部隊だ」

なんでそんな事分かるのか聞きたかったが、そんな余裕はなかった。相手がプロなら護衛の苦戦も頷ける。

でも、なんでそんな奴らが俺たちを襲う？

その考えは、馬車の扉を襲った衝撃で打ち切られた。誰かが扉を破ろうとしている。

「坊ちゃん、動くんじゃないぞ」

ピエール老が杖を抜いて、馬車の扉に相對する。

襲撃者が扉を開けた瞬間を狙って攻撃するためだろう。

水メイジのピエール老は攻撃は不得手のはずだ。

相手が訓練を受けているのなら尚更不利だ。

抵抗しない方がいい、やめてくれ、と叫ぼうとした瞬間、扉が破られた。

詠唱していたピエール老が馬車の外に飛び出す。

使用人が俺を抱え直したせいで、視界が塞がれ何も見えなくなる。

なにか、起きている？

聴覚が外の混乱を伝えてくる。

怒号、悲鳴、断末魔。

極度の緊張で意識が薄れていくのが分かる。

いつそ意識を失えたら楽なのに、あまりの恐怖にそれさえも許されない。

馬車がまた大きく揺れた。

使用人の悲鳴が響いて

外に引きずり出されたと気付いたのは、その腕から引き離されてからだった。

「おい！ガキを捕まえたぞ！」

「でかした！」

乱暴に腕をとられて冷たい地面に押さえつけられる。

顔が地面に叩きつけられて頭が揺れた。

ちよ、まじ痛い鼻打った…！

「坊ちやま！」

使用人の絶叫。どうやら彼も捕まっているようだ。

「ちゃんと依頼されたガキか確認しろ！間違ってたらただじゃ済まねえぞ！」

「あいよ！」

髪を掴まれて強引に顔を上げさせられる。

痛い痛い痛い、禿げたらどうしてくれるんだこのボケ！！
あまりもの暴拳に、感じていた恐怖を忘れて叫ぼうとしたその時、
ぴたりとその場が静まった。

そしてバタバタと倒れていく賊たち。

「坊ちやま、お怪我は…！！」

拘束から逃れた使用人が駆け寄ってきて俺の無事を確かめる。
護衛たちが倒れた奴らを捕縛していく。

神懸った美貌の加護。

生まれて初めてこの加護が役に立ってくれた瞬間だった。

全員を捕縛し終わって、手当のために一時足止めという事になった。
馬車の周囲には警戒のため護衛が散っている。

多少怪我をした者は、無事だった。ピエール老が治療している。

先に俺の怪我を見ようとしてくれたが、傷から出る血が怖くて皆の
治療を優先してもらった。

今は使用人が俺の顔の擦り傷を消毒してくれている。
傷に薬が沁みて痛い。泣きそう。

皆の治療が終わったのか、ピエール老が近づいてきた。

「坊ちゃん、顔見せてみる」

ピエール老が俺の顔を覗き込む。

消毒されているとはいえ菌が入ったら、脆弱な俺の身体にとっては一大事だ。

ピエール老もそれが分かっているらしく、いつもより丁寧に治療してくれる。

「しかし坊ちゃん顔に救われるとは、世の中何が起きるか分らない」

「功労者ですよ、褒め称えなさい」

冗談めかして言うと苦笑を返された。

そんなことを言っていると、賊たちの近くにいた騎士がこちらにきて報告を始める。

「アベル様、どうやら賊は何者かに雇われたものたちで間違いないようです。今、叩き起こして尋問していますが、中々口を割らないので指示してた者は不明です」

「御苦労。だけど今は王都に向かう事を優先したいんだ。どうすればいいと思う？」

「もう少し先に町がありますので、その屯所に賊を預けて進みましょうか？」

「そうだね、こんなところに何時までも留まってはられないけど、賊を放置してもおけないし。そうしようか」

「はい、それでは出発の準備を整えてきますので暫しお待ちください」

そう言つて彼は仲間の騎士たちに通達に行くのだろう、賊の傍に戻つていった。

騎士や使用人が壊された馬車の修復に取り掛かり、その場を離れる用意が出来たのは数十分後だった。

その間騎士たちは賊の尋問を続けていたようだが、彼らは黙つたままだつたらしい。

誰が指示して襲わせたのか気になったが、とにかく王都に辿りつかねばならない。

賊の尋問は王都からの帰りに引き取つてゆっくりすればいい。

馬車の修復の間、賊の持つていた篝火を元に作られた焚火にあたつていた俺が、再び馬車に乗り込むため、使用人が伸ばした腕に抱えられようとした瞬間だった。

俺以外の全員が倒れた。

「…え？」

いきなりの事に考えが追いつかない。

俺に腕を伸ばしたまま倒れこんだ使用人。

乗っていた馬から転げ落ちた騎士たち。

背後にいたピエール老。

全員が、一瞬の間に倒れた。

立っているのは、俺一人だけ。

首筋に悪寒が走る。

冬の寒さのせいじゃない。

酷く、嫌な予感がして止まない。

「み…んな？」

どうにか喉から言葉を絞り出す。

情けなく掠れたそれは冷たい空気に溶けて消えた。

さっきまであたっていた焚火の薪が崩れ落ちる音が響く。

そして、それに紛れるように小さな靴音が背後から聞こえた。

篝火は今の崩落で消えて真っ暗になってしまい、何も見えないと知っていたながら、反射的に振り向く。

するとそこには。

黒い服に、黒髪。

白い包帯でぐるぐる巻きにされた目。

夜の闇に掻き消されてしまっんじゃないかと思つほど、気配の薄い男が立っていた。

蒼い双月の幽かな光に照らされた彼に、強烈な既視感を覚える。

俺は、彼を知っている？

嗚呼、でもそれよりも彼は。

「…やはり失敗したか。まあいい、その分俺がやるまでだ」

その呟きに意識を取られ、思考が逸らされた瞬間。

俺と彼の距離が一気に縮む。

近づいてきたんだと気付いた時には遅かった。

首筋にチクリと痛みが走る。

身体が崩れ落ちるのが分かる。

そのまま地面に衝突するはずだった身体は、彼の腕に受け止められた。

ジワリと闇が視界を覆っていく。

彼が何やら話したようだけど聞こえない。

完全に意識が闇に落ちる瞬間、考えていたことは一つだけだった。

なんで、日本人がハルケギニアに　？

その3（後書き）

- 1、主人公開き直る。
- 2、主人公王都へ。
- 3、主人公、日本人？に出会う。

今回は説明の多い回でした。

いえ、手羽先の書くものはだらだらと説明が続くのが悪い癖なんですけどね。

王都に向かう道中で襲われた主人公たち。

一体何時になったら辿りつけるのでしょうか？

次週は王都視点を書いていきます。

応援して下さい皆様感謝を籠めて。

その時、王宮では。(前書き)

久しぶりの投稿です。

今回は王宮の皆様視点。

オリキャラが出てきますので、苦手な方は回避願います。

その時、王宮では。

太陽が沈み、光照らす双月の無い闇夜が広がってしばらく。
この国の頂点に立つものたちが横臥するに相応しい、歴史の満ちた
寝室。

僕たちはそこで、寝台に横たわった父上を囲んでいた。

「…ウンディーネと私の見立てでは、今夜が峠だと思えます」

僕の姪　イザベラの言葉に、室内の空気が更に重く感じられた。

「ルイお兄様…」

フィーネ叔母様が震える声で父の名を呼び、耐えきれなくなったの
かその身が大きくふらついた。

「フィーネ…！」

傍に立っていたユベールが、彼女を抱え込むように支える。

「無理をしないでください、貴女はただでさえ身体が弱いのですよ
…！」

「ユベールの言うとおりだ、叔母様。貴女にも倒れられたら一大事
だ」

兄さんが控えていた女官を呼び、休める部屋を用意するように言い
つける。

フィーネ叔母様は父の崩御に備えるための準備に追われ、ここ数日、

睡眠はおろか休憩もろくに取っていないと聞く。

脆弱なその身体は、すでに限界寸前だったのだろう。

ユベールに支えられたまま、用意された部屋に向かうため退出していく。

「心構えは出来ていたつもりだったが…、その時が来てみないと分からぬものだな…」

そう呟く兄さんの顔にも、疲労の色が隠しきれない。

そう　　宣告されたあの日　　とうの昔に出来ていたはずだった。

父が、死んでしまう覚悟など。

父の身を蝕む病魔が発見された時、僕を含めた周囲は大きく動揺した。

兄さんの王位継承に反発してる魔法至上主義者の抑えは計画通りに進んでいたが、まだ完全とは言い難かったし、崩御に伴う騒動も目に見えていた。

しかし、治る見込みのない病だと診断した孫娘の言葉に、当の本人は動じなかった。

己の残り少ない寿命を受け入れ、次代の憂いを失くすための計画に打ち込んだ。

いつも通りの父だった。

その身を蝕む取り返しよのない病は、激痛をもって彼の時を削り続けているだろうに。

処方された痛み止めの秘薬を服用し、無理を押し働くその姿に、

哀れみとも悲しみともつかない感情を覚えた。

王以外の何者でもない彼。

昔の僕らだったら、その姿を捻くれた形で捉え、きっとその本心に気づくことはなかっただろう。

11年前、あの運命の日。

歳の離れた弟と呼ぶ存在、アベル。

彼の言葉と叔母様たちの後押しをきっかけに、王宮に帰った僕と兄さんは父との対話を試みた。

たくさん話をした。

判明した沢山の誤解とすれ違い。

伝えなかったこと、伝えられなかったこと。

父上の若いころ、亡き母の思い出、僕らの成長の記憶。

許されないことだけど、その日は公務を放り捨てて、一日語り明かした。

あの、厳格な父でさえも。

彼はただ、王としては優秀でも、父としては不器用なだけだったのだ。

僕ら親子は歪んでいたのだろう。

親としても、子としても、兄弟としても。

それがやっと正された。家族としてもう一度形作られた。

それ、なのに。

11年。

今までバラバラに歩んだ人生の前には、比べることさえできない短い時間。

心地よい、大切な、家族の時間。

それが今、終わろうとしている。

ただ無為に過ぎ去った、あの冷たい時間が惜しかった。

「…なあ、シャルル。俺たちは、この人に貰ったものの半分だけでも、報いることができただろうか…？」

兄さんの言葉に、僕は強く手のひらを握りこんだ。

そうじゃないと、溢れ出しそうな衝動のままに、目の前で横たわる彼の人に、縋り付いてしまいそうだったから。

133

典医団との会議のため、様々な準備がされた隣室に移動する。

皆、憔悴していた。

当然だろう。大切な人が死の淵にあるのだから。

昔、お父様と叔父様は、お祖父様と仲たがいでいたと聞いたことがある。

だけど私が覚えている最古の記憶の中では、すでに仲直りしていて、彼らはとても仲のいい親子だった。

だから私にとっての祖父は、優しい人というイメージしかない。

私だけでなくシャルロットも可愛がってくれた、不器用だけどやさしい祖父。

母と共に屋敷に残ったシャルロットは、悲しんでいないだろうか。

それにアベル。

ただでさえ弱い体は疲弊していただろうに、強硬にも伯父に会うことを望んだ彼。

か弱い身では屋敷から離れることさえままならず、王として王都を離れられない伯父には一度も逢ったことが無いという。

体調の悪さから反対した私たちを押し切って、後からとはいえ結局来ることに決まってしまった。

今は、馬車の中かしら。無事だといいいのだけれど。

”せめて、最後に一度だけでも”

そう告げた彼の、熱で潤んだ瞳が脳裏から離れない。

『こんな状況でも、あの子の事を想っているだなんて…。凄まじい恋心ね、イザベラ』

ウンディーネの声が響いた。

なによ、色ボケしてるって事!?

『そうじゃないわ、本当に心配してるって伝わってくるもの。…本当に、無事だといいいのだけれど』

そう、ね…。

再会から1年。

水精霊・ウンディーネと凄腕の水メイジ・ピエール老と共に行われた幾度もの治療は、依然として目に見える成果を挙げていなかった。出来た事と言えば、わずかに発作の回数を減らすことと、体調のいい日に庭で散歩のようなものができる程度のことだ。

それさえも暑い夏が過ぎ去って後、秋が訪れてからになってしまった。

そんな僅かなことでさえ彼は、『庭に歩きに出ても、翌日体調を崩さないなんて！』と本当に嬉しそうにしている、余りの健康の基準の低さに私たちを絶句させた。

時々遠隔地から優秀な治療師を招き、診てもらうこともあるが、そんな彼らが告げるのは、言葉は違えどいつだって同じことだった。

なぜ、この体で生きて、あまつさえ笑っていられるのですか？

知るか、んなこと！

患者本人の目の前で思わずといった態で零れた、無礼としか言いようの無い物言いに、衝動的に蹴りを入れそうになってウンディーネに宥められた事は片手じゃ足りない。

まあ、アベルを最初に目にしたとき失神する様と、お礼を言って微笑む姿に再び失神する様で溜飲を下げているのだけだ。

どうにか慣れた私には眼福以外の何物でも無い訳だし、役得である。

しかし相変わらずどころか、ますます美しくなっていくアベルには、正直土下座してお願いその美しさ分けて半分だけでいいからと言

たくなる。

将来的に並んで比べられる身にもなっただけ、まったく。

しかも最近、シャルロットの彼への懐き具合が加速している。

昔は、あの美貌に逆に怯えて私の後ろに隠れてちらちら見る程度だったのに。

この前一同に会したときは、無理をかけないように飛びつくという高等テクニクを披露してくれたのだ。

しかも抱きついたまま、私だけに向かって勝ち誇った笑みを浮かべやがった。

あれは明らかに、アベルを異性として意識した上での行動だ。

周りにお父様や大叔母様たちがいなかったら、そのまま掴み合いに発展していただろう。

アベルに嫌われたくないから、そうならなくて幸いだ。

…負けるもんか、絶対。

『…ねえ、イザベラ、話がずれてないかしら?』

「大丈夫ですか?　フィーネ」

女官が用意した茶を飲む彼女を気遣うと、どうにか落ち着いたので、彼女はゆっくりと頷いた。

「ええ…ごめんなさい、さっきは取り乱してしまって。…もう大丈夫よ、ユベール」

そう言っただけこちない微笑が浮かべた彼女の顔は、血の気が抜け切

って蒼白だった。
無理も無い。

もともと弱い体に無理を強いている上、兄の死が間近に迫っているのだ。

それでも心配をかけまいと振舞うのは、さすがは王族女性と言っべきか。

心まで弱ければ、彼女は既に倒れていただろう。

そしてこんな時、悲しく思う。

強くなければ生き抜くことが出来なかった、彼女の境遇を。

「アベルは、まだかしら」

彼女の声に、過去へと思い馳せていた意識が引き戻される。

「そうだね、休みなしで飛ばしても結構かかるけど…もうそろそろだよ」

今夜は双月の無い闇夜だが、優秀な騎士たちが無事に息子を送り届けてくれるだろう。

「間に合うといいのだけれど…。一度だけでも、お兄様と会わせてあげたいの」

「間に合うよ。イザベラ姫や典医殿たちが頑張っている」

そう励ますと、彼女はまた微かに笑った。

「…ありがとう、落ち着いたわ。戻りましょう」

お兄様の傍にいてあげたいの。

長椅子から立ち上がろうとする彼女の手を引いて、支える。
以前よりも軽くなったその身に、原因である友を思わず恨んでしま
ったのは、仕方のない事だと思う。

再び王の寝室に全員揃った時と、意識を無くしていたルイ26世が
目を覚ましたのは、ほぼ同時だった。

「お兄様……！」

「……フィーネか」

寝台に駆け寄って名を呼んだ叔母様への答えに安堵する。
まだ話す程度には余裕が残っているらしい。

しかし、次の瞬間上がった呻き声に、室内に緊張が走った。
すぐさまイザベラや典医たちが魔法を行使して、苦しみを軽減しよ
うとするが、親父はそれを断った。

「……よい。痛みがあるほうが意識が冴える。……余はまだ起きていた
い」

眠って、二度と目覚めない事を恐れたのだろうか。

「御祖父様、痛み止めだけでも…」

「…ならん、イザベラ。少しでも気を抜いてしまえば、また眠り込んでしまいそうなのだ…。それよりも…居るか、ジョセフ、シャルル」

寝台に横たわったままでは確認できないのか、名前が呼ばれる。

「…はい、父上」

シャルルが、今にも泣き出しそうな声で返した。

「…此処に、親父殿」

自分の声もみつともなく震えていた。

「シャルル、シャルロットはどうした」

「妻と共に、屋敷で留守を」

「そうか…残念だ…。孫娘たちの花嫁姿を見ないで死ぬことになるとはな…」

親父は孫であるシャルロットとイザベラを可愛がっていたから…。これが巷で言う、祖父馬鹿かと笑いあったものだ。

「おい、ユベール。居るか」

打って変わってぞんざいな呼びかけに、彼が苦笑したのが分かる。

「おりますよ、陛下」

「…ふん、悔しいことに貴様より先に逝くが、フィーネを不幸にしてみる。祟ってやる」

「肝に銘じております。…お任せください」

「信頼できんな。フィーネ、安心しろ。この兄が死後もお前を見守っている」

「はい、お兄様…」

沈んだ空気を盛り上げようとおどける親父に、痛々しさを滲ませながらどうにか笑いかける叔母様。

しかしその笑顔も、次の言葉に掻き消えた。

「…フィーネ、ユベール。お前たちの子は来ておらぬのだな…」

公務の忙しかった親父は、一度もあの子に会ったことは無いのだ。体が弱い事、とても美しい子である事、とても賢い事、花が好きな事、優しい事。

俺たちやイザベラ、シャルロット、叔母様たちから話を聞いているとはいえ、知っているのはそれくらいだろう。

「…アベルは必ず参ります。お兄様に会いたいのだと、珍しく我が儘を言っ…」

「そうか、余も一目だけでいい…お前たち自慢の子を見たかった…」

既に諦めているらしいその言葉に、叔母様の顔が泣き出しそうになった。

ユベールがその肩を抱き、親父に向かって物申そうと口を開こうとした――その時だった。

「陛下、殿下方、失礼致します!!」

扉が乱暴に開かれ、数人の騎士が飛び込んできた。

この寝所は現在、俺達王族と重鎮・治療師、そして今際の際に懺悔を聞き届け、旅立ちの祝福を贈る司祭以外、立ち入ることを禁じられている。

だというのに。

「…何事か。」

寝所の主が、緊張が滲む声で問う。

余程の緊急事態でなければ、国王が今にもくたばりそうな中には来ないだろう。

まさか、押さえ残した魔法至上主義者どもがこれを好機と反逆したか？

親父が死んだ後、魔法の使いぬ俺が王になることを厭うて自棄になったか。

だが、その可能性を鑑みて、貴族のほとんどは王宮に呼び寄せて、俺の駒に監視させている。

俺と対立している輩も、国王崩御の慣例に従い、例外なく王宮に馳せ参じているだろう。

クーデター
反逆の可能性は低いはずだ。

いや、それよりも他国が機を見て攻め込んできたか。

有り得るであろう事態の絞込みと、その対処法・後始末への算段を付ける。

まあ、大抵の事は問題無く処理できるだろう。

しかし、騎士の口から告げられた知らせが俺の思考を凍りつかせた。

「ノートルダム公爵家御子息、アベル・サンタムール様が拐かどわかされたとの事です！」

その時、王宮では。（後書き）

今回は前話の裏側、王宮のお話でした。

ジヨセフとシャルルの捏造お父様登場の回でもあります。

今回は誘拐された主人公側。

守護者出すまでいきたいけど、難しいかな？

今回の投稿で守護者案の募集を締め切らせていただきます。

御応募下さいました、

天意無法の歌武鬼者 鬼龍院獣侍郎様

水上 流霞様

二重螺旋様

本当にありがとうございます！

上手く書けるかは分かりませんが、参考にさせていただきます。
手羽先の持てる力の限りを尽くしますので、これからもよろしくお
願います。

その4（前書き）

今回は僅かな殺人表現と強引な展開・ご都合主義が含まれます。
苦手な方は回避願います。

その4

目を開いたとき、周囲は真っ暗だった。

…あれ、夜？

私、寝付いたらなかなか起きないから、夜に目覚めるのは珍しいなあ。

それもこれもベッドと枕が、前世の炬燵に匹敵するほどの魔力を持っているのが悪いんだ。

超ふかふかで寝やすいんだよね、アレ。

さすが、寝込んでばかりの俺に合わせて特注された最高級品。

おかげで体が慣れちゃって、前世のホームセンターの安売りで買った、硬いパイプベッドに薄いマットレスを敷いた物みたいなのは、二度と眠れなくなってるんだろうなあ。

贅沢に慣れるというのも困りものだけ、まったく。

ああ、それにしてもこのベッドの硬い寝心地は、なんだか懐かしいなあ…。

などと眠りの余韻に浸かりつつ、ぼんやりと思っていた時だった。

「目覚めたようだな」

使用人のものではない、聞き覚えの無い男の声。

それに含まれた、無機質なナニカ。

頭の根幹が警告を発し、意識がはっきりとする。

同時に喚起される、意識が途切れる前の情景。

倒れこむ皆

暗闇。

幽かに見えた包帯男。

日本、人？

「っ！？」

思わず体を飛び起こす。

声が聞こえた方を見遣れば、そこには。

意識を失う前、最後に見た男がいた。

そこは蝋燭の光で照らされる、小さな部屋だった。

私は簡素なベッドに寝かされていたらしい。

男は一つだけある出窓の枠に腰掛けていた。

と、とにかく現状を把握しなければ。

誘拐事件のようだけど、もしかしたら違うかもしれないし。

生意気だーって殺されるかもだけど、正直不安でじっとしていられない。

「あ、あの、ここはどこですか？ それに貴方は誰…？」

びくびくしながら、なけなしの勇気を振り絞って質問してみる。

「…場所は言えない。俺は雇われてお前を拉致したものだ」

案外あっさりと答えてくれた。

あれ、意外といい人…かも？

前世知識の映画とか小説見た限りでは、嫌い騒ぐなって殴られそう
なもんだけど。

でも雇われて拉致って。やっぱり誘拐か。

この人自身は、私に用はないみたいだけど…。

「えっと、私、これからどうなるんですか…？」

営利目的？それとも家…サンタムール家に対する人質？
情報が少なすぎてどうすればいいか分からない。

「…俺自身はお前を連れて来いとしか命令されていない。ここで引
渡しということになっている」

…この人はこれ以上何も知らないのか？
雇われて言ってたし…。

「あ、ありがとうございます…」

お礼を言って黙ると、室内は静まり返った。

誘拐犯と二人きり。

き、気まずい…。

それにしても…。

ちらり、と男の姿を見る。

黒い髪。

目はぐるぐると包帯で巻かれていて見えない。

光に浮かび上がる肌は黄色味がかっている。

やっぱり、日本人などのモンゴロイドの特徴を持っている。

(ロバ・アル・カリイエの人間か…?)

この世界で比較的日本などの東と似た文化を持っていると原作に描かれ、実際にこちらでも学んだ見知らぬ場所。

たしか無能王の方のジョセフが使い魔にしていた…し、シーフード？
ジューズとも呼ばれていたような？

なんか違う気がするけど、その女の人の出身地もそこだったはず。

私はとつさに日本人と誤ってしまっただけど、ロバ・アル・カリイエの可能性の方が高い。

此方ではあんな真つ黒な髪は珍しいしなあ…。

「なんだ」

「…へ？」

「此方を見ていただろう。何か用か」

うおおお、気づかれてたの!?

目見えてないはずなのに、私どれだけ見つめてたの!?! 穴開くほど!?

「え、えっと…。その髪…ロバ・アル・カリイエの人なのかなって…」

恐る恐る答えると、彼はうっすらと笑った。

「…俺みたいなのは珍しいか？　ロバ・アル・カリイエじゃないよ。」

…もつと、遠い所だ」

遠い、所？

…原作に、そんな場所は書かれていたか？

「ロバ・アル・カリイエよりも…？」

「ああ…。遠過ぎて、二度と帰れないくらいだよ」

「…そ、そんなに！？…よ、よくハルケギニアに来れましたね。来るの、大変だったんじゃない？…？」

その問いに、彼は悲しそうにまた笑った。

「色々苦労したさ。…今もこんな事をしなきゃ生きていけない」

こんな事。

つまり、やりたくてやってるんじゃないって事？

…この人、やっぱりいい人なんじゃない？

も、もしかしたら仲良くなれるかも…！？

そしたら見逃してもらえるかもしれない！

…あれ、仲良くなるってどうするんだっけ。

よく考えたら私、友達ほとんどいないよ！？

前世の記憶は薄れていて、友達のことはちゃんと覚えてるけど、仲良くなった切欠覚えてないよー！

あ、でもクラス替えした時とか、新しい一步を踏み出すときは必ず自己紹介してたような？

ええい、当たって砕けるー！

「わ、私、アベル・サントムール・ド・ノートルダムといいます！
…貴方、は？」

緊張しながら搾り出した言葉に、彼は暫くして答えてくれた。

「…名は捨てた。…今はセツテと呼ばれている」

セツテ。

それは7の数字を意味する、ハルギニアで使われる単語の一つだった。

ターゲットは、想像していたよりも小さな子供だった。

同じように雇われた連中が失敗したのを確認してから俺は動いた。
難なく護衛の騎士たちや使用人たちを気絶させ、ターゲットを捕まえた。

段取り通りに進んだ仕事。後はターゲットを依頼人に引き渡すだけだ。

ただ、気絶させて抱えあげた体が酷く軽くて驚いた。
たしか13歳だったか。依頼人はそう言っていた。

栄養環境が決してよろしいとはいえない幼少期を送った自分も、こんなに軽くは無かったはずだ。
至れり尽くせりの生活を送っている貴族の子がこんなにも貧相だとは。

スピードに重点を置いた能力をもつ俺にさえ、移動の邪魔にならず

運ぶことが出来たほどだ。

隠れ家として指定された場所に運び込み、ベットに投げ出すと体がぼんと跳ねる音があがった。

マットレスに沈むことさえないなんて、どれだけ軽いのだと溜息をついた。

目覚めた子供の気配はひどく怯えていた。

無理も無いだろう。見知らぬ場所で誘拐犯と二人きりなのだから。ベットの上で硬直している気配に、つい気の毒に思ってしまった。

だというのに子供は、俺に話かけてきた。

肌色や髪色が珍しかったらしい。

拳句の果てに自己紹介までして、俺が答えを返すとほっとしたように気配が緩んだ。

まさか誘拐犯と会話しようとする被害者がいるとは思わなかった。まだ幼くて現状が飲み込めていないからかも知れないが、緊張感の無いやつだと苦笑してしまった。

貴族の子として守られているのならいいが、このように警戒心がないものはこの過酷な世界では生きて行けない。

俺がそうだったように。

無邪気に笑う子供の気配と会話していると、自分との違いをおかしく思ってしまう。

もう戻れないあの国で、俺もこんな風に笑っていたのだろうか？

こんなはずじゃ、なかった。

得た能力の代償に視界を覆う事を余儀なくされて、能力ゆえに汚れ
仕事で生きていく。
物語の主人公に憧れて、そんな風に格好良く生きてみたかった。た
だそれだけ。

セッテ
七。

その数字を姓に含んだ、夜を駆ける暗殺者のように。

あの神は嘘はついていなかった。

確かに望んだ通りの能力を3つ授けてくれているはずだ。

ただ、起こり得る可能性を考慮した能力を望まなかった俺が悪かつ
たのだ。

平民に生まれたから、限界まで引き出されるはずだった魔法の能力
は使えなかった。

貧しさゆえに生まれてすぐに捨てられ、拾われた孤児院でも虐めら
れたせいで対人恐怖症に陥ったから、愛する人に加護を与える能力
は使えなかった。

俺に残ったのは、七夜志貴の外見と能力 - - 並外れた身体能力と暗
殺技術と直死の魔眼だけ。

それさえも、外見の特異さゆえに迫害された。

ハルケギニア - - 白人社会では東洋人は異端でしかない。

虐めが嫌で孤児院を飛び出し、傭兵として魔物狩りをしている生き
ている中、そのことで何度も辛酸を舐めさせられた。

外見に難癖付けられての報酬未払いなど何度もあった。

苛立ちのまま圧倒的な能力に任せて殺してしまおうと思ったけれど、平和を尊ぶ日本人気質が身に沁み込んで疎んでしまって、ひたすらに耐えることしか出来なかった。

原作で黒髪黒目が受け入れられていたトリスティンのタルブ村に逃れようかと思っただけで、放浪しているうちに閉鎖的な村社会というものを学んで諦めた。

対人恐怖症の俺には、排他的な村社会で生きていける自信がなかった。

しかも成長するにつれ直死の魔眼はその力を増していき、視界を塞がねば生きて行く事さえまもなくなくなった。

皮肉な事に、視界を塞いだおかげで対人恐怖症は緩和されたのだが。

何度も考えた。

貴族に生まれていたのなら、幸せになれたのだろうか？

現在進行形でこの子の幸せを奪う手伝いをしている俺には、望む事さえ許されないことなのだろうか。

そう、思った瞬間だった。

「セツテさんは、すごく強くていい人なんですわね」

無邪気な声がそう言った。

思わず否定の言葉を返す。

俺は弱い。

弱いからこそこんな惨めに地を這って生きる事しかできないのだ。

俺は悪い。

だからこそお前を誘拐した。

そう言ったのに、子供の気配はまた無邪気に笑った。

「そんな事無い。私だったら見知らぬ土地で一人きりで生きるなんて絶対無理ですよ。なのにセツテさんは今までちゃんと生きていますし、誘拐が悪い事って思ってるじゃないですか」

「知っていますか？本当に弱くて悪い人はもつと酷い事をするし手段なんて選ばない。そもそも罪悪感なんて感じないんですよ」

無邪気だった。

苦い思いを一度もしたことの無い者だけに言える傲慢だった。心のどこかが熱く燃えるのを感じた。お前に何が分かるのだ叫びたかった。

なのに、子供は。

「私は貴方を悪い人とは思えないんです。だから貴方はいい人です」

そうあっさりと完結した。

そこに籠められていたのは、無条件の信頼だった。

馬鹿らしい。何も知らない温室育ちの奇麗事だ。

…そう頭は反発していたけれど。

この世界に生まれてから一度も感じる事のなかった心地よい感情に、心は暖かさを感じていて。

俺はただ静かに、包帯をまいた瞳を濡らした。

いきなり黙りこんだ俺にアベルは戸惑っていたようだが、泣いていた事に気づかれるのが恥ずかしくて雑談を盛り上げて誤魔化した。どうにか誤魔化しきれたようで、子供の気配は無邪気なままだった。

雑談しながら決意する。

依頼は断って、アベルを元の場所に戻そうと。

この子を犠牲にする道を選ばなかったら、俺は本当の意味で憧れた主人公になれると思うから。

狙いがアベルの依頼人とは揉めるだろうが、そこは実力行使である。アベルを解放した後は、他の国に移動して傭兵業を続けよう。

怖くて行く事の無かったトリスティンに行ってみるのもいいかもしれない。

…それにしても、遅い。

指定された時間を大幅に過ぎているはずだ。

引取り人が来ると依頼人は言っていたのだが…。

そう考えたのと、感知領域内に不穏な敵意を纏う気配が生じたのは、

ほぼ同時だった。

セツテさんと自己紹介しあった後、雑談が弾んだ。

やっぱり話せば話すほど、セツテさんは悪い人に思えなかった。

そう口に出すと否定されたけど、いい人だと思ったからそこは譲らなかつた。

強硬に主張したら、セツテさんの気配が微妙に変わったような気がする。

気分を害しちゃったかな？と慌てたけど、普通にお話を続けてくれたから大丈夫だったらしい。

変わったセツテさんはなんだか懐かしい感じがするんだよね。日本にいたときのような平和な感じ。

そんな感じでのんびりと雑談していたら、急にセツテさんが腰掛けにいた窓際から立ち上がって扉を塞ぐように移動した。どうしたんだらう？と思ったら、シーツを被せられた。

「伏せている」

え、なに？

セツテさんに何が起きたのか聞こうと口を開いたのと、扉が開かれた音がしたのはほぼ同時だった。

「セツテ！これはどういうことだ！」

聞こえたのは男の怒鳴り声。
シートで遮られた視界では何が起きているか分からなかったけれど、その声には聞き覚えがあった。

俺を馬車から引きずり出して地面に叩き抑えた、あの憎き男の声。

あの時感じた怒りが再燃してあんにやろと思ってしまう。

顔擦り剥いたのめツちゃ痛かったんだぞ。雑菌入ってたら死ぬかもしれないんだぞ。

私の場合本気で洒落になんないんだからなー！

「どういうこと、とは何の事だ？…それにしてもお前一人か。他の奴らはどうした？」

雑談していた時より低く抑えられた声が冷ややかに訪ねた。

…あれ、セツテさん怒ってる？

「気を取り戻した騎士どもに引きずられていった！目が覚める前に逃げ出せたのは俺だけだ！」

「仲間は放置か。薄情な奴だな」

「るせえ！無駄に固く縛られていたうえに、変な薬飲まされて動けない奴ばっかだったんだよ！」

…ピエール老のせいだ。そういえば新開発の自白剤試せるってはいやいでたよね。

「それよりも狙いのガキはどこだ！ちゃんと確保してんだろっな！」

「…」に在る」

「へへ、そうか。仲間が随分減ったからなあ。報酬の取り分も増えたぜ」

「…そのことだが」

上機嫌に笑う男に、セツテさんが水を注すように声をかけた。

「俺はこの子を解放しようと思う」

え？

「ふつぎけんな！こいつを引き渡さないと報酬は受け取れねえんだぞ！？全部おじゃんじゃねえか！！」

「知らん。俺は返すと決めた。それだけだ」

ちよ、仲間割れ！？

それにしても何でセツテさん！？

私渡さないとお金貰えなくて生きていけないんじゃないの！？

「畜生！ひでえ目に遭ったのも仲間がしょっぴかれたのも全部お前のせいだ！俺は最初からお前みたいな気味悪い奴仲間に加えんのは反対だったんだ！」

「運が悪かったと思って諦める。今回はこのまま逃げればいい」

「てめえ、さつきから言わせておけばぬけぬけと…ぶっ殺してや

る！お前もガキもぶち殺してやる！」

その叫びと共に重い金属音が響く。

思わぬ修羅場に体が硬直する。

ひいひい！助けてお父様、お母様ー！

ぎゅっと目を閉じて縮こまったその時、何か生々しい音を聞いた。

ああ、油断した。

能力差から言って俺の勝ちはずなはず無かったというのに。

一瞬の迷いが俺を負傷させた。

俺には誰かを守って戦うという経験が無い。

アベルを本当に守れるのかという迷いが、俺の体をその場に縫い留めた。

結果、アベルを庇うように立ちふさがっていた俺が刺された。

失敗したと考える頭とは違い、体は反射的に敵となった男を部屋から蹴り出した。

凶器が体から引き抜かれて血が流れるのが分かったけれど、そんなことはどうでも良かった。

むしろ部屋の外に戦場が移ったことで、アベルを巻き込まずに済むと安堵した。

男を追って部屋を飛び出す。

男は立ち上がるうとしていたが、その前に得物の剣を奪い取ってそ

れで床に縫い付ける。
恐怖に引き攣った声が吐き出された。

「や、止めてくれ！俺達、仲間だろ！見逃して」
最後までは言わせなかった。

剣を振りかぶって男の顔面に叩き込む。
何度も、何度も、何度も。

体中を切り刻み、押し潰すように振り下ろす。
直死の魔眼などは使わない、ただそれだけの作業。

ふと気がついたら剣は折れていて、男はなんとも形容しがたい物体に成り果てていた。

初めて殺人を犯す者は、その頼りの無い感覚に相手が死んでも殺し続けてしまっただけ。

昔サスペンスドラマで見た蘊蓄が思い出される。

確かに柔らかいものが詰まった袋を刺している様な、奇妙で頼りない感覚だった。

案外、どうとといった事はなかった。どうして今まで殺人を忌避してきたのだろうか。

罪悪感はある。血を見たことで齎される、同族殺しへの本能的な吐き気もある。

ただどそれを上回る、アベルを守れてよかったという安心感が俺を支えた。

…むしろ罪悪感など覚える必要があるのだろうか。こいつはアベルを傷つけようとしたんだぞ？

この世界で初めて俺を受け入れてくれた、現在唯一の理解者である

アベルを。

あの優しく無垢な子供を。

俺は感じた罪悪感をどこかに捨てることにした。

同時に思い返されるのはアベルのことである。

怖い思いをしていないだろうか。

俺は重い体を引きずって部屋に戻った。

がんと何か叩きつける音が何度も響いて、そのうち止んだ。

その間私はシーツに包まって震える事しかできなかった。

男とセツテさんが部屋から出て行ったのは分かったけれど、硬直した体が言う事を聞かなかった。

音が止んでしばらくすると、今度はなにかを引きずる音が聞こえた。

この部屋に向かって来てるらしい。

思わず呼吸が止まる。

セツテさんならいい。でもあの男だったら。

ころ、される？

喉の奥で空気がひゅうと音を立てて、目の前が暗く霞始めた瞬間。

「無事か、アベル」

セツテさんの声だった。

シーツを剥いでセツテさんに駆け寄りたかった。

ただど体に絡みついたそれは容易には私を放してくれなくて、悪戦苦闘するはめになった。

無事だった。

大きな安堵が私を包み込む。

だからシートからどうにか顔を出して視線をセツテさんに向けた時、私は絶句した。

幽かな蠟燭の光に照らされたセツテさんの体は、血塗れだった。

私の視線に気づいたのか、セツテさんは笑いを滲ませた声でいった。

「これか？ほとんど返り血だよ。驚かせたかな？」

そして一転、悲しそうな声になる。

「すまない、血生臭いだろう。でも着替えが無いから少し我慢してくれ。…あとは君を安全な場所へ送って保護してもらっただけだから、

…怖いだろうね。本当にすまない」

そんなことない、と叫びたかった。

だって貴方は私を守るために血に塗れてくれたのでしょ？
血は怖いけれど、貴方は怖くない。

だけど声は喉の奥に詰まって出てこなくて。

だから私はシートが絡みついた体のまま、セツテさんに駆け寄る事にした。

足にしがみつくと、セツテさんは血で汚れると引き剥がそうとした。けど私は必死でセツテさんに縋りついた。

良かった。良かった。良かった。

「・・・無事で、良かった」

やっと言葉を発すると、セツテさんの引き剥がそうとする手が止まった。

「ありがとう、守ってくれて。血、怖くないよ。本当に、本当にセツテさんが無事で良かった」

伝えなきゃ。沢山のありがとうと、怖くないよって気持ち。

「ありがとう」

もう一度お礼を言うと、セツテさんの手が私の頭を撫でた。セツテさんの顔を仰ぎ見ると、包帯に覆われた目の下の唇が弧を描いて。

「どういたしまして」

そうセツテさんは微笑んで・・・崩れ落ちた。

「...え？」

倒れこんだセツテさんに、思わず手を離してしまっ。

なに、なにがおきたの？

セツテさんの傍にへたり込むと、セツテさんの手がお腹を抑えているのが目に入った。

そこから溢れ出すのは、血。

セツテさん。怪我、してたんだ。

反射的にシーツで傷口を抑える。

昔の医療ドラマの応急処置でこうしていたはず。

ほかには、なにをしていたんだっけ。

頭が混乱して上手く働かない。

その時だった。

「守れて、よかった」

か細い声が、私の耳に響いた。

それとほとんど同時にセツテさんの体から力が抜ける。

意識が無くなってしまったのだ。

このままじゃ、セツテさんが死んじゃう。

初めて目の当たりにする死というものに、私はただ呆然とした。

気を取り戻した時、周囲はいつのまにか真っ暗だった。

どれほどの時間が経っていたのだろうか、蠟燭の炎が消えてしまったのだ。

セツテさんの体は僅かな温もりを残して、あとは冷たくなっていた。

微かな呼吸音が聞こえる。

- - まだ、死んでいない。

暗闇の中、私は消えていく温もりに縋りついた。

死なないでと願う事しか出来なかった。
無力だった。

- セツテさんが危ないのに。
なんでこんなに情けないんだ、俺^{わたし}。

何も出来ない。

その間にセツテさんが死んでいく。

「…助けて」

零れた助けは無意識だった。

誰にも聞こえないと分かっているながら。

私は、ただ助けを求める事しか出来なかった。

「誰か、私たちを助けて…っ！」

- 瞬間、暗闇が真白の光で満たされた。

いつそ暴力的といえる光に、私は目を庇って固まった。
なに。何が起きてるの？

周囲の状況が把握できず混乱した頭を更に混乱させる。

今日一日でいろんなこと起こりすぎだよ。私もう限界だよ。諦めて
もいいかな。

そう心が弱音を吐いた時、目蓋の向こうの光が引いていくのが分かった。

恐る恐る目を開いて周囲を見渡す。

死にそうなセツテさんが傍にいるのは変わらない。

ただし部屋の中央。

- - そこには直前までいなかったはずの、男女が3人存在した。

その4（後書き）

- 1．主人公、誘拐犯との対話。
- 2．対人恐怖症の転生者、お人良し転生者と出会って変な化学反応が起きる。
- 3．初めてのピンチに主人公助けを求める。

守護者登場までいけませんでした。手羽先です。

今回の投稿も私事のせいで予定から遅れまくった残念作品です。本当に申し訳ない。

今回は手羽先でもすこし強引かな？と思う展開がいくつもあります。まあそこは主人公の加護によるチートと、対人恐怖症の彼が始めて理解者を得たことによるデレで説明がつくといいな。

次回は守護者登場 - - の前にお城の様子のお話になります。短いので今週の日曜日に投稿できるはずなので、がんばります。

その時王宮が動いた。(前書き)

今回のお話は激しい捏造、オリキャラが含まれます。

また作中に女性軽視また性的な事を連想させる表現がありますが、侮辱の意図を持って書いた訳ではありません。

注意書きを読んで不快になりそうな方は回避お願いします。

その時王宮が動いた。

アベル・サンタムール・ド・ノートルダムの誘拐。

その知らせはガリア王国で最も高貴な血の持ち主たちを大いに動揺させた。

「いますぐ軍を動かし、特別隊を結成して派遣すべきです！」

「しかしシャルル殿下。それは陛下が危うい今、国家が不安定になつていると内外に示しかねません」

「ユベール、アベルを見捨てるというのかい!？」

中でも一際動揺が目立つのがシャルルだ。

大切なものを非常に過保護に守る性質だから、冷静では居られないのだろう。

逆に冷酷とっていいほど落ち着いているのがユベールである。

国と王と民を守る將軍は、逆境ほど落ち着かねばやっていられない。――たとえその内心は別であれども。

「殿下。アベルの居場所さえ分からないのです。闇雲に動き回っても徒勞でしかありません」

「だが！」

「落ち着け、シャルル。此処はユベールの言う通りだ」

「…兄さん」

激情に駆られたまま動こうとしたシャルルをジョセフが抑えて冷静にさせる。

良き役割分担だ。

感情のまま動きやすいシャルルとは違い、ジョセフは打算で動くだろう。

冷酷すぎても、情がありすぎても良き王とはいえない。

二人で一つ。この兄弟はお互いを補いながら歩んでいくだろう。

そしてこの兄弟を再び結びつけた子供 - - アベル。

報告では、アベルを護衛していた者たちが傭兵や訓練を受けた者たちの襲撃を退け、拘束し出発しようとしたところを再び何者かに襲撃され、アベルのみを誘拐されたという。

二度の襲撃。

意識を取り戻した護衛たちは、拘束されたままだった襲撃犯たちを最寄の衛兵駐屯地まで引き連れていき、異常を知らせるために早馬を持った騎士のみが王宮に来たのだという。

残りの護衛たちは後から王都へ追いつき沙汰を待つという。

襲撃したもののたちの狙いは子供 - - アベルで、その襲撃は依頼されて行われたもの。

仲介人から引き受けたため、依頼したものは分からないという。

ただ、襲撃後の馬車に手紙が一つ残されていた。

犯人からの手紙。

身柄の解放の引き換えに要求されたのは、ジョセフの廃嫡とシャルルの王位継承だった。

第一位王位継承者がジョセフであり、第二位となるはずだったシャルルが王位を放棄した現在、彼の子供はこの国に無くてはならないものである。

本来ならばジョセフの娘であるイザベラが、臣籍に下ったフィーネの息子よりも上位の継承権を持つはずだったが、それは彼女が成したいと願った水メイジによる新しい医療制度の構築の際の取引で自発的に失われている。

実質的に次期国王となるのはアベルなのだ。

残る第3位はまだ幼いシャルロットであるが、犯人たちの要求はあくまでもシャルルの即位と魔法の使えないジョセフの追放だった。

明らかな魔法至上主義者の暴走に、余達は頭を悩ませることとなった。

既にシャルルが王位継承権の放棄を宣言しているというのにこのような暴挙をなされるとは思わなかった。

シャルルを宰相位に据えることである程度不満は緩和できたと思っていたが、それほどまでに魔法の使えない王を戴くのが嫌だったとは。

王室範典も貴族法も慣習法も無視した暴挙に、そこまで追い詰められていたのかと哀れみさえ覚える。

一度宣言したものを撤回するには、すんなりと受け入れられるためのあらかじめの根回しが必要になる。

絶対権力をもつ国王といえど、貴族の多いガリアでその総意に反す

る事をすれば無事では済まない。

ましてやくたばかりかけの王の命など、耄碌したかと優雅に聞かなかつたことにされるのが普通だ。

国王派である私の古くからの頼りになる味方たちも、ジョセフを王にするために費やした労力を思えば、死の間際に呆けたかと笑って流しそうだ。

アベルの誘拐を公表することはもちろんできない。

そんなことすれば、どこかに目と耳を持っている犯人に知られてその身は危険に晒されるだろう。

犯人の要求に従いたくても、様々な柵しがらみが従う事を許さない。まさに八方塞りの状況だった。

まったく、余は静かに逝くことさえ許されぬらしい。

内心で苦笑すると共に、全身に奔る苦痛に感謝する。

心地よいものではないが、これのおかげで意識がはつきりしているのはたしかだ。

もう少しくらい働けるだろう。

そしてアベル誘拐の報を耳にしたと同時に部屋の外に飛び出した妹を思う。

自らの息子を救うために動き出したのだろう。

たとえそれが過去に厭いながらもそうせねば生きてゆけなかった手段で、ユベールの元に嫁ぐ事で逃げ出せた運命であっても。

彼女はその強さゆえにもう一度手を汚す事を躊躇わない。

本当に悲しい子だと溜息をつく。

イザベラがそれを聞きつけて近寄ってきて介抱しようとする。

この孫娘の瞳も不安と怒りで揺れていた。

この子やシャルロットのアベル語りを聞く限り、二人の孫娘は自らの従兄弟叔父に好意を超えた恋心を抱いているらしい。

別に従兄弟叔父に恋愛感情を持つていても王族なのだから近親間の結婚に問題ないから構わないし、むしろ王位継承権を放棄してしまつたイザベラにいたっては、自らの地盤固めのためにも王位継承者と婚姻関係を結ぶほうが良策である。

ましてや現在、帝政ゲルマニアとも違うブルミルの教義に逆らつた独自路線を行こうとするガリアにとって、いまさら他国に嫁がせて友好関係を結ぶ必要は無いのだ。

国内での婚姻で済ませるなら、好いた相手に嫁ぎたいだろう。まあ片一方だけでは不公平だと喧嘩してしまいそうだから、どちらかを側室にして公平を期してやらねばなるまい。

本当に二人の花嫁姿が見れないのは残念である。きつと綺麗だつただろう。

そう想い馳せていると、フィーネが数人の女を引き連れて帰つてきた。

入室の許可を取られたので許すと、入ってきた女たちはいつせいに礼をとつた。

「フィーネ叔母様、その者たちは……」

シャルルが戸惑つたように問う。

それもそうだろう。

アベルの誘拐と余の死に揺れる寝室に部外者を連れて入るなど、異常以外の何物でもない。

上位王位継承権持ち王族誘拐のことが広まれば王宮に集まっている貴族たちを悪戯に刺激し、良くない事も起こりかねない。

「安心して。信用できるものたちだから、アベルの誘拐についても話しても大丈夫よ」

だがフィーネはその懸念をきっぱりと否定した。

「この者たちは私が王女だった時から私に仕えてくれた子飼。私が嫁いでも言い渡した任務を遂行してしてくれたから、何か分かるかもしれない。でもその前に、貴方たちに受け入れてもらわなくてはいけない真実があるの」

「任務と真実…？」

「情報収集よ」

その言葉に確信する。

この子はまたその手を穢し、それどころかその穢れを知らぬものたちに公表するつもりなのだ。

それしか方法が無いとはいえ、悲しい。

ユベールも心配そうに彼女の傍に近寄った。

フィーネはユベールに大丈夫よと微笑んで、告白を始めた。

「ガリアには代々王族の女だけに受け継がれる役目がある。それは同じ女である貴族女性や侍女、果ては平民や春売りの女さえも纏めて、あらゆる情報を収集して国家の大事に備えるというものなの。女のみで構成されるその組織は、黄金白百合騎士団と呼ばれているわ」

「黄金白百合…？百年に一度、一晩だけ満ちた双月の下に咲くと言われる伝説の？」

「ええ」

「まさか…」

その言葉にジヨセフは思い当たることがあつたらしい。

「どこかで聞いたことがある。女であることを武器に暗躍する隠密集団だ…。作り話ではなかったのか」

「情報操作は騎士団の得意技なの。存在をほんの少し仄めかせて眉唾物だと思わせているのよ」

「ですが…その、伝え聞いた活動内容は…あまりにも」

「分かってるわ。穢らわしいと言いたいのでしょう？」

ジヨセフの戸惑いの声にも、フィーネの微笑みは崩れなかった。

「それでも事実なのよ。ガリア王家の安泰のために多数の女がその身を犠牲に献身を続けてきた。このことは次期国王である貴方にも、潔癖であるシャルルにも知っていてもらわなくちゃいけない。次代を担う貴方たちに受け入れてもらわないと、彼女たちが報われない。」

否を許さない声だった。

「王族に生まれた女はその身分の高さゆえに自らの身を穢す事は無かったわ。だけど変わりに部下たちにその身を穢せと命じるの。男の物理的な力や魔法とは違って、女の最大の武器はその身と情につ

け込む魅力。どんなに高貴な女も、騎士団に組み込まれば春売り紛いのことをすることになった。夫や恋人からも、自らを買った男からも、他国に嫁いでさえも、情報を集めるためにはあらゆる手段を用いた」

自らの意思をねじ伏せて、命令する方もされる方も自らを犠牲にし続けた歴史の闇。

「全てはガリアのためなのよ」

静かな声は、どうか受け入れてと懇願するように聞こえた。

最初に動いたのは、イザベラだった。

「…フィーネ大叔母様。今まで本当にありがとうございます」

そういつて、深々とお辞儀する。

「話を聞いていて分かったんです。…その黄金白百合騎士団を総率する役目は、本来なら既に私のものでしたのでしょうか？」

「イザベラ…」

ジヨセフが驚いたように娘を見る。

「私も王族の女です。すでに王族としての公務も担っている。大叔父様に嫁いで臣籍に下った大叔母様がそのまま騎士団を率いている理由は無いんです。それなのに引き継がれなかったのは、幼い私に

負担をかけまいと、酷な役目を背負わすまいとしてくれたから」

そしてイザベラはフィーネの後ろの女たちに視線を向ける。

「いままでありがとう。これからも苦勞をかけるわ。…私に力を貸してくれる？」

そう声をかけられた女たちの中で、代表をしているのかドレスを着た女が答えを返す。

「はい、イザベラ様。王族女性に従い、国家の安寧のために働く事こそ我ら黄金白百合の役目。謹んでお受けいたします」

その答えにガリアの闇が新たな世代に引き継がれた事を知った。もちろんすぐにフィーネのように率いる事はできないだろうが、相応の訓練と知識の習得が必要だが、それもフィーネや騎士団員が教えるだろう。

あつというまに適應して自らの役目を受け入れたイザベラに対し、その父親と叔父は呆然としていた。さすがのジョセフも、愛娘が自ら穢れ仕事を引き受けたのには言葉も無いが。

それに二人の初恋はたしかフィーネだったはずだ。

シヨックを受けても仕方ないだろう。

綺麗な初恋の偶像が砕かれたのだから。

やはりいざというときは女のほうが強いな。

まあ、長い時間をかけてでも割り切るだろうし、むしろ周囲の者が割り切らせるだろうな。

フィーネとユベールは当事者であるイザベラに受け入れられたこと

に安堵しているのだろう。
そつと微笑みあっていた。

そんな時、新たな訪問者が寝室を訪れた。

訪問を予期していたらしいフィーネが、余から許可を取って招き入れる。

入ってきたのは社交の場で見覚えのあったアーランベルト男爵夫人だった。

彼女も騎士団員だったのかと驚いた。
礼をとった彼女に、発言を許可する。

「報告いたします。アベル様誘拐の犯人はボランミン子爵とその手の者だと判明しました。子爵自身は王宮内にいましたので拘束してあります」

ボランミン子爵。

魔法至上主義者のうえ親ロマリア派の貴族だ。

監視対象として王宮に呼び寄せられている。

独自に動いた黄金百合騎士団の手腕に引っかけたのだろう。

今頃残酷な目に遭っているだろうが、そこに至るまでいい思いをしているのだから痛みわけだ。

騎士団の女は甘く恐ろしいからな。

「傭兵を雇ってノートルダム公爵家およびオルレアン公爵家を見張らせ、領内から出てきた上位王位継承者を誘拐、人質にしてジョセフ殿下の即位を阻む計画だったそうです」

「な、シャルロットもかい!?!」

「はい、シャルル殿下。ですが団員の報告によりシャルロット様と奥方は無事である事が確認されています。既に周囲を張っていた傭兵も不審な者として捕らえられました」

「そ、そうか。無事でよかったです」

報告にシャルルがほっと息をつく。
イザベラも小声でよかったですと零している。

「しかし…上位王族とはいえ、なぜ社交の場に出たことの無いアベルを狙ったのだ？」

ジョセフが思わずと言った態度でつぶやく。

アベルは王族でありながら虚弱ゆえに生まれて一度も屋敷から出ていない事で逆に有名ではある。

たしかにジョセフ即位後の次期王位継承者として注目を集めているが、まだ幼いうえ顔を出さない事や屋敷から流出する情報が少ないためそれも下火になりつつある。

あの屋敷の使用人の情報管理は、虚弱な子息を守るためとはいえ凄まじいものがあると感心したものだ。

それに素早く男爵夫人が答えた。

「子爵の領地はちょうどリュティスとノートルダム領の中間に位置しています。そしてリュティスとノートルダム領方面への街道の管理は子爵に任されていました。…子爵を尋問したところ、王子殿下方が何度かノートルダム領を訪れていることを街道管理の一環で知り、親しいのだろうとあたりをつけて今回の計画に組み込んだそうです。」

お前らのせいか。

思わず息子たちを見ると、彼らも頭を抱えていた。自分たちの行いでアベルを危険に晒しているのだ。後悔してもし切れまい。

「計画はどのようなものだったのです？」

対策を立てなければ、アベルの救出はままならない。そうユベールが訪ねると、男爵夫人は声に形容しがたい何かを滲ませて告げた。

「それが…誘拐後、脅迫して条件が飲まれたら適当な場所に解放するつもりだったと伸べておりました」

「は？」

「そもそも今回の計画は子爵の単独犯だったようです…」

詳しく聞くと、男爵夫人の声に滲んだものの正体が明らかになった。呆れだ。

シャルルの王位継承権放棄宣言により、御輿として担ぐ対象が無くなった魔法至上主義者たちは大きく二分されることになった。静観派と過激派である。

基本的に静観派の貴族たちが偉大なる魔法により国を守りたてているというかろうじてガリア中心の思想を保っているのに対し、過激派は魔法と貴族の権威を絶対視しロマリアにつながり、ブルミルの教えを守らぬ改革を進めるジヨセフを異端視してその即位を妨害

しようとするものだ。

ボランミン子爵は過激派に属し、その中でも更に過激で知られていたようである。

ただし狂信者のなかでも周囲が見えなくなるほどの狂信者である子爵は嫌われ者だったようで、協力も得られず独力で行動したのだという。

屋敷の主たちが王宮に集められる国王崩御が最大のチャンスと考えた計画の開始は、なんと崩御の恐れがあるため王宮に馳せ参じよという知らせが着いたその日――1日前のことである。

急いで酒場で雇った傭兵たちに自らの正体を知られるという愚は冒さなかったが、公爵子息の誘拐というあまりにもあまりな依頼にほとんどもが依頼を断ったため、子爵家の私兵と混合して利用したのだそうだ。

しかも虚弱で知られるアベルが屋敷内から出てくるのかも分からないのに、傭兵たちを配置してたという。

本人の意思で出てきたからいいものを、出てこなかったらどうしたんだ。

そうジョセフが聞くと、屋敷を襲撃させるつもりだったそうですというので啞然とした。

留守を預かる騎士団長に叩き返されますよとユベールも呆れていた。

まあそんな杜撰な計画でも、様々な要因が有利に働いて誘拐に成功した。

運がいい奴である。

そして誘拐後どうするつもりだったのかといえば、これもまた杜撰

だった。

自らは馳せ参じよと命じられて王宮にいるためにアリバイが出来る。子供はその間一時留めておいた街道近くの廃屋から、別に雇った傭兵の手で引き取らせリユティス近くの別荘に移して監禁。その間にジヨセフ廃嫡・シャルル即位。王宮から帰って後子供に何も覚えていないと言うように脅して解放。

ジヨセフがこれは酷いといってしまっただけだった。

時間が無かったとはいえ穴だらけだし、そもそも応じると思っていたのか。

というかなぜこんな杜撰な計画で誘拐できてしまったのか。

「そのことですが…」

「なんです?」

「子爵の雇った手のものの中に、少し気になる者がおりました。今回の計画が成功したのはその男の功績でしょう」

「気になるものだと?」

「現在はセツテと名乗っているようですが、それ以前はズイーベンやセブンと名乗っていました。オークなどの魔物狩りを専門としている傭兵です。東方の人間なのか黒髪と黄色い肌。そして常に両目を包帯で覆っています。かなりの腕の持ち主あることが確認されています。騎士団の情報網に数年前から引っかかっていた存在です」

「まさか二度目の襲撃はその男によるものだと?」

「その可能性が高いかと」

一人で護衛を抜いてアベルを誘拐するとは。たしかに大した腕の持ち主らしい。

再び扉が開かれ、今度は侍女が入ってくる。

「追加の報告をいたします。ボランミン子爵の尋問の結果、アベル様が監禁されている廃屋の場所が判明しました」

告げられた場所は街道を外れた森の中。

「現在気づかれないよう遠方からの見張りをつけて動きを監視しています。窓際に黒髪の男を視認できたそうです」

「そう、ご苦労様。皆下がって」

「はい」

室内にいた女たちが退出していく。

「情報は揃いました。御判断はお任せいたします」

フィーネはそういつて余たちの判断を仰いだ。

フィーネが思い返したくもないだろう過去を振り返ったのだ。今度は余たちが行動せねば示しが見つからないだろう。

アベルの居場所が分かったからには、先ほどの状況とは違う。主勅を下せば、多少の無茶は罷り通る。

もうすぐくたばる老人の最後の我侷だ。

「ユベール、」

軍を率いてアベルの救出を――

そう王命を言い渡そうとした瞬間。

盛大な音を立てて、扉が開かれた。

その時王宮が動いた。(後書き)

今回は短かったです。手羽先です。

次は守護者登場！

皆様からいただいた守護者案がやっと形にできるので、手羽先も楽しいです。

ですがその前に一つお知らせです。

今まで投稿してきたお話を改定していくことにしました。

私生活でのごたごたが一段落したので、投稿した文章を改めて読み直してみました。

そしたらなんだかしっくりこなかったんです。

多分投稿ペースを守ろうとして焦って強引に終わらせたり、入院による中断期間を挟んだせいだと思います。

手羽先は書きたいテーマというものをいくつか定めてから執筆を開始しました。

でも今投稿してあるお話じゃ、そのテーマを書ききれていないなあと思っただんです。

主人公のキャラクターも一貫してないし、文章もこれは酷いと言いたくなる出来。

出したかった設定や複線も死んでいて、このままお話が続いたら書きたいお話も書けなくなってしまうことにも気づきました。

もともと文章練習に始めた投稿ですが、どうせ書くならとことん拘ろうかな、と。

このまま書き続けたら、せっかく募集に寄せられた素敵なキャラクター様たちの魅力を殺してしまうでしょうし、それは絶対に許されない事なので。

主人公最弱チキンものであることは変わりませんが、登場するオリジナルキャラクターが増える予定なので、いままで投稿していたものとは少し違ったものになると思います。

手羽先の勝手でお気に入り登録や評価、感想をくださった方々には大きな迷惑と不快感を与えてしまうかと思えます。

見放すことにしてお気に入りから外してもらってもかまいません。

この投稿を最後に、全編書き直し作業を行いたいと思います。

ワードやメモ帳に書き溜めたものを差し替えていくことになりましたね。

いままで投稿したものは全て差し替えるまでは残しておきます。

本当に申し訳ありませんでした。

世界に戀された少年の始まり（前書き）

初投稿・初小説です。

誤字脱字の指摘大歓迎です。

これからよろしく願います。

この作品は昔投稿した作品を改定したものです。
全シリーズ改定後、以前の作品は削除します。

世界に戀された少年の始まり

これからも変わらない毎日が続いていくと思っていたんだ。

朝は目覚まし時計のアラームに叩き起こされ、身支度をして、両親と一緒に朝食を食べる。

登校して、講義を受けて、友達と他愛もない話をして、そして家に帰る。

家には専業主婦の母さんが待っていて、お帰りなさいと玄関で俺を迎えてくれる。

自分に与えられた部屋に荷物を置いてから、リビングに戻って間食を食べる。

腹ごしらえが終わったら、自室に戻ってしまいち理解できなかった講義の復習。

父さんが仕事から帰ってくる時間に合わせて夕食が出来上がるように、母さんがキッチンで動きまわっている音を聞きながら問題を解いていく。

そして日が暮れると父さんが帰ってきて、俺も勉強を切り上げて食卓に着く。

- このおかず、美味しいな。
- 今日も仕事が大変だったよ。
- お勉強頑張ってるわね、さすが大学生。大人になったのね。

食事が終わったら、父さんはテレビの野球の応援に夢中になり、母さんは食器を洗いにキッチンへ。

俺は風呂に入って、のんびりと読書をしてから、明日の講義の準備を終わらせ、父さんと母さんにお休みを言って寝る。

大学生活も3年目に突入してしばらく。
同期生は皆、志望の進路を掴み取るためにコツコツと努力する
毎日を送っている。
同ゼミの不真面目な生徒でさえ（今更真剣になっても手遅れなのに）
進路について考え始める時期なのだ。
そこそこ優秀な生徒という微妙な評価をされている俺も教員採用試
験に向けて勉強している。

試験に合格して、卒業して、就職して・・・もしかしたら、恋愛とい
うものをして結婚するかもしれない。
そもそも試験に合格するかさえ分からないけれど、漠然とした未来
予想図を実現させるために、俺は確かに努力していた。

強くなくても、立派じゃなくても、優しい両親のような大人になり
たかったから。

そしてまた、喧しいアラームの音を合図に、いつもと変わらない日
常が始まる・・・はずだったのに。

「本当に申し訳ありません。我々の不手際で、貴方という存在をこ
の世界から消失させてしまいました」

何処までも続いていく白の空間に、いつの間にか俺と彼女は存在し
ていた。

長い真っ白な髪と黄金の眼、俺の目が潰れるかと思ったほど美しい
容姿をした彼女は、自らを神と名乗った。

宗教でよくある全知全能の唯一神ではなく、世界を管理するものと

いう意味での神らしい。

世界は無数に存在していて、複数の神が一つの世界を円滑に運営する為に働いているんだそうだ。

なんかよく理解できないが大変そうなので、お疲れ様ですと言っておいた。

すると彼女はふわりと微笑んで、ありがとございますと返してくれた。

とっても可愛かった。

- - 閑話休題

さて、可愛い神様曰く、神とはとても一概にはいえず、様々な個性をもっているんだそうだ。

多種多様な神々を大雑把に分けると2種類になるらしい。

世界を善き方向に廻す神 - - 善神。よきかみ

世界を悪しき方向に乱す神 - - 邪神。あしきかみ

読んで字の如くである。

付け加えると彼女は善神としてかなりの年季を重ねているという。

つまりはベテランなのだ。

そんな彼女は、とある邪神が人間の輪廻の輪を乱し、世界の境界を乱している事件を解決するよう上司に命じられた。

ベテランな彼女は、問題の邪神を早々に捕まえ神々の牢獄にブチ込んで終わつたので、事件の後始末をするために世界を精査した。

そして、世界が歪んでいることに気がついた。

そのまま放置していたら世界が壊れてしまう程大きな歪みに、彼女は上司に連絡を入れ、応援に駆け付けた善き神々が総動員で世界の

修正を試みた。

結果は成功。

世界は壊れず、その中で営みを続ける命たちもそのまま続いている。
ただ一人、俺だけを除いて。

「この事件は、邪神が自らの暇つぶしのために人間を殺し、その魂を異界に転生させたことが原因です。死すべきでは無い者の死で輪廻の輪が狂い、繋がらないはずの異界同士が繋がられ、その縁を辿り融合しかけた。我々は歪みの修正を行うことで、2つの世界を引き剥がしました。かの異界はこれからこの世界を徐々に離れて行きます。世界は壊れません。しかし - - 縁が断たれる直前に、貴方の魂に異界が惹かれてしまったのです。一目惚れと考えるもらうと分かりやすいかもしれません。異界は貴方を手に入れるため、この世界から攫ったのです。貴方が欠けて空いてしまった穴は、世界の自動修正現象で塞がれてしまいました。貴方という人間は最初から存在しなかったということになっています。∴貴方は死んでしまったんです」

彼女の綺麗な声が、俺の死を告げた。

普通なら混乱して取り乱してしまうか、性質の悪い冗談だと一蹴するはずだが、今の俺はなぜか納得していた。

そうか死んだのか。それだけである。

人間死んでしまうと案外驚いたりしないらしい。

ただ俺の死亡原因を作りだした邪神とやらを一発殴ってやりたいくらいには怒っていたし、両親にも友人たちにも二度と会えないのか

と思うと悲しかった。

まだ見ぬ可愛い生徒たちと青春ドラマのような教員生活を送る夢も絶たれてしまつて非常に残念だ。

まあ一方的とはいえ初めての恋愛沙汰のお相手が、見知らぬ強引な性格の異界であるということには悲喜交々だった。

とりあえず俺はこれからどうなるのかが気になり、その問いに彼女は誠実に答えてくれた。

すでに失われた肉体の代わりに、転生という形で新しい肉体を手に入れて異界に渡る事になるんだそうだ。

現在の俺は異界に引きずられている真つ最中らしい。

それを彼女の仲間である神々が、一時的に庇護下においてこの話し合いの時間を稼いでくれているという。(そうしないと留める力と引く力で俺という存在はあつという間に碎け散つてしまうそうだ)当初彼らは加護を与えて俺の存在を強化した後、引く力に対抗して強引に引き剥がすという計画をたてていた。

しかし驚くべきことに、俺を留めた瞬間世界から異界が離れて行く速度が明確に遅くなつてしまつたらしい。

引き剥がすのは無理。強引に俺を世界の中に戻すと、それを追つて再び異界が融合しかねない。

そう判断した彼らは、俺を異界に引き渡すことを決定した。

そこまで聞いた俺の気分はドナドナの子牛のようだったのは言うまでもない。

だけどさすがは善神々と呼ばれるだけはある。

今まで見守つてきた無数のもの一つとはいえ、俺という存在が強引に異界に連れ去られることを彼らは深く悲しみ、見送ることしかできない自分たちの無力さに落胆した。

そしてせめて連れて行かれる異界では幸せになってもらおうと、俺にいくつかの加護を授けることにしたのだという。

彼女が言うには与えられる加護は俺が自由に選んでいいらしい。

これには今まで、へえそうなんだ神様ってやっぱり優しいなあ、でも俺を殺したのも神様だから差し引き0って所かな、などというくだらない事を考えていた俺も真剣にならざるをえなかった。

なんせ第二の人生を決める大切な指針である。

しかも彼女曰く俺の行き先である異界はファンタジーな世界で危険がいっぱいらしい。

自慢ではないが俺はチキンだ。自ら危険に飛び込んでいく奴らなんて気が狂っているとしたか思えない。

なんだか嫁入りの饞別みたいだなんて考えないようにしつつ、俺は幸せで安全で楽な生活を送るために、授けてもらう加護を考え始めた。

彼女とも色々と相談しながら、最終的にもらう加護を7つまでに絞り込んだ。

まずは神懸かっていると言えるほど美しい容姿。これは彼女の美しい容姿を見て、美しさとは武器になると認識したからである。

そしてそれから派生した加護として、最も美しくなったタイミングでの不老不死化。

チキンな俺としては二度も死ぬのは御免なのである。

美しさを留めたまま永遠を生きれば、実は俺美の神なんだとか何とか偽って世の中を渡り歩くことも可能だろうという打算もある。

うん、自分でも分かっているよ気色悪いって。でも俺は楽に生きてい

きたいんだから仕方ない。

次に周囲の意思を持つものの無意識下に訴えて、庇護欲を誘う加護だ。

これは人間や獣も、精霊というファンタジーな存在でさえ関係無く作用する、結構えげつないものだ。

さっきの美貌の加護のせいで妬みを受けでもしたら本末転倒であるから、このような力を使って敵意を抱かれないように保険をかけておいて損はないだろう。

四つ目は危険に備えて守護者を召喚する力。呼ばれる守護者は彼女が用意してくれるらしい。

そんなものを貰うくらいなら自分で戦えるような力を貰えばいいじゃないか？

今まで平和で安全な日本で学生してた俺が戦えるわけないし、グロイ光景を見ようものなら卒倒する自信がある。

餅は餅屋である。

五つ目は他の生き物を俺の眷属として造り変える力。不老不死の俺と同じ不老不死になり、共に歩んでくれる存在を生み出す力だ。

当たり前のことだが人は1人じゃ生きていけない。それはこれから不老不死になる俺でも例外ではない。

この加護を望んだとき彼女は少し悩んでいた。

本来生命の法則に逆らい輪廻の循環を歪める事は、世界に負担をかけて大きな歪みが生まれる原因になってしまうそうなのだ。

だけど一人ぼっちの永遠は虚しいだけなので、条件を付けることで許可すると約束してくれた。

条件は三つ。

一つ目の条件では眷属にしたものは主である俺に全ての生死の権利

を握られる。生命に一応の終わりをつくることで世界への負担を軽減してあげるのだ。

そして二つ目の条件。主である俺に逆らったり危害を加えようとした眷属は必ず殺すこと。信頼していた眷属がいきなり危険思想に目覚めて世に放たれでもしたら大惨事である。殺そうとしても俺以外には殺せないのだから。

ただどチキンな俺には眷属にするほど親しくなったものたちがたとえ敵になっても殺せるとは思えない。

そのために三つ目の条件。全ての眷属は俺に対して悪感情を抱くことや、不利になる行動を取ることができなくなるといふものだ。

はつきり言って悪質極まりない洗脳そのもので俺も嫌だったが、すでに庇護欲を誘うという軽度の洗脳チックな加護を貰うことをきめていたので一つも二つも変わらないと割り切った。

だって永遠に生きていて、いつの間にか人類滅んで俺一人とかなったら嫌だ。

六つ目の加護はファンタジー世界には付きものの魔力や精神力と呼ばれる力の無限化。

魔法は使えれば便利だし何よりも楽しそうだからだ。

ちなみに力と付くもの全てを無限化にしようかと考えたものの、無気力や危険に突っ込んで行く行動力が上がったら嫌なのでやめた。

腕力や武力？何度も繰り返し返すがチキンな俺に戦闘は無理だ。どんなにがんばっても俺が安全地帯にすることを前提にしたうえでの仲間の援護が精一杯である。

彼女もそれには賛成してくれて、この無限の魔力で守護者や眷属になった仲間のバックアップを出来るようにしてくれた。つまり俺を経由して彼らも魔力使い放題である。

喜ばしいことだが戦闘の役に立たないと評価され微妙に落ち込んだ。

そして最後の加護、俺と眷属たちが自由に世界を渡ることが出来る

力だ。

ファンタジーな世界は本当によく終焉の危機に晒される。

小説やゲームではそれを回避するため主人公と仲間たちが頑張るのだが、その結果はお話によってまちまちである。

救われる世界もあれば滅びる世界もある。むしろ滅びてしまえと言いたくなるような酷い世界もあるのだ。

これから行く異界がそんな世界だったら最悪だ。第二の人生はそれこそ永遠に生きると決めたのだ。

住んでいた惑星が壊れて不老不死のせいで永遠に宇宙空間を彷徨うとかになったら嫌すぎる。

そう彼女に伝えるとこれから行く異界が俺を拘束しようとする力が弱まれば可能らしい。

弱まるのは10年後か100年後かはたまた10000年後かは分からないが、どうせ長くなる予定の人生である。初めて俺に好意を抱いてくれた異界とは気長に付き合っていくことにしてこの加護ももらった。

そのうえ世界を移動できたらその世界の基本知識や基本言語を自動的に俺や仲間の脳内にインプットしてくれるという超便利仕様。思わず感動してしまった。

しかも彼女の仲間たちが特別に加護を追加してくれたらしい。

最高の幸運。最高の環境。そして俺と眷属に作用する神々の加護。

全て俺がこれから幸せに生きていけるように、と。

最後にこれぼっちの加護を渡すだけで、見知らぬ異界に放り出す私たちを恨んでもらってかまわない、と彼女に謝られた。

だけど、これだけ俺の事を大切にしてくれた方々を恨むだなんてとんでもないことだ。

とりあえず恨んだりするわけない、むしろこんなに親切にしてもら

って本当に感謝していると言うと、彼女は今にも泣きだしそうな顔をしてぎこちなく微笑んだ。

「いいえ、恨まれて当然なんです。私は、貴方の人生をめちゃくちゃにしてしまったから」

そう、人生。

もう二度と戻ることができない家。会うことのできない両親。置いて逝ってしまう友人たち。

ずっと続いていくと思っていた日常は、すでに壊れてしまった。

だけど、いつかは両親みたいな優しい大人になりたいという夢は、生きてさえいれば叶えられる。

俺は今幸せだし、これからもきつと幸せであれるから。だから、誰も恨まない。

そう伝えると、彼女はとうとう泣きだしてしまった。

美人は泣いても美人だなあと思いつつ、大粒の涙に焦った俺は、彼女を泣き止ませるために奮闘することとなった。

女の子を慰めるだなんて小学生の頃同じクラスの子とぶつかって泣かせてしまったこと以来だったので、どうすればいいのかわからず、ただでさえ少ない語彙の中から、とにかく泣かないでと言った趣旨の言葉を繰り返した。

必死で考えた言葉と思いが通じたのか、やがて彼女は泣き止んで恥ずかしそうに笑ってくれた。

本当に可愛かった。

彼女も泣き止んだ所で、とうとう異界へ出発の時がきた。善神たちが俺を留めておくことに限界が近づいて来たらしい。

お世話になりました、と別れの言葉を告げると、彼女はなんだか寂しそうな微笑みと共に手を振ってくれた。

次の瞬間、何かか俺を強く引っ張って行くのを感じた。

彼女の姿がどんどん遠ざかっていって見えなくなった時、あまりの力に耐えきれず俺は意識を失った。

ホワイトアウトの直前に考えていた事は、そういえば彼女の名前を聞いていなかったなあということだった。

世界に戀された少年の始まり（後書き）

- 1、主人公が世界からログアウトしました。
- 2、主人公、神との対話。加護を貰いました。
- 3、主人公、異世界に行く。

主人公の年齢を変更。それに伴う文章の書き直しを行いました。

ゼロの使い魔編 その1 (前書き)

ゼロの使い魔編の始まりです。

オリ主要素・多数の捏造・オリジナルキャラクターの登場があるの
で、苦手な方はお気をつけください。

ゼロの使い魔編 その1

薄い白レース生地のカートンがかかった窓から射し込んでくる日光の温みが心地よくて、俺は欠伸を零した。

少し前に使用人が開けてくれた窓から吹き込む春風が柔らかい。

開けっ放しは身体に悪いが、定期的に空気の入替えをしてもらえるのはありがたい。

庭の花の香りが漂ってきて、良い気分転換になる。

冬の寒さが去り大分過ごしやすくなったおかげか、意識が明瞭な時間が延びてきている。

今日は身体の調子も随分と良いし、ベッドから起き上がれるかもしれない。

さて、俺がこの異界 - - 今や俺の生まれた世界だが - - に生まれ変わったって2年の時が流れた。

生まれた当初こそ、赤ん坊に戻ってしまった体や生まれついた体質に翻弄されたが、優しい両親や使用人に恵まれたおかげでどうにかやっていけているし、幸せだ。

俺の現在の名前は、アベル・サンタムール・ド・ノートルダム。

ハルケギニア大陸、始祖ブルミルの子が興したガリア王国の中でも有数の大貴族、ノートルダム公爵家の嫡男だ。

うん、『ゼロの使い魔』なんだ。

神様な彼女からファンタジーな世界と聞いて、指輪を巡る壮大な世界や筆筒の向こうの世界のような古典的ファンタジーをイメージし

ていたんだが、ライトノベルの世界だった。

俺も前世では各国の情勢不安や権謀術数が面白くてよく読んでたよ。作品内では国々の陰謀や戦争のせいで主人公たちの周りは平和的とは言いが難かったけど、ハルケギニアに生まれて以来俺は平穩に暮している。

何故なら今はいわゆる原作前だからだ。

ヒロインのルイズ嬢は使い魔の召喚をしていないし、平賀才人も召喚されていない。

それもこれも、まだ彼らが生まれて間もない時間軸だからなんだが。

俺が生まれたノートルダム公爵家は、原作には登場していないガリア貴族だ。

まあ、ライトノベルと現実では違いがあっても不思議ではないんだが、その特殊な立位置と自分が結構大変な立場に生まれていた事を知った時には本当に驚いた。

俺の父であるノートルダム公爵家当主、フレデリック・ユベール・ド・ノートルダムは、先々代当主、つまり祖父の時代にガリア王家の王女を唯一の妻に迎えていて、決して薄くはない王家の血を継いでいる。

そして俺の母、フィオルデイリッジ・アデライード・ド・ラ・ノートルダム。

今でこそノートルダムの姓に変わってはいるが、現国王ルイ22世の腹違いの妹であり先代国王ロベスピエール3世の娘。

降嫁して王位継承権を息子に譲ったとはいえ、れっきとした王女殿下である。

つまり俺ことアベルは、生まれつきガリア王族に名を連ねている上、公爵という位の中では最高位に位置する大貴族の後継ぎなのである。王位継承権も第三位の上位王族だしね。

正直王位継承権とか平穩で楽に暮らしたいだけの自分には無用の長物のうえトラブルの原因にしかならないので頭痛の種なんだが、そんな事言つと王族に連ねられている事を誇りの一つとしている両親に怒られるので普段は努めて忘れるようにしている。

というか、今考えているだけでも頭痛がしてきた。うおお、いてえ。

少しネガティブな事を考えただけでも不調になる身体にため息を零す。

転生したこの子ども - - アベルは、とても身体が弱かった。

真冬の生まれではあるけれど、この身体は寒いのが苦手だ。

寒さを凌ぐ毛布に包まっている間に、すうっと意識が遠のいて何度か死に掛けたせいだ。

トラウマものである。

暖炉に火が焚かれた室内とはいえ常時火を灯し続けることはできないので、換気のために窓を開けられた隙に吹き込んできた冷気が、俺にとっては命取りだった。

前世では冬山で眠つてはいけなくと良く聞いていたけれど、本当のことだなんて思いもしなかったよ。

何度両親や使用人たちが呼ぶ自分の名に意識を引き戻されたことか。

だからといって、夏が得意というわけでもない。

むしろ生まれてから体験した夏は、まだ2回とはいえ俺には過酷なものだった。

前世の日本のようなじつとりした湿気を含む纏わりつくような暑さではなかったが、それでも夏は夏。

暑さにバテて動くことさえ出来なくなつたときもあるし、窓越しに差し込んだ日差しに焼かれて日射病にもなつた。

生まれたばかりで体温調節の難しい赤子の体には本当にきつい日々

だった。

気温や湿度が極端に変化すれば、その分虚弱なこの身体は悪い方向に傾く。

そんな厄介な身体を心配してくれた両親が室内環境を過ごしやすいように保つ魔法が使えるメイジを新しく雇ってくれたり、使用人たちが色々な工夫を凝らしてくれたのおかげでどうにか2回目の誕生日を越えることができた。

だけど本当に迷惑をかけてしまったよ。申し訳なくてしかたがない。将来頑丈になつたらがんばって恩返しするから、もう少しの間よろしくね。

なんかすごい情けないけれど、まだ赤子の俺には何にもできないから仕方ないんだ。

思わぬ人生リセット以来、強制授乳やらむつき換えやらなんやらのチャイルドプレイのせいで、俺は前世よりも割り切るといふことが得意になった。

だって生きていればお腹も空くし排泄もする。

痒かったり痛かったりする所に紅葉のようなちっちゃい手は届かない。

楽なように姿勢を変えることさえままならない。めちゃくちゃ不便なんだ。

赤子の身では話すこともできないから、俺はあらゆる不快を訴えるために泣いた。

…うん、普通の赤ちゃんは本能的に気持ち悪いことを排除してもらうために泣くんだけどね、生まれつき意識がしっかりある俺は頑張つて自分でふにゃふにゃ泣くしかなかった。

二十歳過ぎた自分にはすごい恥ずかしいことだったけど、それを乗

り越えないと周囲に気づいてもらえないからね。

その試練を乗り越えた後も、相手は仕事だとはいえ乳母さんの肌に密着して栄養を補給したり（結局離乳食に移るまで慣れることはなかった）、他人に自分の排泄物を片付けてもらったり（1歳頃から体調が良く動ける時はおまるに座れるように必死で行動した。情けないことに今も寝たきりの時はむつき着用であるが）と、正直勘弁してくださいよと泣きたくなるような試練があるのだけど。生きるためだもん、しょうがないよね。

まあ、その分羞恥から逃れるために意識して発音練習やら手を動かしてみたりやらしていたら、一般の赤子よりも早く言葉らしきものを話せるようになったから結果オーライだ。

ちなみに初めて披露した言葉は両親が揃っているときに言った「おとーしゃ、おかーしゃ」である。

前世知識のワイドショーで特集が組まれていた、お子さんの話し始めがどちらか一方の名前を呼んだだけ、もしくはまったく関係ない単語だったのがっかりしたっていう親御さんの割合がけっこう多かったのを覚えてたんだよね。

最悪な場合ではかなり深刻な夫婦喧嘩が勃発した例もあったそうだから争いごとは避けたいし、どちらも喜ばせてあげたいしね。

俺の赤ん坊ながらの精一杯の恩返しはとても喜んでもらった。

傍で世話してくれていた使用人たちもびっくりして他の部屋で働いていた使用人たちを呼んで来たぐらいだ。

その日一日中屋敷内の人たちが入れ替わり立ち替わりしてたから、よっぽど珍しかったのかもしれない。だって当時まだ生後6ヶ月だったもんね。普通は1歳くらいが話し始めだったかな？

二人とも感動してくれたのかもう一度もう一度とねだってくれたか

ら、俺も嬉しくてその日はずっと同じ単語を繰り返してたよ。だって二人や使用人たちの反応が面白かったんだもん。人がわぁーって喜んでるのって、見てて楽しくなってくるよね。

次の日喉が潰れたんじゃないかと思うぐらいひどい痛みのしっぺ返しが出来たけどね。

調子に乗りすぎたよ。皆にも心配かけて我が家専属治療士のピエール老のお世話になったし。

…うん、なんか良いことがあるとすぐ調子に乗るのは駄目な所だな。意識して直していかないと。

ふわりと吹き込んだそよ風に甘い香りが溶け込んでいるのに気づいて、落ち込んだ気持ち晴らされた。

わが子の様子を頻繁に伺いに來てくれるお母様の腕に抱えられて先日見た窓の外には、色とりどりの花が植えられていたのを思い出す。

その時花の世話をしていたお爺さん…ルノー爺が皺くちやの顔をもっとくしゃくしゃにして笑いかけてくれたのが嬉しかった。

前世では両親の親、つまり祖母は早くに亡くなっていて一度も会ったことがなかったから、密かにお爺ちゃんというものに憧れていたんだよなあ。

今も窓の向こう側ではルノー爺が丹精込めて世話した花がこの世の春を謳歌しているのだろう。

実に平和でいいことである。

ルノー爺の話では、花壇には夏咲きの花も植えられているし、冬は寒さに負けて咲かないはずの花も魔法を使って咲くように改良したものを植えるから一年中花が絶えないんだそうだ。

初夏には見ていて涼しくなるような綺麗な青い花が咲く予定だとルノー爺が言っていた。

部屋から出るということが殆どないので、そんな些細なことでも貴重に楽しみだ。

もう少し大きくなって身体が丈夫になれば、玩具で遊んだり絵本読んだりできるんだろうけれど、現在は一日の大部分をベッドで転がっていることしかできない。

正直暇で暇でしかたがない。

調子がいい時にぼんやり起きていたら、訪ねてきてくれたお母様や使用人が本を読み聞かせしてくれたりはするんだけどね。

なんせここは文化レベルが中世の世界。

魔法のおかげで前世ヨーロッパ中世の技術や資源事情よりはましかもしれないけれど、やっぱり紙やら本やらは貴重で貴族の特権の一つでもあるのだ。

そのせいか子供向けの娯楽本が発展しているとは言いがたい。

ちなみに最近の読み聞かせは、始祖ブルミルとその使い魔がめぐった旅の足跡とその観光名所の見所情報本である。

いや、信仰する対象の足取りや遠い異国の風景を知ることができるといふ素晴らしい書物ではあるんだが、正直2歳越えただけの子供の読み聞かせにそれはどうよって感じた。

一応ファンタジー小説感覚で楽しめるし、貴重な外の情報だから勉強にもなるので真剣に聞いているけど。

もう少し健康になって動けるようになったら自分でも選べるようになるだろうし、しばらくの我慢かな。

一度童話とかないのかと舌足らずなりに必死で聞いてみたら、アベル様に聞かせられるようなお話ではとてもありません！と顔

を真っ赤にして断られた。

そういえば前世でも昔の童話は教訓的な意味合いが強くて子供向け
とは言いがたいものだったんだよね。エログロの意味で。本当は怖い
グム童話とかヒットしてたし。

図書館にあったの読んだけど、インパクト強すぎて未だに忘れてないよ。

子供時代から馴染んできたお話が血みどろだった衝撃はすごかった。
現代版はかなりマイルドに修正が加えられてるんだよね。

たしか兔さんと亀さんがかけっこする話も、最後は亀さんが待つて
あげて仲良くゴールしましたってのになってたし。

教訓意味なくね？過保護じゃね？って思うけど、それも時代の流れ
なのかなあ。

というかあの時の使用人さんほんとごめん。パウハラセクハラのも
りではなかったんだが。

うわああ、知らなかったとはいえセクハラワード言っちゃうだなん
て。

これが若気の至りか。恥ずかしい。ちよう恥ずかしい。

思わずベッドの上でじたばたしてしまう。が、すぐに息が切れて動
けなくなった。

女の子に下ネタ飛ばして後で恥ずかしくなる小学生男子か、俺は。
なんだか身体が赤ん坊になってるせいか精神的にも幼くなってる気
がするんだよなあ。

息を整えるためにゆっくり深呼吸をする。

呼吸が乱れて咳き込みでもしたら、割りと洒落にならないことにな
って寝込む羽目になるので慎重に、である。

その時ふつと視界の端に青い空が入り込んだので、なんとなくそち

らをまじまじと見つめてしまった。

青空である。

お父様の髪色のような藍色とお母様の目の色のような薄い水色がすうっと筆で描かれたように綺麗なグラデーションをしている。

静かに流されていく雲も柔らかい春独特の白で目に優しい。

この春もすぐに過ぎ去り、やがて夏が訪れるのだろう。

今年の夏は去年よりは穏やかになるといいな、と思う。

そうはいつでも以前の夏の話は、殆ど記憶に無いのだが。

どうにか無事に生まれて以来、俺の意識は断続的に周囲を認識する事が困難なほど朦朧となることがある。

一応体は弱いしながらも死にかけることはなく寝起きを繰り返しているはずなのだが、その間の記憶がまったく無いのだ。

夏の日差しの中で暫し微睡んだとおもったら、窓の外が秋景色に変わっていたということがあるほど長期的に意識を無くしたこともある。

ふっと意識が飛ぶのがよく似ているので、俺は「寝オチ」と呼んでいるが、本当に起きてから寝オチしていたのかと気づくくらいすこーんつと抜け落ちている。

なんとというか、身体と意識にずれがあるような違和感を覚えてしまうほど素晴らしい寝オチなのだ。

まあ、赤ん坊の身体に成人男性の意識が入り込んでいるせいで過負荷がかかっているのを遮断するための一種の防御反応なんじゃないかなと仮説は立ててみたんだが、真相は分からず仕舞いである。

そもそも神様の力で生まれ変わっているのだから、そこらへん気にしてもしょうがないのかもね。

生まれ変わって以来、暇な時間にぼんやり自分とはなんぞやと考えることもあったが、その答えも出てくれないまま。

時折前世が恋しくて抑えきれずに号泣して、周囲を慌てさせ自分も熱を出したりしたこともある。

必要な時以外は周囲に面倒かけないように泣く頻度を抑えようとしていたんだけどね。

突発的な何ともいえない感情に何度も涙を零してしまったから、結局普通の赤ん坊と同じだと思う。

まあ、育児ノイローゼの原因の高い割合を占める夜泣きはさすがに迷惑だから意地でもしなかつたけど。

乳母さんも雇われているとはいえ、いつも良くしてくれる人だから面倒かけたくない。

まあ、前世の記憶や知識を頭の中でずっと思い返して、生まれただけの頭脳に刻み付ける作業をしていれば少なくともその間はなんにも感じずにすむしね。

知識や記憶を忘れないためにも、将来の明晰な頭脳を目指すためにも早いうちから使っていたほうがいいだろう。

ついでに手足もちよこちよこ動かして、少しでも器用に動くように訓練している。

セルフ英才教育だが、やりすぎとは思わない。

だって前世のように身体が動いてくれないせいでひどい違和感があるから、少しでも早くそれを無くしたいし、貴族に生まれてしまったのだから将来の苦勞を少しでも減らすためにも行動するべきだと思っただ。

正直、思い通りにできずに焦る時がある。

だって中身は成人男性でも、アベルはまだ2歳の子供なのだから。

必死に周囲の状況を探っても、まだ幼い自分の行動範囲は狭く、情報はなかなか集まらなかった。

これは前世日本で標準的な生活をしてきた自分にとっては、結構なストレスだ。
テレビ、新聞、インターネット。情報化社会の象徴であるそれらはハルケギニアにはない。

身近に把握できていたはずの「世界」が、ここではとても遠い。情報は大事だ。知識も無くてはならない。
じゃないと「世界」と「自分」が見えなくなってしまう。

さあつと吹き込んだ風が、俺の髪を巻き上げた。
とても薄い水色。

お母様と似た色をしたそれは、綺麗だからと生まれてからは揃えるくらいにしか缺を入れられていない。

そのため大分伸びた髪は、これからも切られることはきつとないの
だろう。

ガリア王家の誇り。尊き蒼。永久なる栄光の象徴。
そう両親に撫でられ、褒められた色。

前世の父譲りの髪質で、どこまでも平凡な「俺」にお似合いの日本人らしい黒色はもうどこにも無い。

母さんと父さんは今何をしているのだろう。いつも一緒に過ごした友たちは。

そこに居たという存在ごと消えてしまった俺を取り残して、あの世界はどこにいつてしまったのか。

自分で選択した今この状況を後悔はしていないけれど、時々ふと訪れる郷愁は、自分にはなんともしがたいものだ。

まあ、それでもここで生きていくのだから、いつか慣れていくだろうと諦めているけれど。

神々の加護のお陰で得られた新しい人生は、最上といって良いほど恵まれたものだ。

神々に報いるためにも、以前のように中途半端で終わるようなものではなく、自分も周囲の人々も幸せで満ち足りた素晴らしいものにしていかなければ。

間違っても王族争いとか戦争とか謀略に巻き込まれて死亡、なんてことは絶対にいやだ。

俺は幸せ過ぎてたまらなくて、考えられないほど長生きして、色々な世界で色々なことを体験していきたいんだ。

これからハルケギニアが辿る混迷の未来を知っている者としては、なんて樂觀的なんだと思わないことが無いけど、皆の助けがあればきつと大丈夫。

…うん、すでに他人の助けを借りることが前提のライフプランだけど、自分の無力さをよく知っている俺としてはこれでも最良の計画なんだよ。

とりあえずの目標は、自分一人でもある程度行動できるようになることかな。

今のままじゃ情報収集も儘ならないしな！。

…自分の今の状態を改めて考えてみると、凄まじく苦労しそうな目標に、ふと気が遠くなりかけたのは内緒である。

ゼロの使い魔編 その1 (後書き)

- 1、主人公がハルケギニアにログインしました。
- 2、主人公が自らの置かれた状況を説明しました。
- 3、主人公が人生計画を定めました。

7月19日、後半の加筆修正を行いました。

その2（前書き）

オリジナルキャラクターの登場、原作キャラクターの崩壊が激しくなっていきました。

また多くのご都合主義、原作からの乖離も始まっていきます。苦手な方は、お気をつけください。

その2

読み終わった本を閉じて、テーブルに置く。

結構な時間夢中になっていたようで、窓硝子の向こうに見える太陽は大分位置を変えていた。

ん、と伸びをして、同じ姿勢をとっていたせいで固まった身体を解してやる。

天高く馬肥ゆる秋。

そんな前世日本の言葉がぴったりなほど空は晴れ渡っていた。

少し前まで残っていた夏の暑さは、秋独特の涼しさに変わっている。

お陰で最近は過ごしやすいし、成長することで身体が丈夫になったのか体調もいい。

主治医のピエール老が体力作りとして屋敷内の散歩を許可してくれるぐらいには健康になった。

それまでは自室に籠りきりのせいで、読書するか乳母やお母様と一緒に室内遊びするかしか暇つぶしが無かったので、本当に嬉しかった。

寝込むことが少なくなった分、人との会話や読書をする時間が増えて、情報不足へのストレスも軽くなったしね。

前世では意識することはなかったけど、健康でいるって本当に素晴らしい。

本を元の棚に戻しにいとごと、腰掛けていた椅子から立ち上がる。

この場所・・・ノートルダム家が所有する様々な書物を収める大図書室のことを俺は気に入っていた。

自室から出ることを許されてこの部屋を発見して以来、俺は体調と

暇が許す限りここに入り浸っている。

流石は大国ガリアでも一二を争う名門貴族の図書室。蔵書数が半端じゃない。

それ自体が貴重な書物を個人の所有物としてこれほど大量に所蔵している場所は、ハルケギニア広しといえどもここくらいだろう。

いや、本がポピュラーな現代日本の図書館でもこれだけ揃えられるかは疑問だ。

なんせ俺の通っていた大学の付属図書館よりも明らかに多いんだもの。

一体全部で何百万冊あるんだか。

元々読書好きで現在はあらゆる情報に飢えている俺にとって、そんな欲求を満たしてくれるこの部屋はまさしく天国。

ゆっくりと読書できるように椅子やテーブルも置かれているから、つつい時間忘れて没頭してしまうほどだ。

部屋いっぱい立ち並ぶ高い棚には、所狭しと言わんばかりに隙間なく本が置かれている。

まだ背丈がそんなに無い俺では、高い所にある本は取れないし戻せないで、態々この部屋と蔵書の管理している使用人を呼ばなければいけないのが難点だ。

それが彼らの仕事だとは分かっているんだが、元々が一般庶民なんのでその程度のことをやってもらうのが大変申し訳ない。

なので近くに人がいないときは、もっぱら手の届く範囲の本しかとらないようにしている。

今はまだこんな知識が欲しいというわけでもないで、目に留まったものを雑読できれば十分だしね。

それでも結構知識は溜まるものだから、読書って本当に大切だ。

もっていた本を収めるべき場所に差し入れて、また新しい本を選ぶ

ために棚を巡る。

現代日本を生きていた俺にとって、ハルケギニアの知識はあらゆるものが新しく面白。

剣と魔法の世界であるここの書物は、現実を書いてあるものでさえ不思議でいっぱい、特にファンタジージャンルが好きだった俺には嬉しいばかりだ。

俺のバイブルは指輪物語だし、ナルニア国物語、不思議の国のアリス、はてしない物語にハリー・ポッターなんかも大好きだった。映画も全作品劇場の大画面で見たよ。

特にロードオブザリングはちょこちょこ原作と違うところはあったけれど、完成度の高さと壮大さに感動して何度も見に行っただし、三部作全部のコレクション版DVDやサウンドトラックを購入したくらい大好きだった。

日本語訳版だけじゃ満足できなくて、分からない単語を辞書で引いたりインターネットで解説と考察を探したりして、苦労しながら原作を読み込んだなあ。

お陰で英語と国語の成績だけはいつも良かった。好きこそもの上手なれとはよく言ったもんだ。

その延長線でライトノベルにも手を出して、この世界の原作であるゼロの使い魔に出会ったんだよね。

ネットでよく見かけるルイズルイズはあみたいなの作文までには嵌り込みはしなかったけど、色々と斬新な設定で面白かった。

まあ、まさか自分がその世界に来ちゃうとは思いつけなかったけれど。

世の中何が起きるか分からないものだよね、本当に。

「アベル坊ちやま」

突然後ろから聞こえた声に驚く。

振り返ると使用人がすぐ傍に立っていた。

気づかないほど考えに夢中になってたんだなあ。

大好きなファンタジーのことになるはずと浸っていられるからな、俺。

前世でも教職目指すか、ファンタジー文学を研究するかで進路に大いに悩んだくらいだしね。

結局俺は二束のわらじを履くぜと、文学研究もできて教職免許もとれる大学の学部に進んだんだけど。

俺ってばわがままだなー。

…うん、分かってたよ。自分でも現実逃避してただけだって。

しかたないじゃん、人間辛い事からは逃げたがるのは本能なんだから。

ちなみに何故現実逃避していたのかというと、

「坊ちやま。そろそろジヨセフ殿下とオルレアン公がいらっしやるとの先触れがありましたよ。ご用意くださいな」

そう、ジヨセフとシャルル。

原作における無能王ジヨセフと悲劇のオルレアン公にこれから対面するからである。

まずは彼らと俺の関係について説明しておこう。
簡潔に言うに従兄弟である。

以前触れたと思うが俺の母フィオルデイリージ……長いので普段はフィーネお母様と呼んでいる……は、彼ら兄弟の父であるルイ二十世の腹違いの妹である。

つまりは彼らの叔母に当たるのだ。

まだフィーネお母様がユベールお父様 - 父のミドルネームである - とは婚約段階で王宮の離れに住んでいた際、幼い王子二人が王宮探検中に離宮へ迷い込んで来たのが出会いだっただろうだ。それ以来何かと縁が続き、フィーネお母様が降嫁した後も夫であるユベールお父様ぐるみで親しくしていたらしい。

数日前に、殿下方がノートルダム公爵家を訪問することが決定してから、飛び上がらんばかりに喜んだフィーネお母様がお話してくれた。

お母様は年の離れた二人の甥を実の弟のように可愛がっているのである。

お父様も、お母様との結婚の際にシャルル殿下に決闘を挑まれて規則で禁止されているからと断るのに苦労したと笑いながら思い出話をしてくれた。(なんでもお父様がお母様に相応しい男が見極めるためだったらしい。今では普通に仲良しだといっていた)

そんなお話は聞いていたものの、俺は彼らとは初対面である。

…彼らは違っらしいが。

そこら辺の事情は追い追説明していくとして、今は王子二人の前に出ても無礼では無いように身支度を整えなければならぬ。

とりあえず自室に戻らなければ。

図書室を後にして部屋に戻る道を辿りつつ、このハルケギニアに生まれての三年間で最大の試練をどう乗り越えようかと頭を痛ませた。

身支度等の準備が整った後、そのまま使用人を伴って、屋敷に複数ある応接間の中でも一等の客を迎える際に開かれる大応接室に向かう。

探検するほど広いこの屋敷は、いくつもの棟が敷地内に配置され、

それぞれが渡り廊下で繋がれて構成されている。

俺が入り浸っているお気に入りのお書室は一つの棟として独立しているし、ユベールお父様やその家臣団が執務をする棟もある。

大応接室は、正門から入れればすぐ正面に見える棟 - - 所謂屋敷の顔にあたる建物にある部屋だ。

まあ部屋というよりは、ちょっとした大きさのホールのような、とても広い空間なんだが。

他にも、俺やフィーネお母様たちの自室がある普段使いの棟や、住み込みの使用人たちが使ってる棟、一つ丸ごと倉庫にされてる棟もあるぐらいだから、このノートルダム家がとんでもなく広いことがよく分かる。

土地不足の日本では到底できない贅沢だ。大貴族マジすごい。

しかもそれら全ての施設がいつでも利用できるように管理されているのだ。

なのでノートルダム家で働く使用人の数は半端じゃなく多い。

警備の人たちを除いても、正規雇用の使用人だけで百人近いのだと乳母さんが教えてくれた。

しかもその殆どが平民。これは王族に連なる大貴族としては特異なことだ。

公爵ほど位の高い屋敷の使用人は、どんな些細な役目でも、教養をしっかりと修めた下級貴族しかなれない、とても名誉な仕事だ。

それをユベールお父様は自領の雇用を増やすために平民にも開放した。

まあ、当たり前のことではあるが、家の恥にならないように、貴族に仕えることを生涯の仕事に選んだ下級貴族出身の上級使用人たちが厳しく教育するらしいけど。

仕事も決して楽なものではないけれど、その分給料はいいし、周囲に尊敬されたり、女の子は礼儀がしっかりできているからと結婚する際に良縁を見つけやすくなるなどの多くの特典があるので、常に

人気の素晴らしい仕事なのだ。

まあ、この時代には珍しく、忙しすぎるせいで外との出会いがなく、結局屋敷内で同僚と結ばれる人たちばかりで、寿退社といったものは殆ど無いと笑ってたけど。

何よりこのノートルダム家は、横暴な奴が多い貴族としては珍しい善政を敷いているので、多くの領民に慕われていて、領主様の施しに恩返しがしたいという人たちが絶えないんだそう。

勿論正規雇用の使用人は全員住み込みなので、能力や人格などの基本的なことの選考や、暗殺やスパイなどの対策のためにもしっかりと篩ふるい落とされるけれど、その分貴重な機会を与えられた者は懸命に働く。

乳母さん自身は下級貴族出身で、身体の弱い俺のために特別に用意された治癒魔法の使える「貴族」だけど、同じ主のために働く彼らは大切な仲間で身分差など無いのだと微笑んでいた。

それを聞いて、この屋敷で働いている人たちが皆が、俺にとっても優しく誠実に接してくれる理由が分かった。

なんとというか、現代社会のビジネスライクな関係じゃなくて、それこそ一生を共にするっていう覚悟みたいなのがあるんだな。

現代人の価値観を持つ俺にはよく分からないけれど、それはきっと忠誠心と呼ばれるものなんだろう。

そんな時、大人の精神と知識を持って生まれたことが枷になっていると思う。

生まれつきまっさらな状態で貴族になった人は、そういう好意を自然に受け入れて報いることができると思うけど、俺はどうしても遠慮や申し訳なさ、照れが先に来ってしまう。

その分は、長い時間を共有することで乗り越えたいとは思っているけれど、そうはいかない事もある。

貴族、しかも王族に連なっているという大きな責任を負う役目を全うできるか。

ユベールお父様やフィーネお母様の姿を見ていると、これぞ正しく貴族という感じが伝わってくる。

けれど、自分もそうなるかと考えると無理というしかない。

俺の前世は、これという取りえのない普通の文系大学生で庶民だし、人生経験も社会に出る前の学生時代で終わっている。

知識や才能にも期待できない俺が、領民――最悪国民全員の命を背負えるとは到底思えない。

こんな将来への不安に悩み続けて生きていくぐらいなら、いっそまっさらな新しい命に生まれたほうが楽だったかもしれない。

最低でも自分の限界を認識して、早々と絶望することはなかったはずだ。

――無能で役立たずな自分は、他の人に迷惑をかけてしまう。

「…坊ちやま？」

後ろに付き従う使用人の声に、思考を打ち切る。

瞬間頭の奥深くを襲った馴染み深い鈍痛に、思わず足が止まった。やばい、ネガティブになってた。

俺の不調を察したのか、使用人が失礼しますと許可を願ってから膝を廊下につけて顔を覗き込んだ。

「血の気が引いていますね…。緊張していますか？」

ネガティブなことを考えてました、とは言えないので一応それに頷いておく。

すると使用人は安心させるように大丈夫ですと微笑んだ。

「以前いらした殿下方は立派なお人柄をしていました。坊ちゃんにもお優しくしてくれますよ」

原作のイメージしかないので本当かどうかは分からないけれど、実際に会ったことのある人が言うだからきつとそうなんだろう。

さ、御主人様と奥方様がお待ちですよと使用人が優しく手を引いてくれた。

その温度に、心が段々と落ち着いてくる。

…正直、自信は無い。

だけど優しいこの人たちのためになれるのなら、頑張りたい。

せめて、二人の王子の不興を買わない程度には。

血の気が引いて冷たい指がもう一つの手ですっかり暖められた頃には、暗い考えは消え去っていた。

かなりの距離と時間をかけてようやく大応接室にたどり着いた。

案内をしてくれた使用人とはここで別れることになる。

繋いだ手をぎゅと握り締めて、ありがとうとお礼を言う。

使用人はいいえと笑ってから、頑張ってくださいねと手を握り返してくれた。

飾り扉の傍に控えていた使用人がこちらに一礼して、重厚なそれを開けてくれる。

しっかりと手入れされた扉は、軋む音一つ上げず滑らかに開いた。

室内にはユベールお父様とフィーネお母様、客人を御迎えするための用意をして終わり隅に控えている上級使用人たちがいた。殿下方はまだ到着していないようだ。良かった。

とりあえず室内に入り、今日は初めて会う両親に朝の（もう昼過ぎだが）挨拶をする。

「おはようございます。ユベールお父様、フィーネお母様」

「おはよう、アベル。今日は体調が良さそうだね」

そう返してくれたのは、お父様。

もう五十歳近いはずなのに二十歳そこそこしか見えないという、恐ろしい若さを保った男性である。

しかも長く伸ばしたまっすぐな濃い藍色の髪と柔らかい目が良く似合う、線の細い美青年。

俺の髪の質と目の形はお父様譲りだ。

ガリア王国王軍の將軍を務めていて、この国の防衛の責任を一手に引き受けるとても多忙な方だ。

軍の事があるので普段は王都リュティスにある屋敷に滞在していて、領地の屋敷に帰ってくるのは本当に稀。

なんとか休暇を取って帰ってきてても激務でへろへろになっているし、帰ってきたら帰ってきたで、ある程度は家臣団が片付けておいてくれるとはいえ、領主にしか決済できない仕事もあって休む暇なく働いている。

そんな姿を見るたびに跡目を継ぎたくないとの親不孝者は思うのだが、優しいお父様は必ず家族の時間を作ってくれる。

俺とお母様の身体を気遣うとあまり遠出はできないから、家族と使用人を連れて庭でピクニックの真似ごとをするのだ。

無理に動くと後で地獄を見ると知ってはいるのだが、嬉しそうな両

親の笑顔を見ることができるといついはいはしゃいでしまう。とうに二十歳を超えた精神が、肉体と環境に引きずられて幼児還りしているというのは自分でも恥ずかしいのだが、嬉しいんだから仕方がない。

「おはよう、アベル。本当に今日は顔色が良いわ。やっと殿下たちにお会いできるわね」

そう笑いながら駆け寄ってきて、俺を抱き上げてくれたのはフィーネお母様。

お父様と同じ年頃なのに、やっぱり若くてとても綺麗な女性で、俺という子どもを産んだとは思えないほどだ。

青色というよりは水色といった方がいいようなふわふわの髪と目の色をしていて、俺の髪と目の色は彼女譲りだ。

特別な事が無い限り俺と二人して屋敷から出ることもないので、よく室内遊びの相手や絵本を読んで聞かせてくれる。

貴族の母親には、産んだ後の子どもを用人に任せっぱなしにして自分は社交の場に行くという者も珍しくないが、お母様はアベルの世話をするのが好きなのと笑ってそばにいてくれる。

使用人の皆はそんな俺たち家族を温かく見守ってくれる。

虚弱体質に生まれついた俺を、後ろ指さして嘲笑することもなく、ちっとも面倒臭がらずに世話してくれるのだ。

坊ちゃんは坊ちゃんですよ。

いつも俺の部屋から見える庭木の剪定をしてくれる、住み込み老庭師のルノー爺が言ってくれた言葉に、思ったとおりに行動することさえできないと小さく傷ついていた心がどれだけ救われたことが。

私たちは坊ちゃまが笑って暮らしていてくれれば幸せなんですよ。

他の子どもより格段に世話をかける俺を看病しながら、そうっと微笑みかけてくれたメイドたち。

初めて庭に出た俺が転びでもしたら大変だからと、いつでも転倒した体の下に滑り込んで庇えるように準備してくれた使用人たち。

優しい両親に、優しい使用人たち。

第二の人生で得た、広いけれど狭いこの屋敷にあるものが、俺の全世界で守りたいものだ。

お父様とお母様と一緒に三人座っても余裕のある、座り心地のいい長椅子に腰掛けて雑談をして客人を待つ。

今日読んだ本の感想を言うと、アベルはそう感じたのねと微笑むお母様。

お仕事の進行状況が結構いいので庭でまたピクニックをしようかと笑うお父様。

うん、幸せだ。

しばらくして、執事の一人が扉を開けて客人の到着を告げた。

お父様に長椅子から降りるのを手伝ってもらい、転倒防止のためにお母様に手を引かれて、殿下二人のお迎えのために玄関へ向かう。

待っているのは未来の凶王ジョセフとその優秀な弟オルレアン公。

彼らに見れば、俺のような小僧など吹けば飛ぶ木の葉のようなものだろう。

それでも負けられない。

俺みたいなチキンで役立たずな凡人にも、守りたいものがあるんだ。

その決意が握った掌で伝わったのか、お母様が緊張しなくても大丈夫よ、良い子たちだから、と励ますように笑った。

玄関に到着すると、高貴な客人の出迎えのために使用人たちも集まっていた。

背筋を伸ばして並ぶ彼らを視界にいれ、深呼吸をする。

…咽せてお父様に背中を撫でられた。

広い屋敷の広い玄関。ここに集まった俺の大切なものたち。

必ず守ってみせると再び覚悟を決め、門へと続く道に見え始めた人影を見つめた。

この世界に生まれ変わって以来、ずっと考えていたことがある。

ガリア王国名門ノートルダム公爵家。

それは原作に登場しない家の名前だ。

所詮、ライトノベルと現実の違いといってしまうえばそれだけかもしれないが、俺はある仮説を立てた。

本当は文章内に書かれていないだけで存在していたとしたら？

ガリア王族に連なる家としてシャルロット女王の即位の際にいたかもしれない。

彼女に成り代わって聖戦の発動を承諾したジョゼットを諫めていたかもしれない。

そして何よりも、ノートルダムの名が原作に登場しないのは……ジョセフが即位した後、滅ぼされていたからだとしたら？

虚無に目覚め、凶王として覚醒したジョセフは、シャルルを殺した後酷く自暴自棄になっていたようだ。

その優秀な頭脳が霞んでしまうほどの愚行。それは一体どれほどのことだったんだろう。

魔法は使えず、始祖ブルミルを侮辱し、ロマリアとは仲が悪く、気まぐれに人を殺した。

もしも、無能王と呼ばれるほどの暴挙のなかに、貴族を殺したというものが含まれていたら？

事実オルレアン公爵家 - タバサとなったシャルロットの実家は不名誉印を押されている。

他の貴族が家ごと潰されていても、なんらおかしくは無いのだ。

貴族が処断された後、残されたものの末路は悲惨の一言に尽きる。

不名誉な理由で解雇された使用人たちは、当然再就職先も見つかりにくく、運良く仕事にありつけなければ、奴隷に身を墮とすか野垂れ死ぬかなのだ。

この先の未来で、ノートルダム公爵家がそうだったとしたら？
だから原作に登場していなかったとしたら？

それだけはどんな手を使っても回避しなければならない。

俺の全世界。この温かな人たちに報いるためにも。

そんなことを考えているうちに、使用人たちが姿勢を低くして礼の姿勢をとる。

遠かった人影たちは、あっという間に近づいていた。

両親も姿勢を正し、無礼にならない程度に彼らを見つめる。

青い髪、そして最上級の服装をした二人の貴人と護衛であろう騎士が数人。

俺は自分でも分かるほど緊張していて、お母様の後ろに隠れながら、自然と視界ごと俯いてしまう。

「久しぶりだな、ユベール。それにフィーネ叔母様も今日は元気そうだ」

「お久しぶりでございます。ジョセフ殿下もお元気そうでなによります。奥様とイザベラ様はいかがですか？」

「やあ、ユベール久しぶり、と言ってもこの前王宮の会議で会ったね」

「あの時は仕事で忙しくて、ほとんどお話もできませんでしたが。」

ノートルダムへようこそ。ジョセフ殿下、オルレアン公」

頭の上で交わされる楽しい会話に、なんだか拍子抜けしてしまう。和やかだ。いや、仲が良いとは聞いていたけど、なんかすごい笑い声とかするし。

そんな場の様子に、ガチガチに緊張していた自分がアホらしくなって、気を抜いたその時。

「おお、アベル。大きくなったな、お前も元気にしていたか？」

いきなり名前を呼ばれて、心臓が飛び出るかと思った。

「本当だ、随分と大きくなったね。前に兄さんと一緒にノートルダムに来たのは二年前だから、男の子はこれくらい大きくなるものなのかな？ シャルロットはやっと二歳だけど、女の子だから比べられないしね」

「そうですね、子どもの成長は早いですから。私も王都から帰ってくる度に大きくなっているのを見て驚きますよ」

「以前いらつしゃった時はまだ一歳で、ちょうど季節風邪で寝込んでいましたしね。さ、アベル。殿下たちにご挨拶を」

ついに来てしまったのだ。この時が。

ここで説明しよう。

俺がこの家を守るために、知恵熱出しつつ三日で考え出した作戦。名付けてノートルダム公爵家お取り潰し回避大作戦。

まずジョセフとシャルルに完璧な挨拶をし、こいつ侮れねエと思わせる。

そしてその後応接間での雑談の際に、純真無垢かつ無邪気でキュートな子どもを演じ、挨拶をした時との落差で何こいつ可愛い！守っ

てあげたい！と思わせるのが目的である。
つまりはギャップ萌えである。

お前バカじゃねーのと思う方もいるだろうが、ちゃんと勝算はあるのだ。

神々からもらった加護の一つである、庇護欲を誘う力。
これを生まれて初めて使う。

今までは周囲には優しい両親や使用人ばかりで使う理由が無かったのと、正直軽度の洗脳である力が怖くて使えなかったのだ。
ただど必要に駆られた今なら躊躇なく使う。

怖がっている場合なんかじゃない。

お母様の手が俺の背中に添えられ、やさしく前に押し出される。
下を向いた視線には二人の足が見えた。

ヤバイ緊張する。

まずは完璧な挨拶だ。

なんせ両親直々にここ数日間で、殿下たちに失礼の無いようにと挨拶の仕方を優しいスパルタで叩きこまれたのである。

頑張れ俺。大丈夫きつとできる！

そう自己暗示すると共に、庇護欲庇護欲と心の中で唱える。

いや、だってどうやったら加護を使えるか分からないだよな。

まあ、いざという時に役に立たないだなんてことは、あの優しい神々に限って有り得ないだろうからきつと大丈夫…だと思う。

俯きながら姿勢をただし、息を吸い込んで頭を下げる。

「ご尊顔を拝し、恐悦至極に存じ奉ります。ジョセフ殿下、オルレアン公。わたくし、ノートルダム公爵家のアベル・サンタムールと申します」

よし、噛まずに言えた！ 転生してまだ体が幼いせいか、どこか舌
足らずなのはご愛嬌だ。

後ろの両親からもほっとしたような気配がする。

客人たちの審査にも合格したのか、威厳のある声が微笑ましさを滲
ませながら顔を上げる許可を出してくれたので、今までずっと俯か
せてた顔を上げた。

そして青い色をした二人分の目と視線があった次の瞬間。

ぱったりと。

二人の王子がひっくり返った。

その2（後書き）

- 1、主人公は試練の前に現実逃避していました。
- 2、主人公が大切なものを守る覚悟を決めました。
- 3、主人公の先制攻撃。ガリア兄弟へのこうかはばつぐんだ！

11月01日 主人公とお父様の名字についての間違いを修正しました。

11月02日 原作開始との辻褄を合わせるためお話の時期を変更しました

それに合わせてシャルロットの年齢を変更。

主人公はイザベラより一つ歳下でシャルロットより一つ歳上の3歳になりました。

07月29日 加筆修正しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6259o/>

チキン異世界漫遊記

2011年7月29日23時51分発行